常陸一騎山

茨城県那珂郡

大宮町教育委員会

常陸一騎山

茨城県那珂郡

大宮町教育委員会

序

石をもて追わるるごとく故郷を出奔した石川啄木でさえ，ふるさとに対して無限の愛着を感じて次のように詠んだ。

ふるさとの山に向ひて

言ふことなし

ふるさとの山はありがたきかな『一握の砂』

思えば，はるかなる悠久の流れのなかで，私たちの今日の生活は支えられている。決して偶然ではなく，それは遠いわれわれの先人たちが築きあげた文化を継承し，その息吹きに触れながら郷土の地域づくりに渾心の努力をはらっているのである。

現在，開発という名のもとにわが大宮町の貴重な文化財が失なわれつつある。とくに最近の乱開発は，加速度的に山紫水明の自然環境をも破壊している現状であるが，われわれは郷土の先人たちの意をつぎ，明るく住みよい生活環境を後世の子孫に伝える使命と責務を深く痛感するのである。

本書は，そうした意味から古代郷土のあけぼの期における先人たちが残した輝やかしい文化を，ひろく皆さんに紹介し，遺跡や遺物に対する関心と理解を深め，郷土の新らしい未来を築く力を得るようにとの願望から編纂したものである。切に皆さんのご協力を期待してやみません。

終りに，発掘調査にあたられました，県教育委員会，県立大宮高等学校をはじめ，数多くの関係者各位のご尽力に対し，心から深甚なる感謝を申上げる次第です。

昭和４９年３月

大宮町長　岡部勝

序

このたび県教育庁文化課ならびに県立大宮高等学校の諸先生・生徒諸君のご協力を得まして，一騎山遺跡群の発掘調査を完了することができました。本報告書の発刊にあたって厚くお礼を申上げる次第です。

この遺跡群の所在する上村田高野坪の台地は，古くから倭文(しどり)文化圏を形成した私達の祖先が住みついたところで，宮陸風土記にも静織(しどり)の里としてみえています。すでに多数の先人たちがそこに住居を構え，狩猟や農耕にいそしんだものであろうと思います。「朝日さし夕日かがやく」といった，当時の繁栄を回想するときに，言い得ぬ郷土の足あとの重みを痛く感じるのであります。

よく歴史は繰返すといいますが，倭文文化が栄えたこの上村田の台地上に，県立大宮工業高等学校が建設されることになりました。科学文化の粋を創造する白亜の殿堂が整備されるに及んで，ふたたび文化が蘇えろうとしているとき奇しき因縁をみる思いがいたします。

今回の発掘調査により，古代の郷土の姿が解明され，町にとってかけがえのない貴重な遺跡，遺物を発見できたことは，まことに欣快に堪えない次第です。これらの出土品は大切に保存し，郷土の黎明期に活躍した先人たちの遺業をしのび，あわせて文化財に対する認識と遺跡愛護の精神を昂め，郷土愛の心を培う絶好の機会となりました。これを契機にますます郷土発展のための源泉力をひきだすよう心がけたいと存じます。

最後に，発掘調査に関係せられた各位に，重ねて謝意を表わし，尊い祖先の文化財が教育的に，また文化的に当町の住民たちに活用されるようお願いいたします。

昭和４９年３月

大宮町教育長　金子義

常陸一騎山

高根信和編

高村　勇　　山本貴之
荻沼勇市　　小室　勉

例　　言

1. 本書は，昭和４８年８月６日から，同年１０月２１日までに実施した，茨城県那珂郡大宮町下村田・上村田所在の県立大宮工業高等学校建設用地内の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本書の執筆は，各報文の末尾に氏名を記した，高根信和・高村　勇・山本貴之・荻沼勇市・小室　勉が分担した。
3. 本書の写真は，小室・高根が撮影したものを使用したが，遺物については，川崎勝平氏の撮影によるものである。
4. 本書に使用した図面は，調査に参加した全員の協力によるものである。なお，測図中の方位は，すべて調査時の磁針方位である。遺物の実測図は，小室・高村が作成し，図面の版下原稿は，小室・高根が作成した。
5. 本書の編集は，高根が担当した。

目　　次

序 …… ⅲ
例　言 …… Ⅷ
Ⅰ 序　　説 …… 1
1. 調査経過 …… 3
(1) 調査の契機 …… 3
(2) 調査団の構成 …… 3
(3) 調査の経過 …… 5
2. 環　　境 …… 9
(1) 地理的環境 …… 9
(2) 歴史的環境 …… 13
(3) 遺跡の立地 …… 15
Ⅱ 古墳群の調査 …… 21
1 号 墳 …… 23
2 号 墳 …… 26
3 号 墳 …… 37
4 号 墳 …… 53
Ⅲ 住居跡の調査 …… 83
1号住居跡 …… 86
2号住居跡 …… 87
3号住居跡 …… 89
4号住居跡 …… 90
5号住居跡 …… 92
6号住居跡 …… 94
土　　壙 …… 97
Ⅳ 考　　察 …… 99
1. 一騎山古墳群の提起する諸問題 …… 101
(1) 4号墳埋葬施設 …… 101
(2) 4号墳出土埴輪 …… 102
(3) 2号墳特殊遺構 …… 106
(4) 年代について …… 107
2. 住居跡群の考察 …… 108

図　版　目　次

PL.　1　遺跡遠景

1. 西側の台地から＜矢印＞

2. 東側の玉川から＜矢印＞

PL.　2　1号墳

1. 調査前墳丘（東から）

2. 調査後墳丘（南西から）

PL.　3　2号墳

1. 調査前墳丘（西から）

2. 調査区全景（南西から）

PL.　4　2号墳

1. 石　　室（南から）

2. 同　　上（南西から）

PL.　5　2号墳

1. 石室及び排水溝（北から）

2. 敷石遺構（東から）

PL.　6　3号墳

1. 調査前墳丘（南東から）

2. 調査区全景（南から）

PL.　7　3号墳

1. 石　　室（北から）

2. 石室裏込め除去後（北から）

PL.　8　3号墳

1. 石室閉塞（南から）

2. 石室奥壁裏側（北から）

PL.　9　3号墳

1. 石室西壁

2. 石室東壁

PL.　10　3号墳

1. 直刀出土状況

2. 玉類出土状況

PL. 11　4号墳
1. 調査前墳丘（西から）
2. 同　上　（南から）
PL. 12　4号墳
1. 埋葬施設（東から）
2. 同　上　（西から）
PL. 13　4号墳
1. 埋葬施設内部（西から）
2. 埋葬施設粘土除去後（東から）
PL. 14　4号墳
1. 副葬品出土状況
2. 直刀・玉類出土状況
PL. 15　4号墳
1. 埴輪出土状況（北側クビレ部周溝内）
2. 同　上（後円部東側周溝内）
PL. 16　住居跡
1. 1号住居跡（東から）
2. 2号住居跡（南から）
PL. 17　住居跡
1. 3号住居跡（南から）
2. 4号住居跡（南から）
PL. 18　住居跡
1. 5号住居跡（西から）
2. 6号住居跡（南から）
PL. 19　直　刀
1～3. 3号墳出土
4. 4号墳出土
PL. 20　鉄　鏃
1. 4号墳出土
2. 3号墳出土
PL. 21　玉　類
1. 3号墳出土ガラス小玉・棗玉
2. 4号墳出土管玉・ガラス小玉

3. 3号墳出土切子玉

PL. 22 古墳出土土器

1. 2号墳出土提瓶

2. 左 同（裏面）

3. 3号墳出土甕形土器（口縁部片表面）

4. 左 同（胴部片裏面）

PL. 23 埴 輪

1. 武人埴輪頭部（正面）

2. 左同（側面）

3. 男子埴輪頭部（正面）

4. 左同（側面）

PL. 24 埴 輪

1. 男子埴輪頭部（正面）

2. 左同（側面）

3. 武人埴輪頭部（正面）

4. 女子埴輪頭部（正面）

PL. 25 埴 輪

1. 動物埴輪

2. 人物埴輪片

3. 人物埴輪片

PL. 26 埴 輪

1. 人物埴輪片

2. 人物埴輪片

PL. 27 埴 輪

1～4. 円筒埴輪

PL. 28 埴 輪

1. 円筒埴輪

2. 朝顔形埴輪

PL. 29 住居跡出土土器

1. 5号住居跡出土甕形土器

2. 5号住居跡出土甕形土器

PL. 30 墨書土器

1～4. 4号住居跡出土

PL. 31　土製品・石製品

1. 2号住居跡出土砥石
2. 6号住居跡出土ノミ形石器
3. 6号住居跡出土土製紡錘車
4. 6号住居跡出土石製紡錘車

PL. 32　周辺の古墳

1. 鰾塚古墳（南から）
2. 五所皇神社裏古墳と丸山古墳（矢印右が丸山古墳，南西から）

挿　図　目　次

第１図　大宮町位置図 …… 10
第２図　遺跡位置図 …… 12
第３図　一騎山古墳群分布図 …… 16
第４図　遺跡地形図 …… 19
第５図　１号墳墳丘実測図 …… 24
第６図　１号墳出土鍔 …… 24
第７図　１号墳調査区域図 …… 25
第８図　２号墳墳丘実測図 …… 27
第９図　２号墳調査区域図 …… 28
第10図　２号墳墳丘断面図 …… 29
第11図　２号墳排水溝実測図 …… 29
第12図　２号墳石室実測図１ …… 32
第13図　２号墳石室実測図２ …… 33
第14図　３号墳墳丘実測図 …… 38
第15図　３号墳調査区域図 …… 39
第16図　３号墳墳丘断面図 …… 41
第17図　３号墳石室実測図１ …… 44
第18図　３号墳石室実測図２ …… 45
第19図　３号墳石室内遺物配置図 …… 47
第20図　３号墳出土直刀 …… 48
第21図　３号墳出土鉄鏃 …… 49
第22図　３号墳出土不明鉄器 …… 49
第23図　３号墳出土玉類 …… 51
第24図　４号墳墳丘実測図 …… 54
第25図　４号墳調査区域図 …… 55
第26図　４号墳墳丘断面図 …… 57
第27図　４号墳埋葬施設実測図 …… 63
第28図　４号墳出土直刀 …… 66
第29図　４号墳出土鉄鏃 …… 66
第30図　４号墳出土玉類 …… 67
第31図　４号墳出土円筒埴輪１ …… 68

第32図　4号墳出土円筒埴輪2 …… 69
第33図　4号墳出土朝顔形埴輪 …… 75
第34図　4号墳出土人物埴輪1 …… 76
第35図　4号墳出土人物埴輪2 …… 78
第36図　4号墳出土人物埴輪3・動物埴輪 …… 80
第37図　住居跡全測図 …… 85
第38図　1号住居跡実測図 …… 86
第39図　2号住居跡実測図 …… 87
第40図　2号住居跡出土土器 …… 88
第41図　2号住居跡出土砥石 …… 88
第42図　3号住居跡実測図 …… 89
第43図　4号住居跡実測図 …… 90
第44図　4号住居跡出土土器 …… 91
第45図　4号住居跡出土鉄片 …… 92
第46図　5号住居跡実測図 …… 93
第47図　5号住居跡出土土器 …… 94
第48図　6号住居跡実測図 …… 95
第49図　6号住居跡出土土器 …… 95
第50図　6号住居跡出土鉄片 …… 96
第51図　6号住居跡出土土製品・石製品 …… 96
第52図　土壙実測図 …… 97

付　表　目　次

付表1　3号墳出土切子玉計測値 …… 50
付表2　3号墳出土ガラス小玉計測値 …… 50
付表3　4号墳出土円筒埴輪計測値 …… 70•71

Ⅰ. 序　　説

1　調　査　経　過

(1)　調査の契機

昭和４８年３月，県議会において来春開校予定の県立高校２校の建設費が承認された。その一校である大洗高校建設予定地に遺跡が確認され発掘調査することになった折残る一校である大宮工業高校敷地約7.2ｈａの文化財の有無について調査するに至った。

これは，今まで町当局・県教育庁財務課との折衝の過程の中では，文化財については，話題にのぼらなかったし，勿論文化課でも把握していなかったからである。

折しも春雨のふりしきる昭和４８年４月１０・１１日の２日間における調査は，すでに山林を伐開した敷地の大半と，西側の畑地内で実施し，山林内より古墳４基，畑地内で遺物の散布地を確認した。

この結果をもとに大宮町・県教育委員会との間に数回にわたり検討がなされた。

本敷地内の遺跡を一挙に失うことは，文化財保護の立場からも忍びないものであったが幸い大宮町当局は本遺跡の重要性を認識し，県教育委員会との協議の結果遺跡の一部を保存することでその合意に達した。そして他は発掘調査を実施することになった。

調査の主体は町が県費補助をうけ実施することになったが，その発掘調査は県教育委員会に委ねられたので，その責任の重大さを感じながら引受けた。

すでに昭和４９年４月開校というあわただしさの中での調査は充分に記録されたこととは考えられないが，はからずも我々の調査した範囲においてはそれだけに自信をもっている。

このたびの調査の実施にあたり，当地域住民の文化財に対する理解も深まり，住民の協力を得て，調査団を編成し，昭和４８年８月６日より１０月２１日まで関係各位より多大の支援を得て実施した。

(2)　調査団の構成

調査は，県教育庁文化課職員が担当し，高根が現場を指揮した。調査団の構成および参加者は以下の通りである。

調査団長　　金　子　義　一　（大宮町教育長）
調査顧問　　宇　野　悦　郎　（県立大宮高等学校校長）
調査主任　　高　根　信　和　（県教育庁文化課主事）

事務局　横山秀雄（大宮町教育委員会事務局）
鴨志田鶴吉（同上）
佐谷順（同上）
茅根義雄（同上）
永井福二（同上）
片岡正子（同上）
小林千里（同上）

発掘調査参加者

県教育庁文化課職員　板垣久敬・大森信英・大森義章・小泉いつ子・高根信和・高橋杏二・丹野優・西宮一男・細谷弘一・山本貴之

県立大宮高等学校教員　石井卓爾・宇野寿男・飛田彊・東谷満也・中崎祥子・細谷篤正・森山勝

国学院大学学生　岩本克昌・荻沼勇市・桜井二郎・橋脇俊次・望月茂昭

立正大学学生　小室勉　茨城大学（卒）　高村勇

県立大宮高等学校生徒　青木泉・青木正・青木暁子・阿久津寿恵・阿久津伸子・安島稔・飯田由紀子・宇留野敏子・宇留野睦・大賀栄治・大賀栄・大賀真由美・大串弘子・小田部敬子・葛西文義・柏一郎・加藤寿美・神永ます美・神永由美子・鴨志田恵司・川和恵子・菊池治夫・小泉一己・小林弘道・小林豊・斉藤昭・笹沼春枝・柴田清子・柴田よし江・島田昭博・島根幸子・関晶子・関つな子・高達和茂・滝真知江・竜崎正勝・茅根知子・寺門淳一・寺門典夫・飛田吉弘・中崎久美子・中橋昭夫・萩谷悦子・浜野一子・平山徹・藤田賢一・二方勝美・細谷澄江・山崎孝雄・和田昭一・渡辺博・綿引典子

阿久津弘・海老根武二・近江清・河野平重・菊池よし美・木村幸三・小池ゆき江・小林なつい・高岡二郎・寺門あき・富山竹之介・富山長之介・内藤節子・生天目まさ・福田きよ・増子はな・増子よで・宮嶋勝喜・山崎あや子・山崎とく子・山崎美智子・綿引久子

遺物整理参加者

岩本克昌・荻沼勇市・木村幸三・小室勉・高根信和・高村勇・富山竹之介・橋脇俊次・宮嶋勝喜・望月茂昭

このほか，調査員・学生の宿舎として自宅を提供していただき，親身の御世話を下さった富山誠一氏御夫妻に対して心から感謝の意を表する次第である。また，県内研究者の方々からは，

調査期間中をはじめ本書が完成するまでに種々の有益な御教示やはげましをいただいた。記して謝意を表したい。

(3) 調査の経過

概　　要

本遺跡群の発掘調査は，昭和４８年８月６日灼熱の太陽下において開始され，１０月２１日秋雨の降りしきるなか宿舎をあとに引きあげるまでの約３ヶ月間であった。

すでに分布調査により古墳の位置は確認されていたが，なにしろ山林なので雑木の伐開から開始した。土師の散布地は現地調査からすでに４ヶ月を経ているので背丈もある雑草が茂り，遺跡の存在すら判明できぬほどであったので調査の諸準備に充分時間をかけた。

はじめ古墳と散布地を平行して調査をすすめる計画であったが，作業員の確保が思うようにいかず，器材・材料の購入も充分でないなどから結局古墳（４号墳）から調査することにした。

丁度，折しも大宮高校は野球で甲子園出場をめざし，全国へテレビ放映され町全体が盛り上りムードで一ぱいであり，以前高校生の協力を求めていたが，この決着がつかないと協力がえられなかった。結果は惜敗したが，みんな元気に全遺跡の伐開・草刈り作業から参加し調査がはじまった。

古墳の調査　古墳は４基調査した。北より一騎山１～４号墳と命名した。

４号墳は，最初に調査した古墳である。円墳と思わせる墳丘より埴輪が出土し，埴輪・周溝をおいながら前方後円墳であることを確認し，ほぼ８月いっぱい生徒諸君の手により発掘した。

３号墳は，作業員が確保された９月から開始した。横穴式石室を有する円墳でしかも未発掘の古墳であることが判明し，遺物も直刀・玉類が出土し，今調査中多くの副葬品を有する古墳であった。

２号墳は，９月から調査を開始した。墳丘が削平され，主体部は盗掘にあっていたが，調査方法の工夫により思いもよらない遺構を発掘することができた。

１号墳は１０月に入りすでに復元保存が決定していたので，トレンチを入れ，周溝を確認し，盗掘穴をうめもどし，保護柵を設けた。

住居跡の調査　住居跡の調査は，９月から開始し，ほぼ，古墳と平行してすすめた。8月8日東西に一本トレンチを入れ発掘した結果，耕作土が深く，耕作により天地かえしが行なわれ，遺構の保存状態がきわめて悪いという判断にもとずき，重機を入れ，耕作土を排除し作業員数名という思条

件にもめげず，在京の大学生諸君の援助により進めた。その結果，６基の住居跡と，１基の土壙を発掘した。

遺物の整理　調査の結果出土した遺物は，下村田田園都市センターへ運び，整理され，更に大宮町役場第４会議室において，遺物の水洗・注記・復元・実測・写真撮影に主力が注がれ，これが１２月まで続けられた。この期間中遺跡は残っていたので不備な点は現場で補足した。

整理終了後原稿作成を開始し，ほぼ３月初旬脱稿のはこびとなった。

調　査　日　誌

Ⅰ期（４８.８.６～８.１０）

８・６　午前１０時一騎山に集合，本日から発掘調査がはじまる。金子大宮町教育長からあいさつ，県立大宮高等学校生徒諸君により，遺跡全体の草刈り，伐採，用具類の調達。

８・８　４号墳トレンチ設定，６,０００㎡の包蔵地に試掘トレンチ一本設定，発掘，遺構なし。

８・１０　４号墳の２Ｔにおいて粘土発見，主体部を確認する。

Ⅱ期（８.１１～８.２０）

８・１１～１２　重機にて６,０００㎡の耕作土層を全面除去する。管理棟の建設。

８・１３　４号墳トレンチ設定，周溝発掘，埴輪出土。

８・１４～１６　盆のため作業中止。

８・１８　ベルトコンベア（２台）搬入，４号墳主体部拡張。

８・２０　人物（武人）埴輪出土。

Ⅲ期（８.２１～８.３１）

８・２２　４号墳後円部周溝内埴輪整理。

町長現場へ視察。

８・２３　教育庁板垣文化課長，丹野庶務係長，大森主事現場へ。

８・２７　主体部を中心にセクション・ベルトを残し，主体部内の清掃。遺物検出されず。

８・３０　夏期休業も終り大宮高校生とも今日で別れ。町教育長あいさつ。

８・３１　作業員今日より入る予定であったが確保等の手ちがいにより，能率が極端に低下する。

Ⅳ期（９.１～９.１０）

９・１　４号墳主体部内精査中，鉄鏃出土。

３号墳トレンチ設定．東西，南北二本。県山本教育長・斉田財務課長・麻生係長一行現場へ。

９・２～４　４号墳主体部セクション作成，実測。

９・５～７　雨天のため，現場管理棟の清掃。下村田田園都市センターにて埴輪水洗。

９・８～１０　４号墳主体部鉄鏃石膏でかためてとりあげる。住居跡の調査に入る。６基の住居跡を確認する。

Ⅴ期（９.１１～９.２０）

9・11　主力を2・3・4・5・6号住居跡の調査にむける。敬老の日で連休も入り作業能率低下する。

9・13　教育庁高橋文化課長補佐，丹野庶務係長現場視察

Ⅵ期（9.21～9.30）

9・21~22　雨作業中止

9・24　3～6号住居跡の清掃，写真撮影

9・26　1号墳全測・実測・町文化財審議会員見学，町収入役見学

9・28　3号墳遺物検出（直刀，切子玉，小玉，鉄鏃）

Ⅶ期（10.1～10.10）

10・2　2号墳周溝の掘り下げ，排水溝発掘。3号墳石室実測図作成。住居跡実測図作成。

10・6　1号墳トレンチ設定。

10・7～8　雨のため，センターより大宮町役場へ遺物を移す。

Ⅷ期（10.11～10.20）

この期間は，記録による作業を中心として，補足調査を実施する。各古墳の実測図の完成，及び各住居跡の実測，及び写真撮影を行う。

保存が決定している1号墳の保存エリアを設定する。

Ⅸ期（10.21～10.30）

10・21　雨，宿舎の撤去作業，大宮高文化祭，一騎山古墳の出土品を展示したので見学にいく。

10・25　作業を大宮町第4会議室に移す。遺物をほどき，水洗開始。小室，高村中心に遺物の実測，本書刊行に亘る作業がここにはじまった。

遺物の記録は，出土地点ごとに各記入し，写真で記録した。

Ⅹ期（10.31～11.10）

遺物の復元作業を中心にすすめる。実測を終った遺物，特に埴輪の復元を主としてはじまる。

Ⅺ期（11.11～11.20）

調査概要作成，住居跡遺物復元，調査記録不備なもの補足し完了する。

Ⅻ期（11.21～11.30）

報告書のレイアウト検討会。執筆原案をたてる。

XIII期（12.1～12.10）

すべての作業が完了する。遺物の写真（報告書用）撮影。

XIV期（12.11～12.24）

整理作業終了，原稿作成に入る。町長及び教育長へ，調査概要を説明する。約4ヶ月間すごした大宮町をはなれ一路水戸へ帰る。

XV期（12.25～3.31）

報告書の編集会議をもって，内容に関する検討・執筆分担について，印刷用図版作成した。

昭和４９年２月２８日原稿〆切り，編集し，数日の修正後印刷所へ原稿を入れた。３回の校正後，本報告書を完成し調査はすべて終了した。

なお，整理後の遺物は，大宮町教育委員会が保管し，一部は大宮町福祉センターに展示し，町民に公開している。

（高根信和）

2　環　　境

(1)　地理的環境（第1，2図）

茨城県は関東地方の北東部に位置している。東は広大な太平洋に面し，北は福島県，西は栃木県に接し，南は利根川により千葉，埼玉両県に界している。

まず本県の地勢の大要を概観してみよう。北部に八溝，久慈，多賀の諸山地，県中央部から以南は平野あるいは台地地形が広がっている。この平野はいうまでもなく関東平野の一部分を形成していることになる。諸山地はそれぞれ久慈川，里川などで分離しており，八溝山地が南部に走っている途中を横切って那珂川が流れている。加波山より筑波山にかけての山域は八溝山地の最南端部にあたり，久慈，多賀両山地は阿武隈山地の最南部にあたる。県南部の平野，台地はすでに常総台地であり，北浦，霞ヶ浦の湖が満々と水をたたえている。なお本県の海岸線は比較的単調であり，なかでも大洗から波崎あたりにかけてはほとんど直線といってもよい程出入りがみられない。

ところで遺跡所在地の大宮町及びその周辺についてはどうであろうか。その特質をみてみよう。

大宮町全域についてみると，その大部分は台地あるいは山地状の地形によって占められている。平野は町の東南部及び西部の久慈川やその支流付近に発達しているだけである。

さて，5万分の1の地形図をみると，本地域は3つの台地，2つの低地から成り立っていることが知らされる。これらを東側からみていくことにする。

大宮町の東端すなわち金砂郷村との境界線付近は標高１５２m（塩原東側）を最高点としてほぼ南北に台地状に走っている。この台地は金砂郷村花房で大宮～太田を結ぶ国道により切断されているが，花房以南においても５０m前後の丘陵となって那珂台地に接続している。東と西はそれぞれ浅川と久慈川とにより挟まれている。台地から流れ出す川はないが，谷地形がよく発達しており，これに沿って水田が山間部まで入っている。富岡と塩原付近で断層線が走り，北部は岩崎付近で一時切断されるが，そのまま久慈山地に連結している。

次に久慈川を中心とする大宮町東部低地がある。地質学的には久慈川低地といわれる地域の北端部に相当する。岩崎以南に延長10km，巾1～2kmを占める地域である。一面の水田地帯になっているが，土質は砂を主とするもので良好とはいえない。南部には自然堤防もみられ，平地が開けているが，大宮以北においては八溝・久慈両山地を分断する形で久慈川が南流していることからその侵蝕による河岸段丘が発達している。なお久慈川は岩崎地内で大きくS字状に蛇行しており，このあたりが上・下流を分ける境目にあたるのではないだろうか。大宮町以

第1図　大宮町位置図　　1：200,000

南において自然堤防がみられることからも，この付近から侵蝕作用はほとんど行なわれず，むしろ堆積作用にその重点が移行していくものと推定できる。そして瓜連町付近で流れる方向も東に変わり太平洋にそそぎ込むのである。

現在大宮の市街地として発展している地域が久慈川と玉川に挟まれた台地である。地理的には古来より最も栄えており，佐竹氏の出城としての部垂城が台地の東端に築城されていたらしく，今でも城跡が大宮小学校の地に残っている。また近世にも棚倉街道の宿場町としての機能を負わされたのがこの台地であった。富士山あたりをその南端として北北西に細長く伸びている。その巾は1.5km前後であり，八溝山地の一角に食い込む北部で標高１００m前後，現市街地で５５m，富士山で４７.５mと南にゆるく傾斜している。今では台地の中心部を国道１１８号線がほぼ南北に貫通し，その西側を水郡線が走っている。全体に平坦であるが，町並などはどちらかというと台地東端に片寄っている傾向がみられる。

この台地の西側にうなぎの寝床のように細長く続く低地がある。ここを流れるのが『常陸国風土記』にその名を見せる玉川である。古来よりその名が知られている川ではあるが，大きなものではなく，大宮町北西部の小貝野に源を発する久慈川の支流である。下岩瀬で久慈川に合流している。全長およそ20kmであろうか。この地域は広い所でも巾1km程度であり，その大部分は水田となっている。

さて今回調査した一騎山遺跡のある台地はこの玉川と那珂川とに挟まれて位置している。この台地もその北部において八溝山地につながり，南部は久慈・那珂両河川に囲まれた那珂台地の一部分を成している。北部の小貝野付近で標高１６０m，塩子で１２８mと南にくるにつれて低くなり，村田で１００m，という数字を見せている。遺跡のある地点は台地の中央部東端に位置し，標高５０m前後で玉川を見おろす場所である。那珂川は台地の西側を南東に流れており，支流のひとつである緒川は台地の北西部を南流し，御前山村野口で本流と合流している。なお一騎山遺跡の南方においては谷状の地形が山間部までくい込み，水田として利用されており，また遺跡の北西2.5kmの地には農林省・放射線育種場が建てられている。

以上の概観でわかるように大宮町は八溝・久慈両山地から伸びた３本の丘陵とその間に展開する低地とから構成されている。なおこの地域の特色として記すべき点は，久慈・那珂両河川の間が最も接近しているということである。その距離を計ると，桂村栗～大宮町泉間で5kmに過ぎない。遺跡を挟んで計測した場合でも6kmという値を示し，結局大宮町付近ではどこをとっても５～6kmの巾しかなく，その間に大宮町のほぼ全域が含まれているのである。現在の地形から推定して遺跡が営まれた時代においてもその流れがそれほど変わっていたとは考えられない。人間が生活していく上で水が基本となることは今も昔も変わりない自然の原則である。両河川に挟まれた台地上に各時代の遺跡が点在していることをみても，大宮という地の繁栄は久慈川・那珂川の自然の力に負うところが大きいと考えざるを得ないのである。

第2図　遺跡位置図

1. 一騎山古墳群・遺跡　2. 愚塚古墳　3. 五所皇神社裏古墳・丸山古墳

最後に大宮付近の地質について一言述べておこう。

表層地質だけをみると低地はすべてシルト及び粘土から成る沖積層堆積物であり，台地はその周辺部が砂岩や礫岩から成る新第三紀層，中央部が洪積世の関東ローム層である。(1)

表層地質だけをみると以上のようであるが，本地域の主体となるのは新第三系の各地層である。下位より国長層，小貝野層，桜本層，玉川層，坂地層，荒屋層，瓜連層となり，瓜連層は不整合で荒屋層にのっている。(2) そして南下するにつれてより新しい地層が見えてくる。一騎山遺跡付近は荒屋層が分布しており，この層の上に関東ロームを主とする第四紀層がのることになり，住居跡などはローム層最上部を掘り込んで建てられていたのである。遺跡周辺におけるローム層の厚さは不明であるが，遺跡の南東約4km瓜連町下大賀地内の柱状図(1)によるとおよそ１０mの厚さであることが知られるので，遺跡付近もその程度の厚さを推定することは可能であろう。

（高村　勇）

註

(1) 経済企画庁総合開発局「表層地質図」『土地分類図（茨城県）』

(2) 阿久津純「茨城県常陸大宮附近の地形地質」宇都宮大学研究論文集　第２号

(2)　歴史的環境（第２図）

大宮町内において現在までに知られている遺跡は約５０遺跡ほどである。幸いにも大宮町付近は今まで急激な開発や宅地造成などもなく，消滅する遺跡もあまりなかったのであるが，近年に致りあちこちにゴルフ場や工場用地として整地する為にブルドーザーが動き回り出しているので，我々の前から姿を消す遺跡もでてくるのではなかろうか。

無土器時代の遺跡は，東野で発見されているのが唯一の遺跡である。最も最近県内各地で無土器時代の遺跡が確認されてきているので今後大宮町でも発見される可能性はあろう。

縄文時代早期の遺跡として小場八幡山，前期の大宮高校付近があり，中期以降になると遺跡数も非常に増加する。中期では若林，三美高野土，鷹巣中坪などがあり，中期から後～晩期にかけて上大賀東平，下村田坪井上，小祝，大宮宮中，小野天神前，三美泉沢，石沢，上村田，八田などがあげられる。これらの遺跡からは縄文式土器を主に，土錘，石錘，石鏃，凹石，石棒，石斧，石匙，独鈷石，砥石，石槍などが出土しており，上大賀地内より土偶が発見されている。なお最近の現地調査によると大宮自然公園内や東坪井北側の畑地でも遺跡の存在が確認された。

弥生時代の遺跡は前述した遺跡と重複しているものが大部分である。下村田富士山，小祝，大宮富士山，三美泉沢，小野天神前などである。他に若林でも縄文，弥生，古墳の各時代にわ

たる遺跡が知られる。これらのうち小祝遺跡からはほぼ完形の後期十王台式に属する壺形土器が出土している。

古墳時代の遺跡もほとんど前述の遺跡と重複している。土師・須恵器だけを出土する遺跡として岩崎，鷹巣原，根本などがある。また下村田宮土山から北側の国道１１８号線を中心とする一帯はその全域から土師器を出土する。さらに抽ヶ台，石沢，北村出などにも遺跡の存在が考えられる。以上は集落跡とみられるものであるが，古墳は単独で存在するものはなく，大部分が古墳群を成している。岩崎古墳群（前方後円墳１，円墳１８），一本松古墳群（前方後円墳１，円墳１７），鷹巣古墳群（円墳５），松吟寺古墳群（前方後円墳１，円墳２），富士権現古墳群（円墳１２），富士山古墳群（円墳１１），三ヶ尻古墳群（円墳７），根本古墳群（円墳２）などである。なお鷹巣原遺跡からは布目瓦が出土しているといわれている。

以上のように大宮町においては，特にその台地上に各時代にわたっての遺跡が数多く存在していることがわかる。一騎山遺跡付近だけをみても『常陸国風土記』にその名を残す玉川が流れ，南方には式内社静神社が鎮座している。

（山本貴之・高村　勇）

次に，大宮町に存在する代表的な２前方後円墳を紹介しておきたい（第２図・ＰＬ．３２）。

小祝に存在する塚塚古墳は，『茨城県古墳総覧』に「小祝古墳」として記載されている前方後円墳である（『茨城県遺跡地名表（昭和４５年）』では一本松古墳群として登録されている）。この古墳は，小祝の集落付近から南下して延びている長さ1.2km，東西巾４００ｍ，標高６５ｍの平坦な舌状台地上に位置している。古墳の占地する部位は，台地が南方向から南東方向に向かって変化する台地の東端にあたる。この台地と，台地東側に形成する上大賀下河原の集落面との比高差は４０ｍ程である。この下河原の集落から古墳をみあげると，台地面にきわだった後円部墳丘の高まりがわかる。古墳は，前方部が耕作による破壊をうけて著しく原形をそこねているほかはよく保存されている。現状では，主軸長約６０ｍ，後円部高さ約５ｍで，後円部径は５０ｍ近くに達するのではないかともおもわれる。現在残っている前方部は，長さ１５ｍ，先端巾８ｍである。残欠している前方部からは，北東一南西の主軸方向が推定でき，前方部が南西方向に開く。前方部と後円部の比高差は約３ｍである。周堀の痕跡はない。また，葺石・埴輪はみられない。後円部の墳頂は比較的平坦で，この面が径１４ｍ程を占めている。後円部の東側は台地縁がせまり，急激な傾斜で落ち込んでいる。古墳の墳頂に立つと，上大賀の集落をはじめ，久慈川の流れを一望に見渡すことができる。また，古墳の南約１００ｍの地点に東西１５ｍ，南北１０ｍ，高さ３ｍの矩形状のマウンドが存在する。

下村田の宮土山（ふじやま）に存在する前方後円墳は，今回初めて確認したものである。『茨城県遺跡地名表』では，「富士山古墳群」として円墳１１基が記載されているが，それに前方後円墳１基を加えられるわけである。俗称がないので「五所皇（ごしょこう）神社裏古墳」

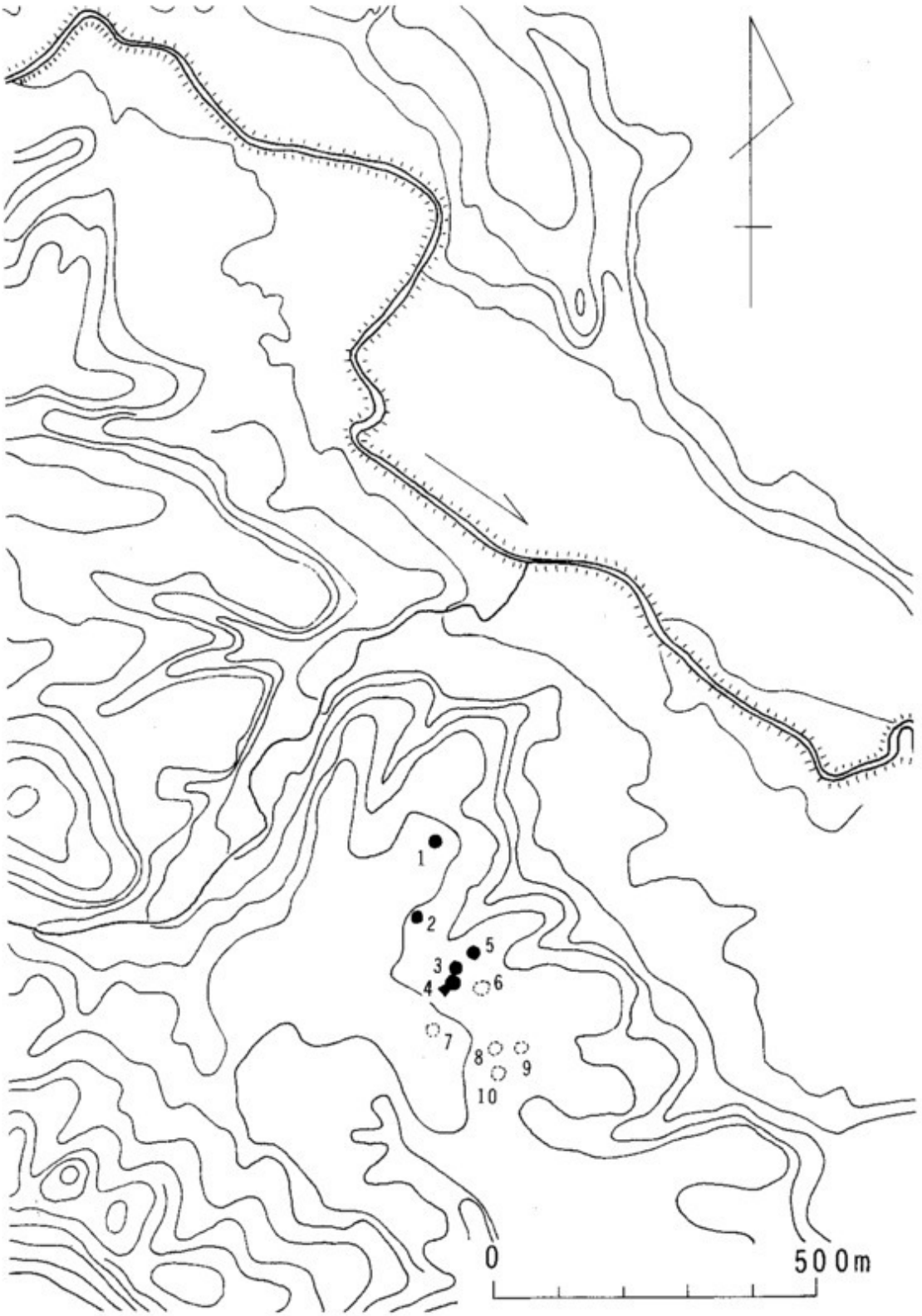
と呼称しておく。この古墳は，大宮町の中央部を約6kmにわたって南東方向に延びる舌状台地の最突端に位置している。台地は，標高４０～５０ｍ程の平坦で，南端では巾１５０ｍ程に挟まって長さ５００ｍ程突出している。そこは標高４７.５ｍの三角点が最高レベルであるが，南東に延びるにしたがって巾も挟まりレベルも下がってくる。台地の突端には，五所皇神社が鎮座している。古墳は神社の北側に位置する。古墳のレベルは標高３０ｍ程であろうとおもわれる。古墳の主軸は，ほぼ南北方向であるが，西に２０° 振れ，北側に前方部が開く。略測では，主軸全長５２ｍ，後円部径２６ｍ，同高さ6.5ｍ，前方部長さ２６ｍ，同先端巾２０ｍ，同高さ４ｍ，クビレ部巾１４ｍを計った。しかし，墳裾のラインは土砂の流れのため明確ではない。とりわけ後円部は，明瞭でなく，自然地形の高まりを利用して構築しているとおもわれる。後円部墳頂は，東西径１４.５ｍ，南北径１６ｍの平坦面を計ることができる。前方部先端では上端の稜線がよくわかり，巾８ｍを計測した。後円部と前方部の比高差は1.５ｍである。クビレ部から前方部先端にかけては，徐々に高まりをまして端整に延びており，上端稜線が明瞭である。墳丘は，南側の神社からみるとかなりの法量をもっているようにみえ，また，北側からは前方部先端の台形の稜線が明瞭にわかる。墳丘面には，河原石の葺石が認められるが埴輪片は散布していない。墳丘の東側と西側は，ともにテラス状になっているが，これは自然の地形であろう。墳丘面と台地上には，松と檜が成育している。神社の南東約１００ｍの水田内には，「丸山」と呼称されている円墳が存在している。計測していないため規模はわからないが，墳裾は耕作によって削られている。

この２前方後円墳は，今回調査の一騎山古墳群など横穴式石室を埋葬施設とする群集墳より先行しているとおもわれる。相互の新旧関係はわからないが，五所皇神社裏古墳が比較的古式の平面プランを呈しているほか，糠塚古墳が絶好の場所に占地していることなどからみて，大宮町で最初に出現した古墳として位置づけておきたい。

（荻沼勇市・小室　勉）

(3)　遺跡の立地（第２～４図，ＰＬ．１）

一騎山（いっきやま）は，茨城県那珂郡大宮町下村田に所属する。下村田は，大宮町の南端にあたり，町中央部から南東にのびている舌状台地の先端部付近から台地の西側にそって流れる玉川流域一帯を指す。下村田の南側は，瓜連町との町界をなしている。玉川は，下村田の中央部を流れ，ちょうど下村田を二分する形になっている。下村田の占める平地の大部分は玉川が形成する氾濫原である。現在のそこはほとんど水田が耕作されている。現在の集落は，玉川両岸の台地の緩斜面か裾部に形成されているが，その一部は玉川ぞいにも分布している。玉川は，上流の上村田付近から東転するきざしをみせはじめ，下村田を通過するころは東南に流路



第3図　一騎山古墳群分布図

をとる。さらに，富士山の南の国道１１８号線を横断するころは東南東となり，小規模なメアンダーをくりかえしながら下岩瀬の南側で久慈川に合流する。

一騎山は，下村田の西端に位置する。そこは，玉川と那珂川とにはさまれた台地の東端にあたる。この台地は，大宮町の中央部をはしる台地と同様に八溝山系に所属している。ただ，舌状にのびる中央部の台地が下村田の富士山でおわっているのに対して，この台地は，瓜連町から那珂町へと継続してのびており，いわゆる那珂台地を形成する。大宮町側では，八溝山系からのびている台地が玉川によって東西に分離されているわけである。台地の東側は，上村田と下村田との境界にあたり，いくつかの集落が点在している。この一帯は，玉川と那珂川にはさまれた大宮町区域内では唯一の平坦面となっている。とくに，上村田高野の集落の付近は標高５０ｍの比較的平坦な地盤となっており，ここから東側の台地端までは標高５５ｍ前後の平坦面が最大長500ｍ程続く。この台地上の大部分は，高野集落の耕作地となっている。この台地の東端の一角は原野となっており，今回の調査区の半分以上を占めた。ここから周囲をみわたすと，北西には高野の人々が「山王山」と呼称する標高９３ｍの小陵が眼にうつる。その南側には，「上山」と呼称されている標高１００ｍ前後のやせ尾根が続いている。「一騎山」とは，この付近の人々によって呼称されている地名である。それは，古墳群が分布する原野を指しているらしい。そこでこれを本書の表題に採用したわけである。台地の東側には国鉄水郡線がはしり，そこから東側６００ｍのところを国道１１８号線が併行してはしっている。

この台地の東側は，玉川が形成する小規模な溪谷がところどころに進入し，複雑化した地形を呈している。調査区の範囲では，北側と東側中央部にそれぞれ溪谷が進入している。一騎山古墳群の分布は，この自然の地形に大きく左右されているようである。すなわち，東側から進入する溪谷の北側には１・２号墳の２基が存在しているにすぎないが，南側では３・４・５号墳をはじめ８基の古墳が存在する。なかでも１・２号墳と３・４・５号墳は，溪谷をはさんで向いあった場所に占地している。これは，古墳の選地に際して深い配慮をくばっていたこととして理解できよう。

古墳群は，計１０基から構成されていることが確認できた。一番北端に存在する１号墳から最南に位置する１０号墳までの距離は約４００ｍである。この間に古墳群が形成されているわけである。今回調査の対象となった古墳は，高校敷地内の１～４号墳の４基のみであったが，敷地内でもすでに２基の古墳が消滅していることを聞きおよんだ。敷地南側の道路に接して位置していた６・７号墳がそれである。７号墳の存在は，凝灰岩質の石材がころがっていたことから気付いたのであるが，石材は横穴式石室の天上石のようにおもえた。６号墳は，その内容がまったくわからなかった。敷地南側の道路をへだてた畑の中では３基の古墳の痕跡を確認した。３基ともかすかにマウンドがわかる程度にまで破壊されていたが，８号墳は石室の残骸が認められた。１０号墳では，凝灰岩のクズが散らばっていた。９号墳は，墳丘がわかる程度で

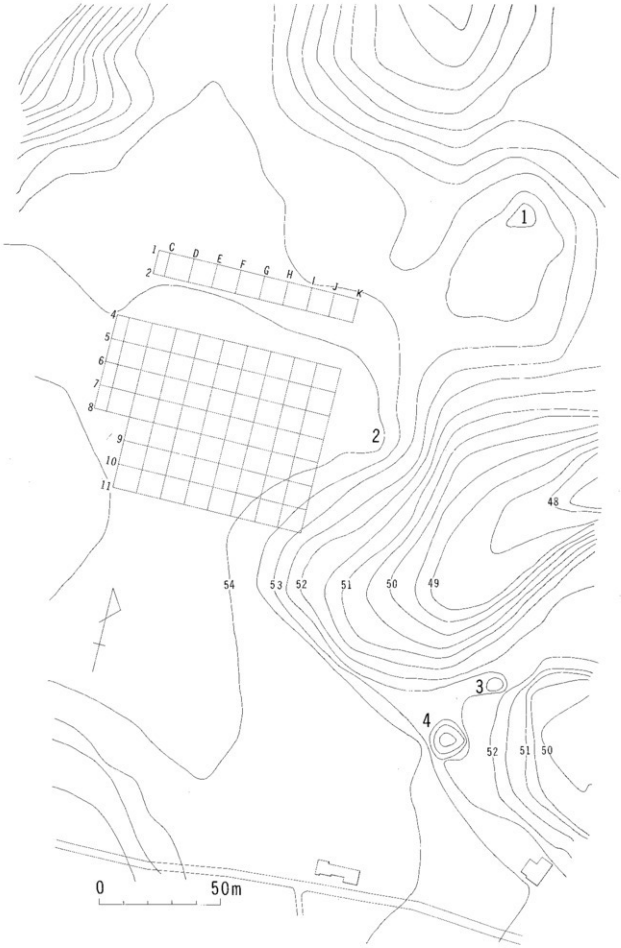
内容は不明である。５号墳は，敷地の東側にほとんど接する位置に存在し，３号墳の東側約３０ｍの地点である。この古墳は，松林の中にあってよく保存されている。直径２０ｍ，高さ１ｍの円墳である。

１号墳は，本古墳群中最北端に位置する。そこから南南西方向１１０ｍの地点に２号墳が位置する。３号墳は，溪谷をはさんで２号墳の南東１００ｍの地点に位置する。４号墳は，ほとんど３号墳と接して南南西に位置する。両古墳墳頂間の距離は２４ｍである。

これら１０基の古墳はすべてが円墳とおもわれたが，発掘の結果，４号墳が前方後円墳に訂正された。埋葬施設は，１・２・３・７・８・１０号墳の６基が横穴式石室をもっている。７・８・１０号墳については推測の域を出るものではないが，周辺の状況から考えても１・２・３号墳と同様の石室を構築していたとしてよいであろう。

『茨城県遺跡地名表（昭和４５年）』では，上村田の高野・三ケ尻所在の円墳７基が「三ケ尻古墳群」として記載されているが，本古墳群がこれに既当するとおもわれる。詳細な調べをしていないので決定的にはいえないのであるが，現在の知見からすれば高野と三ケ尻に古墳群は存在していない。おそらく本古墳群を指しているのだろう。しかし，前述したように，古墳群の位置する地域が「一騎山」と呼称されているので今回それに従ったのである。

（小室　勉）



第4図　遺跡地形図

II. 古墳群の調査

1　号　墳

1　墳　丘

a　調査前の状況（第5図，PL．2－1）

本墳は2号墳のほぼ北側にあたり，今回発掘調査した古墳群中では最北端に位置している。発掘前の形状は西側及び南東側が，耕作による為か，やや崩れていたが，径約20m程の円墳と思われた。実際には残っている封土は三角形に近い状態であった。また高さは現地表面との比高でおよそ1.5m程であった。

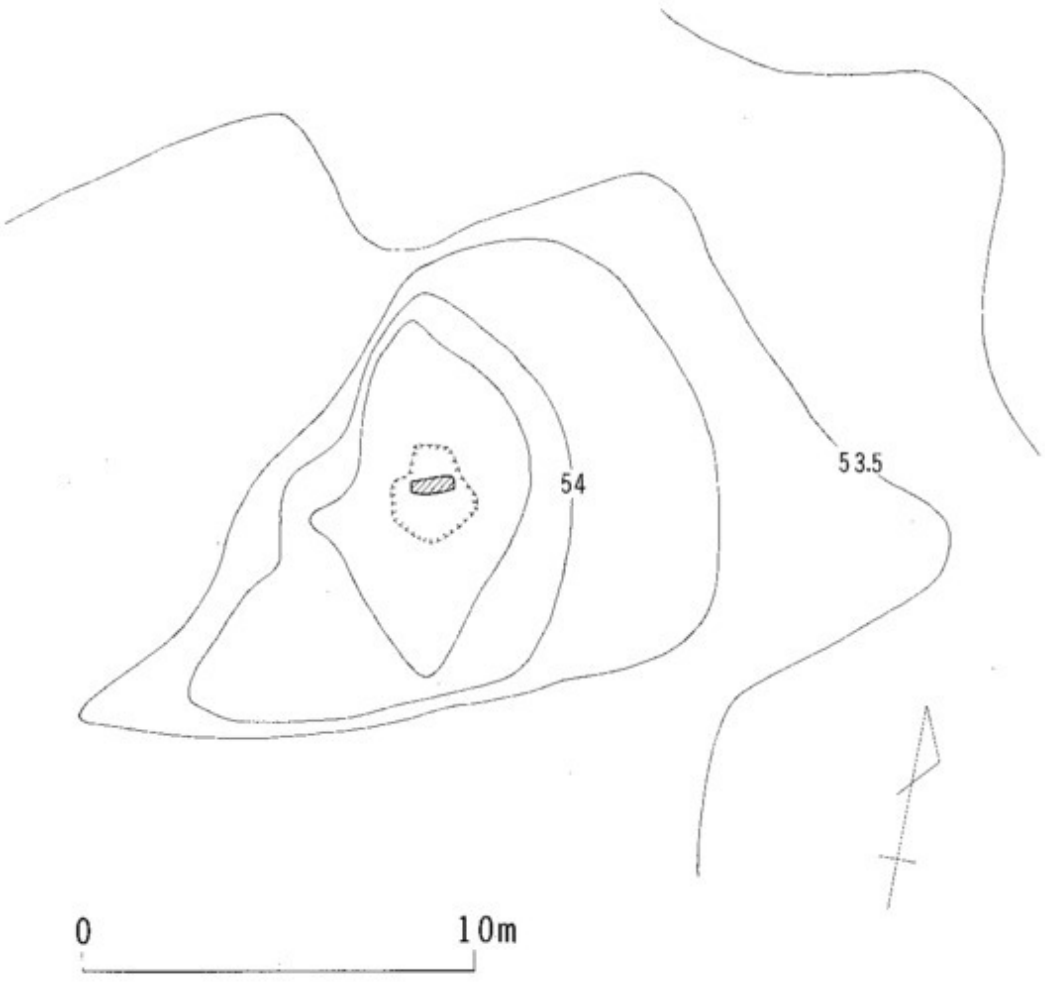
調査に当たって，本墳は他の古墳と違い，現状保存することを目的とした為に，周溝部分と推定される区域のみにトレンチを設定し，墳丘部分は掘らなかった。そのため盛土の状況や主体部の詳細は不明である。しかし，すでに盗掘を受けており，墳丘中央部には石室の奥壁とみられる大きな石が露出していた。この盗掘坑などから推察すると，内部主体は2号墳，3号墳と同様に横穴式石室であると考えられる。現在残されている奥壁の大きさから判断すると，古墳群中最大の横穴式石室であった可能性が強い。

b　周溝の状況（第7図）

トレンチは東西南北，南西，北西の計6本を設定した。周溝部分のみに限定し，墳丘部分にはほとんど食い込んでいない。各トレンチに検出した周溝の巾をみてみると，南トレンチにおいては巾2.5mであり，南西トレンチでは巾1.8m，西トレンチでは巾2.3m，北西トレンチでは巾2.0m，北トレンチでは巾1.8m，東トレンチでは巾2.1mという値を示している。さらにそれぞれの周溝の底部の標高をみてみると東側が一番深く52.28mであり，逆に浅いのは南西側で52.725mの数字を見せている。他は順に西側52.585m，南側52.575m，北西側52.56m，北側52.4mであった。以上の所見から，本古墳には巾1.8mないし2.5m，深さ0.24mないし0.48mの周溝が東に傾斜して回っていたことがわかる。この結果墳丘の南北径19.1m，東西径19.7m，周溝を含めると南北23.4m，東西24.3mの円墳であったことが判明した。

2　埋葬施設

主体部についての詳細は前述のように不明であり，現状からそれが横穴式石室であることが推定できるにとどまる。また出土遺物もほとんどなく，須恵器破片が若干と，南側周溝の底面から鉄製鎌が1個出土したのみであった。



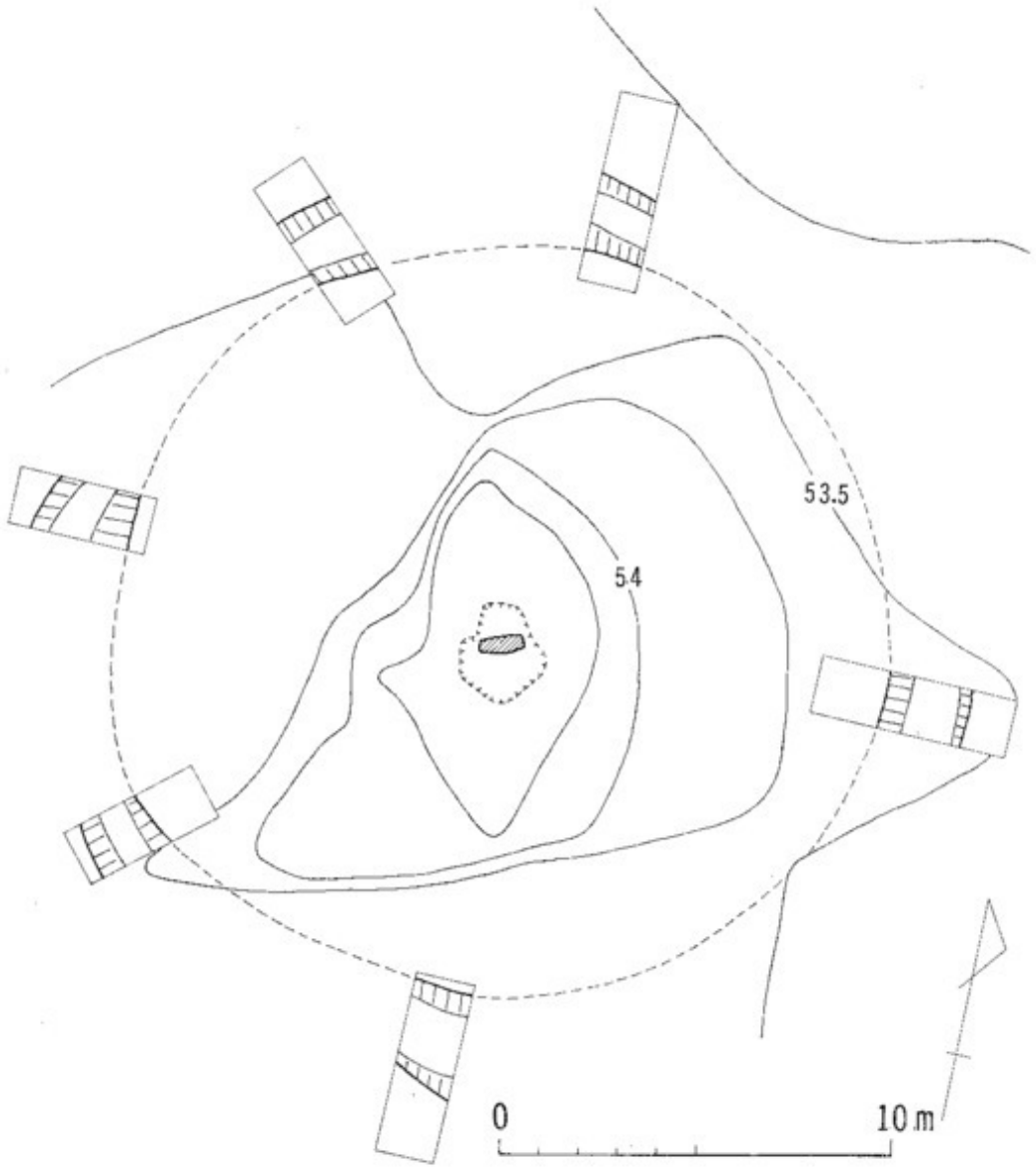
第5図　1号墳墳丘実測図

第6図　1号墳出土鍔

3　遺　　物

鍔（第6図）

無窓倒卵形を呈し，鉄製である。長径5.4㎝，短径3.7㎝，厚さ0.5㎝で，よく原形をとどめている。



第7図　1号墳調査区域図

4　ま　と　め

以上の結果から，本墳は調査した３基の円墳の中では最大級の規模を有する円墳であることがわかる。これは盗掘坑に露出している奥壁とみられる大きな石からも推定できるのではないだろうか。また当初からの方針で，墳丘及びその周囲に盛土し復原保存することになった。これに伴い古墳の周囲も南北３８.５ｍ，東西３５ｍの範囲で保存区域を設定したのである。

（高村　勇）

2　　号　　墳

本墳の調査は９月２５日より開始した。すでに雑木を伐開していたため，すぐにトレンチを東西に入れることができた。伐開中石室の一部に使用された石材が散在しており，石室の所在確認は容易であったが，開墾にあって墳丘はすでになく，平面的であったので調査にあたっては，まず周溝を確認し，規模をおさえる方法をとった。

即ち東西トレンチの南壁をはずし，古墳全体の墳丘の$\frac{1}{2}$を全掘し，周溝を確認することにした。結果は大成功であった。不幸にして主体部はすでに盗掘にあり，副葬品はなく，石室も基礎のみが残っていただけであったが石室からの排水施設と，周溝の排水施設を思わぬところで確認することができた。

従って，横穴式石室を有する円墳であることを確認し，１０月２１日終了できた。

1　墳　　丘

a　調査前の状況（第８図，ＰＬ．３－１）

本墳は，１号墳と３・４号墳のほぼ中間に位置し，東方よりのゆるい谷が入り込む台地の東端縁に位置している。本墳に接して，小径の林道が通じていた。伐開後，若干墳丘が残っている感じしかつかめないほど平面的に削平され畑として使われていたと考えられる。やや東側の谷よりから観察すると，いくらか高くなっている感じしかつかめない。

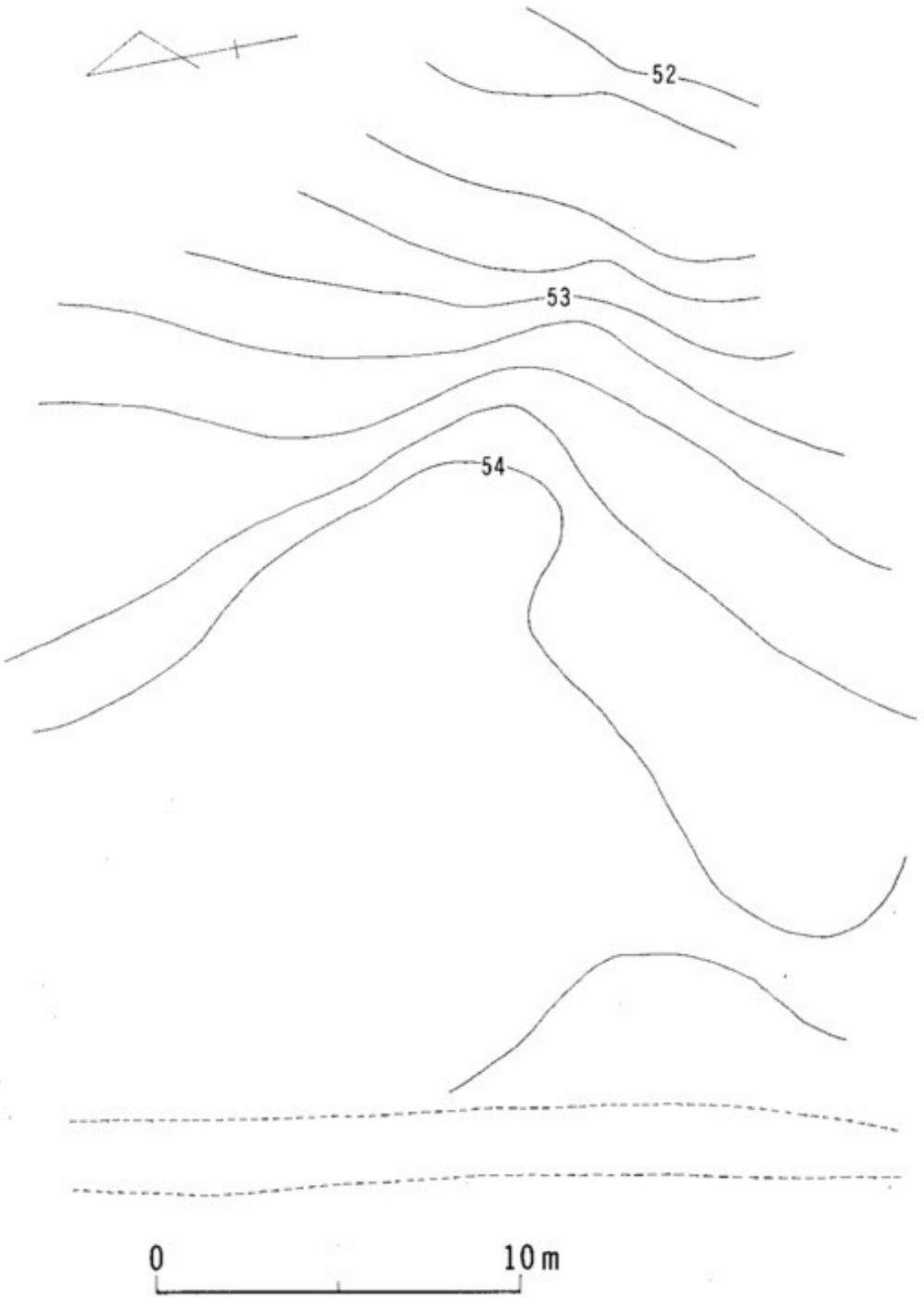
墳丘測量の結果直径約１５ｍ，高さ約１ｍ程の円墳でなることが確認できた。墳丘の最高点は５４.２５ｍで等高線は一周せず小谷に平行して流れている。

b　盛土の状況（第１０図）

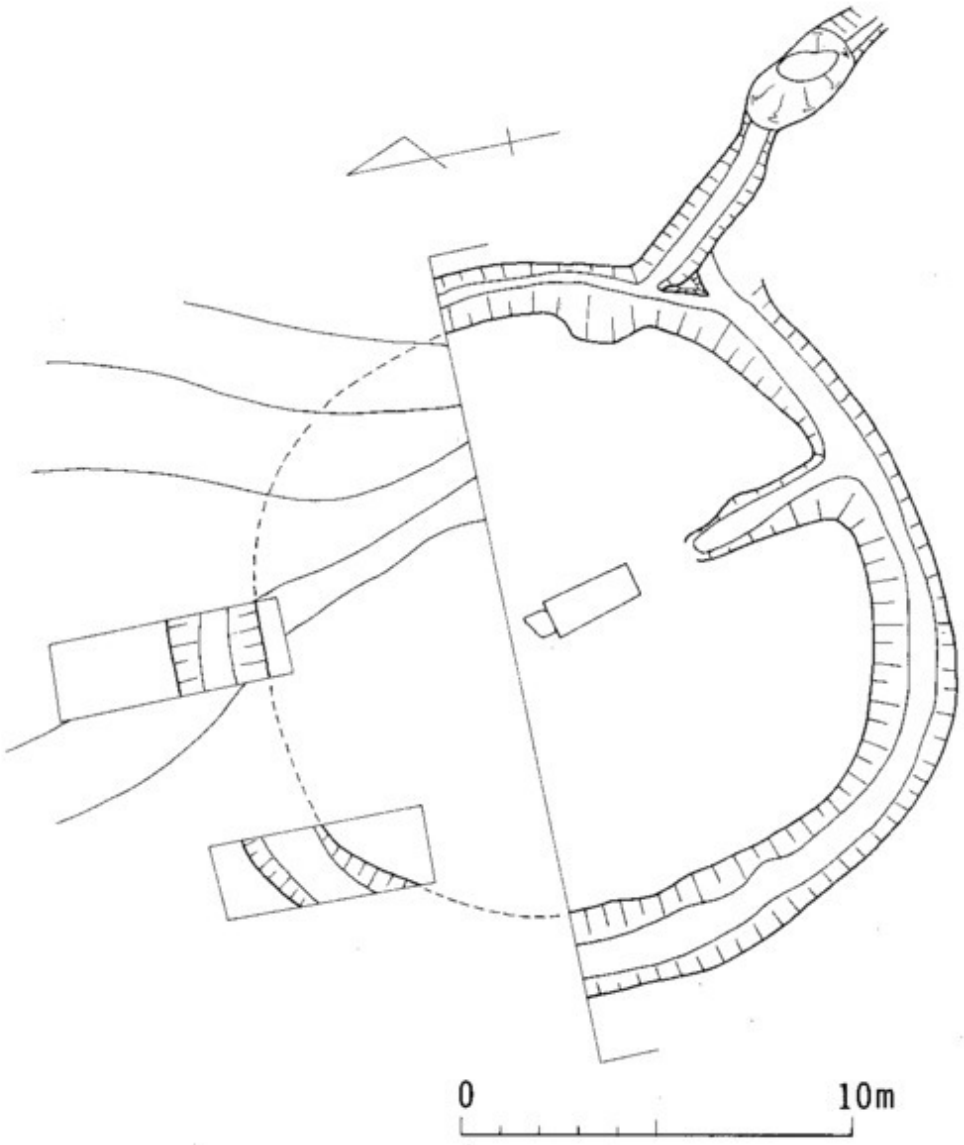
東西に設定した主体部の奥壁を通るトレンチによって盛土の状況を観察すると，まず，平面的な状況なので各周溝の落ち込みのみ判明できることは，旧表土とゆるく切り込んで周溝をつくり，順次積みあげの状況からみられた。石室上部附近の盛土は，すでに墳丘面が水平なので判明しにくいが，少なくとも，天井上約１ｍ前後の盛土がなされたのではないかと考えられる，土層の変化は，周溝附近だけで，あとはほぼ水平に盛土が行なわれていた。

c　墳丘の平面形（第９図，ＰＬ．３－２）

東西トレンチ及び主体部の北側に二つのピットを含み周溝をむすぶと，東西１５ｍ，南北１５.５ｍの正円墳であることが判明した。周溝を入れると，東西18.8m，南北１９.６ｍになる。



第8図　2号墳墳丘実測図



第9図　2号墳調査区域図

d　周溝の状況

周溝は，円形を呈していることは，古墳の$\frac{1}{2}$以上を全掘した結果判明した。自然地形が本墳の東側即ち谷側に傾斜している関係から周溝は，谷側が石室を中心に自然低くなっている。

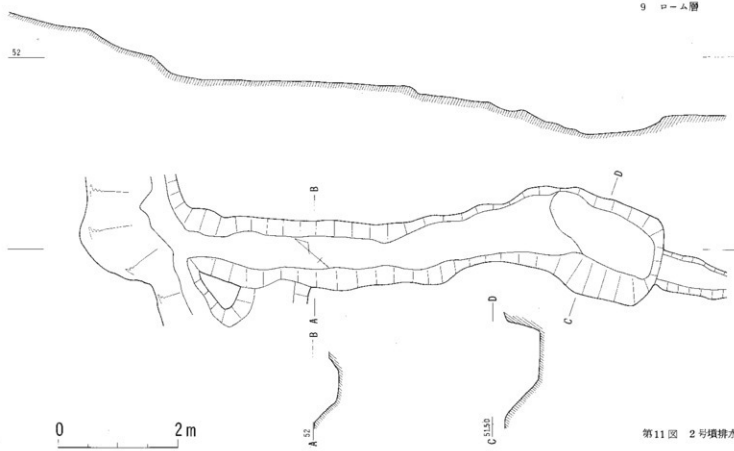
周溝巾は，最も広い部分で2.4m，又，せまい部分で1.2mである。

周溝の堆積状況は，Ⅰ～Ⅳ層にわけられる。

Ⅰ　表土（耕作土）層，Ⅱ　暗褐色土（墳丘盛土）層，Ⅲ　ロームを含む黒褐色土層，

第10図　2号墳墳丘断面図

1　表土層
2　暗褐色土層
3　褐色土層
4　赤褐色土層
5　黄褐色土層
6　黒色土層
7　混ロームブロック粘土層
8　旧表土層（黒色土）
9　ローム層



第11図　2号墳排水溝実測図

N ローム を含む褐色土層である。周溝内に堆積した土層は自然に流れ込んだものとみられる。石室は，Ⅲ層より掘込んで築造されているので，Ⅰ，Ⅱ層によって，きられ水平に盛土されていることがわかる。現盛土がわずかに石室天井部より１０cm残っているので，この面より約５０cmほどの墳丘であったことが推定される。

e 特殊遺構 （第１１・１３図，ＰＬ．５）

本墳は，前述したとおり，墳丘が以前削平されているところから他の古墳の調査方法を異にした。即ち，石室をふくみ東西トレンチの$\frac{1}{2}$を全掘する方法を試みた結果，二つの施設を伴うことが発見できた。即ち，①石室より前面，周溝に至る遺構。②円形の周溝が切れ一本の溝が谷に走る遺構の確認であった。

①この遺構は，主体部である横穴式石室の全面巾０．７～１．４ｍ，長さ約４ｍ，深さ０．４ｍの地山を掘り込み，その上に石が散在して発見された，ゆるい傾斜をもちながら周溝内に入っている。更に周溝内には全面に巾３．１ｍにわたり，バラス状に一段で重ならず敷きつめられていた。

石はおおむね，河原石であるが中には割って偏平に加工を加えているものも混在していた。

②この遺構は排水施設と考えられる。円形の周溝の排水を容易にするため周溝の外側の一部をあけ，東南すみに設けたもので，長さ約 8.5 ｍ，巾 約1 ｍ，深さ約0.5 ｍのもので，その先端は，溜状を呈しているがせまい谷へ自然流出する形をとっている。周溝の深さも，この排水溝と交叉する部分が最も深く０．８ｍを測る。

溝内には石はみあたらず非常に堅くしまった地山が検出された。

これらの遺構は，いずれも周溝の内外側の壁を切断してつくられているのが特徴であり，周溝ときわめて密接な関係にあることは事実であり特殊な遺構である。

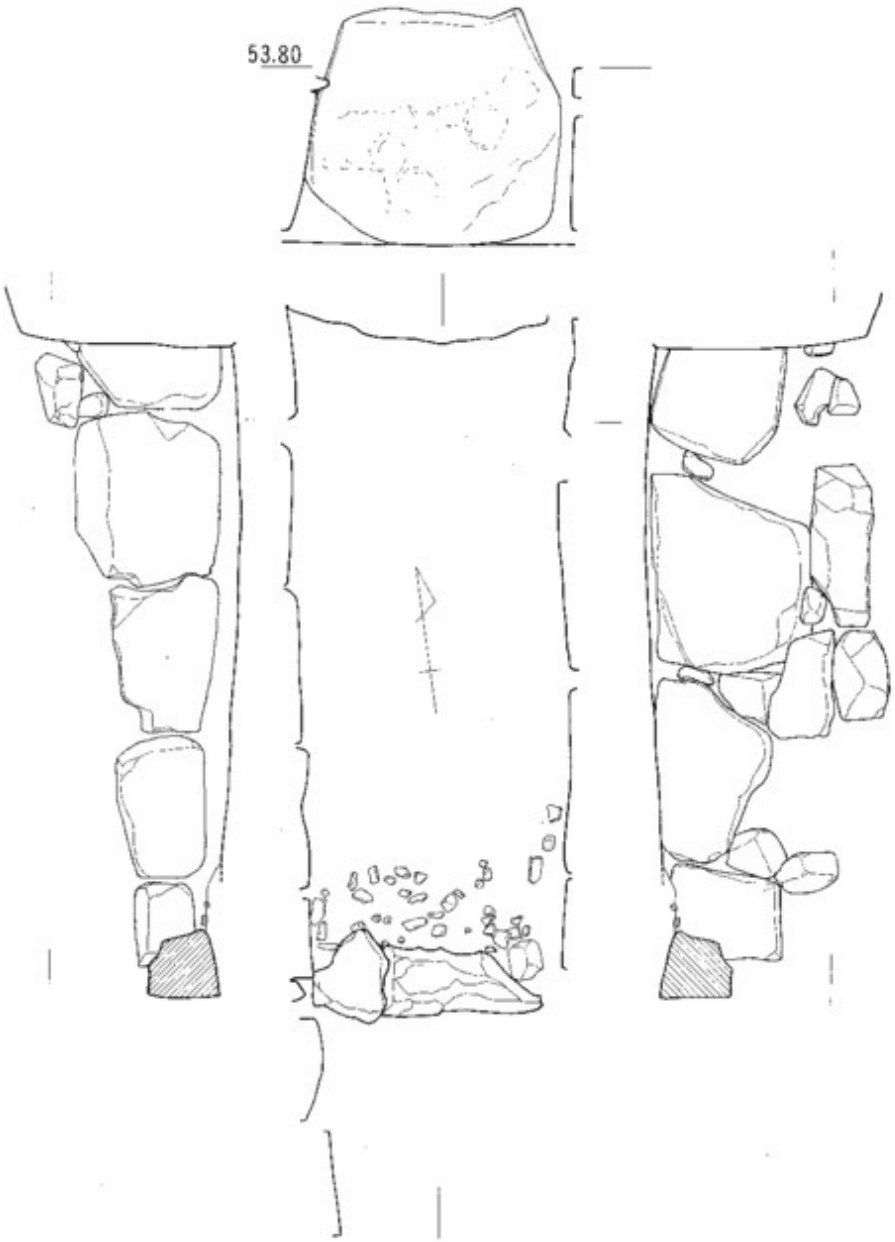
2 埋葬施設

a 石 室（第１２・１３図，ＰＬ．４・５）

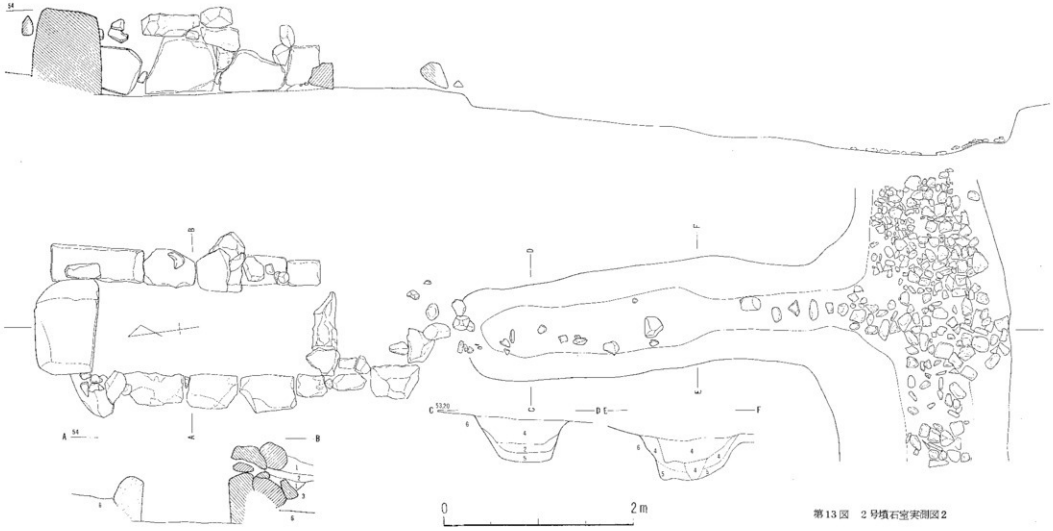
石室の位置　本墳の埋葬施設である主体部は，南側に羨道部をもつ横穴式石室である。石室の主軸はほぼ南方向である。すでに盗掘にあっているため，地表面に壁に使用された石材等が散在していたので，奥壁の中心基礎というべき石材の露呈から調査を開始した。

その結果円形の周溝の中心位置に築造されたことが判明した。

石室の構造　この石室は、無袖形で単室になっている。地山面を掘って心礎である最大の石である奥壁をすえ，側壁は５枚ずつ切石をならべ長方形状に石室をつくり，一枚を閉塞石を使用している。すき間に比較的小さい石を使いうら込めは同質の石材と粘土でとめている。いづ



第12図　2号墳石室実測図1



第13図　2号墳石室実測図2

1　灰色粘土層
2　褐灰色粘土ローム土層
3　旧表土層（黒色土）
4　暗褐色土層
5　黄色土層
6　ローム層

れも盗掘にあっているので，地山に入りこんでいる。基礎の部分の石のみが当時のおもかげを残しているのみである。

床面は，旧地表面下約45cmで石が敷かれているが，不明である。後世の攪乱によって，床面は判明できないほどであった。

石室は，長さ3.6m，奥壁巾1.1m，同高さ0.9m，羨門部巾1mを計る。

奥壁に使用された石は巾1m，高さ0.9mで地山に深くすえられている。この心礎というべき奥壁から側壁がつくられている。従って最下段にならべられている。現状では，基礎は一段しか存在しないが，推定では1段～2段その上に加えたものであろう。石は半加工されており石室全体の平面形は長方形を呈している。

羨道部は，高さ25cmの基礎石が現存するのみであって，攪乱によって，前面に通ずる溝まで数個の石材が散乱した状況で発見されている。従って，羨道部は，不完全な状態である。

閉塞状況　羨道部は後世の攪乱により，閉塞状況はまったくつかめなかった。

従って，天井部についても，調査の段階ですでになく，石室内に入っていた石材は，側壁の一部であって，最低の石室巾をまたぐ天井石はなかった。

b　遺物の配置

石室内は攪乱により，側壁の一部がてん落して土砂と共に充満していた。それを排除すると石室の羨道部よりの地点から直刀破片が出土したのみにとどまった。

主体部外よりは須恵器，土器等が羨道部前の攪乱の石の下より出土した。

又，北側に設けたトレンチより周溝底上約10cmの黒土層内に須恵器が出土した。

3　遺　　物

直刀

直刀は石室内の攪乱された埋土中より出土したものである。全長約5.6cm，刃部巾2.7cmを測る細造りのものであろう腐蝕がいちじるしいうえ細く折れた一部分であるので形態は不明である。

須恵器　（PL．22－1・2）

周溝内より出土したもので提瓶であり完形にはならず破片でまとまって出土した。大部分胴部のみである。内部は回転痕が明瞭であるが，外部は同心円状の回転痕が多少すりけした状況でついている。

須恵器　（坏）

これは，羨道附近の前面の石の下から出土した破片であるが石室外の出土として考えている。

土師器

坏破片

4　ま　と　め

本墳は残念ながら盗掘にあり主体部の構造，副葬品の有無について，不確定な調査に終ってしまったが，他の古墳とは別に周溝状態や，その排水施設等が確認できた。築造年代も他の古墳とそう遠くない時期につくられたものを考えられ，周溝内より出土した提瓶や羨道部附近より出土した須恵器坏などから年代を決める手がかりになるのではなかろうかと考える。

（高根信和）

3　　号　　墳

本墳の調査は，９月１日より開始した。調査の当初は，４号墳の調査が終了していなかったため，併行して進めた。調査は，まず墳頂部で直交する２本のトレンチを入れた。その結果，４ヶ所で周溝を検出したほか，墳丘南斜面に横穴式石室の存在を確認した。そこで，石室の外面を把握するために，トレンチを拡張し，石室裏込めを露呈させた。裏込めは，河原石を使用し，意外にしっかりしていた。一方石室内部は，天井石がなかったために土砂が充満していた。羨門部には，これも河原石を使用した閉塞が確認された。これをとりのぞきながら，石室内部の排土作業を進め，床面を検出した。床面には，平たい河原石が敷かれ，この上に遺物が検出された。遺物は，直刀，鉄鏃，切子玉，ガラス小玉であった。調査は，人手不足のため難航したが１０月１７日に終了した。

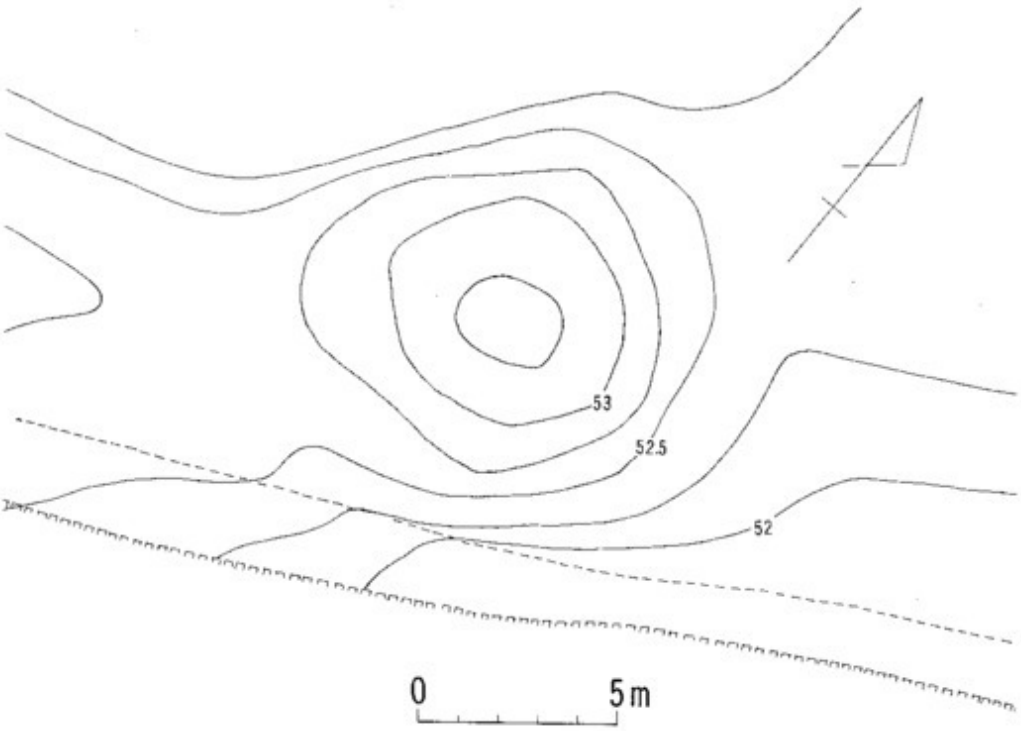
1　墳　　丘

a　調査前の状況　（第１４図，ＰＬ．６－１）

本墳は，４号墳の北側にほとんど接して占地している。占墳の北側には，玉川の氾濫原から西に延びている小規模な渓谷があり，南側は，東西に走る農道が墳丘に接している。調査前の墳丘は，雑木と雑草におおわれていた。草刈りの後，墳頂に登ってみると，墳丘は良好な円形を呈しており，南側の一部が農道と畑によって削平されているほかはよく原形をとどめているとおもえた。しかし，墳丘南斜面には，埋葬施設に使用されたとおもわれる石材が数個露出していた。このため，すでに盗掘にあっているのではないかと危ぶまれたが，調査の結果では幸いにもそのような痕跡はなかった。墳丘測量の結果，本墳は径１２ｍ，高さ１ｍ程の円墳であることがわかった。これは発掘によって裏付けることができた。墳丘の最高点は，５３.４ｍで墳丘のほとんど中心にあたる。等高線は，５２.７５ｍまでの３本がほぼ円形を呈して閉合しているが，以下は一周せずに流れている。ただ，５２.５ｍの高等線は，東側で墳丘の形状をとるが西側では自然地形となって流れている。

b　盛土の状況　（第１６図）

南西－北東方向で設定した第１トレンチ，およびそれに墳頂で直交する第２トレンチ北側のセクションで盛土の状況を観察した。本墳における盛土の状況は，石室構築との関連から重要な課題であった。以下，セクションの観察所見をのべてゆく。

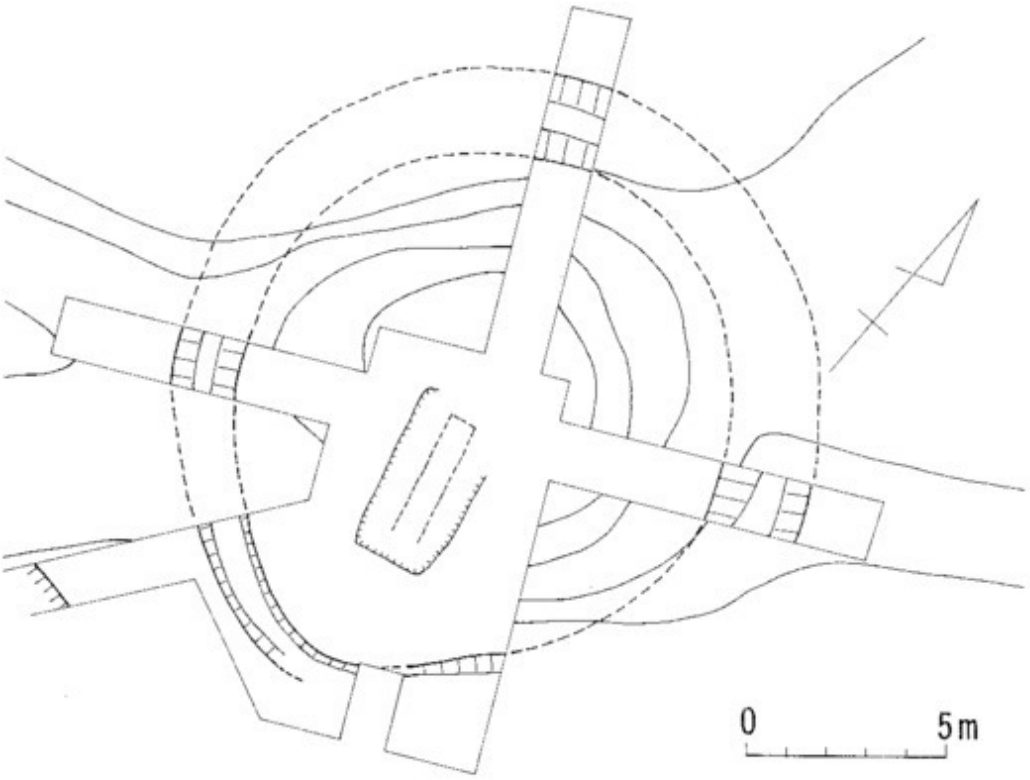


第14図　3号墳墳丘実測図

まず，最初に気付くのは旧表土にあたるローム層上層の自然堆積層がみられないことであろう。さらに，地山面が東側に傾斜しているのがわかる。第1トレンチ西端の地山のレベルは52.4mであるが，東端では51.35mで90cm近くもの差が出ている。このような自然地形の制約のなかで，どのように盛土がなされているであろうか。52.8mのレベルまでは石室の構築と交互に盛られている。これは，石室横断面裏込めセクションと対比すればわかる。これを第1期構築としてよいであろう。これは，石室側壁4段目上端レベルまで達する。第1期で墳丘は80cm程の高さに盛土されている。つづいて第2期構築として，墳丘の中央部にロームブロックとローム粒子を主とするしまった黄褐色土が盛られ，これによって墳丘中央部はほとんど盛土を終えている。また，石室の構築も終了する。第3期構築は，墳丘の斜面に盛っているが，それも墳頂に近い部分から墳裾へと盛っているのがわかる。最終的な墳丘盛土の高さは1.15mに達する。

c　墳丘の平面形　（第15図）

各トレンチで確認した周溝から未調査区域を推定線でむすんでいくと，本墳は東西12.2m，南北13.6mの円墳であることが判明した。しかし，平面プランは，東西径にくらべて南北径



第15図　3号墳調査区域図

がやや長く，南側がやや外側に出ている形状を呈し，正確な円形ではない。周溝をふくめた直径は，東西16.2m，南北約16.7mである。したがって，周溝の外側は内側より比較的よく円形を呈しているとおもわれる。墳丘南側周溝の外側は，畑地耕作のため削平されていてつかめなかった。

d　周溝の状況

前述した如く，本墳の地山面は東側に傾斜している。周溝の掘削を各横断面でみると，第1トレンチ東側の周溝は，ローム面から75cm程掘り込まれ，溝底は比較的平坦である。周溝の上端巾は2.3mを計る。周溝の傾斜は，内側の立ちあがりの方がやや急角度である。西側の周溝は，内，外側とも似たような立ちあがりを示しているが，内側の方がややゆるやかである。ローム面から45cm程の掘り込みをもち，溝底はほとんど平坦な面がみられない。墳丘南側の周溝は，第1トレンチ西側周溝と同じような形状であるが，石室の南側にくるにしたがって巾が狭くなり，掘り込みも浅くなる。北側の第2トレンチで確認した周溝は，ローム面から80cm程の掘り込みをもっている。しかし，墳丘の北側は自然地形の影響をうけて地山面が北側に傾斜している。そのため，周溝も内側の掘り込みが80cm程であるのに対して，外側では35

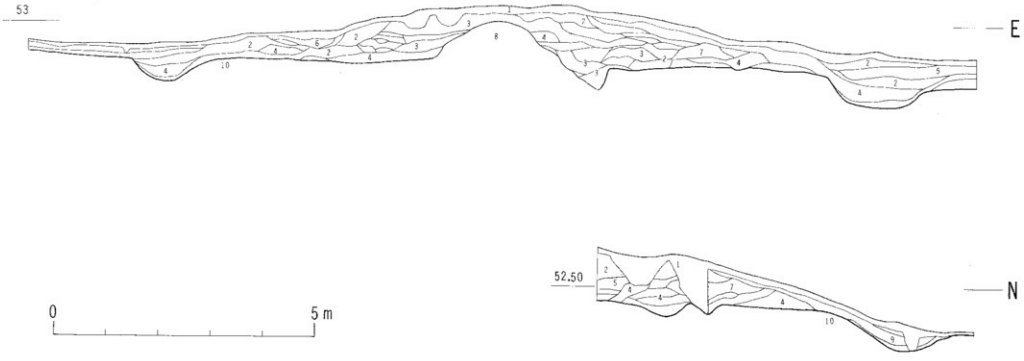
cm程にすぎない。周溝横断面は第1トレンチ西側周溝に似ている。

2　埋葬施設

a　石　　室（第17・18図, PL. 7・8・9）

石室の位置　本墳の埋葬施設は，墳丘南斜面に開口している横穴式石室である。石室の主軸は，ほぼ南方向であるといえるが，床面での主軸は13°西よりである。石室の調査は，まず石室上端の石材を露呈させることから開始した。その結果，天井石はまったくみられず，室内には土砂が充満していた。さらに，羨門部分には河原石による閉塞が構築されていることがわかった。

石室の構造　この石室は，いわゆる無袖型の横穴式石室であり，羨道部と玄室部の明確な区分がみられない。石室全長3.2m，奥壁巾0.68m，同高さ1.22m，羨門部巾0.66mを計る。奥壁は，2個の石材によって構築されている。1段目は，高さ1.04m，巾0.5m，厚さ0.32～0.49mの自然石をそのまま使用している。内面，外面とも加工の跡がみられない。ただ，確認はしていないが，2段目と接する上端面は平坦に加工している可能性がある。内面は，凹凸が著しいが，全体としてほぼ垂直になるように立てられている。しかし，石材の形状のためか，東側に傾斜している。これは，ひとつには平坦面を2段目石材に提供する必要があったためとおもわれる。外面は，外反しているが凹凸は少ない。底面は，平坦でなく，自然面のカーブがみられる。平面的にみると奥壁内面は，側壁面に対して直角になっていない。1段目の石材は，横巾がたりないために側壁との隙間を数個の石材でうめているが，これが構築当初から予定されていたものかはわからない。2段目は，巾80cm，高さ38cm，厚さ58cmの丸みを帯びた石材からなる。これも加工の跡がみられないが，1段目と接する下端面はよく平坦な面となっている。これが人工的な加工痕なのかは断定できない。側壁は，5～6段の石材から構築されている。西壁と東壁の積み方を比較してみると，西壁が大きさの整った石材を使用し，整然と積まれているのに対し，東壁はやや大きめの石材が使用され，やや乱雑に積まれているのがわかる。石材は，いずれも角が丸みを帯びた安山岩質凝灰岩である。西壁は，6段に積まれているのが一見してわかるが，東壁は5段といってもよいであろう。したがって，高さの点でも東壁は西壁よりやや低くなっている。1段目の石材は，両壁とも大きさの整った石材が使用され，5～6個の石材が配置されている。両壁とも上段に移行するにしたがい石材が小規模になってくる傾向があり，積み方もやや乱雑になる。その傾向は，東壁で著しい。両壁各段のレベルは，相対的であって，石材と石材の隙間には小型の河原石がつめられている。壁面は荒いが，一応の面取り加工がされているようである。奥壁と側壁の積み方の関係は，側壁の3段目上端と奥壁1段目上端レベルが一致しているのがわかる。側壁は，やや凹凸をもちな



第16図　3号墳墳丘断面図

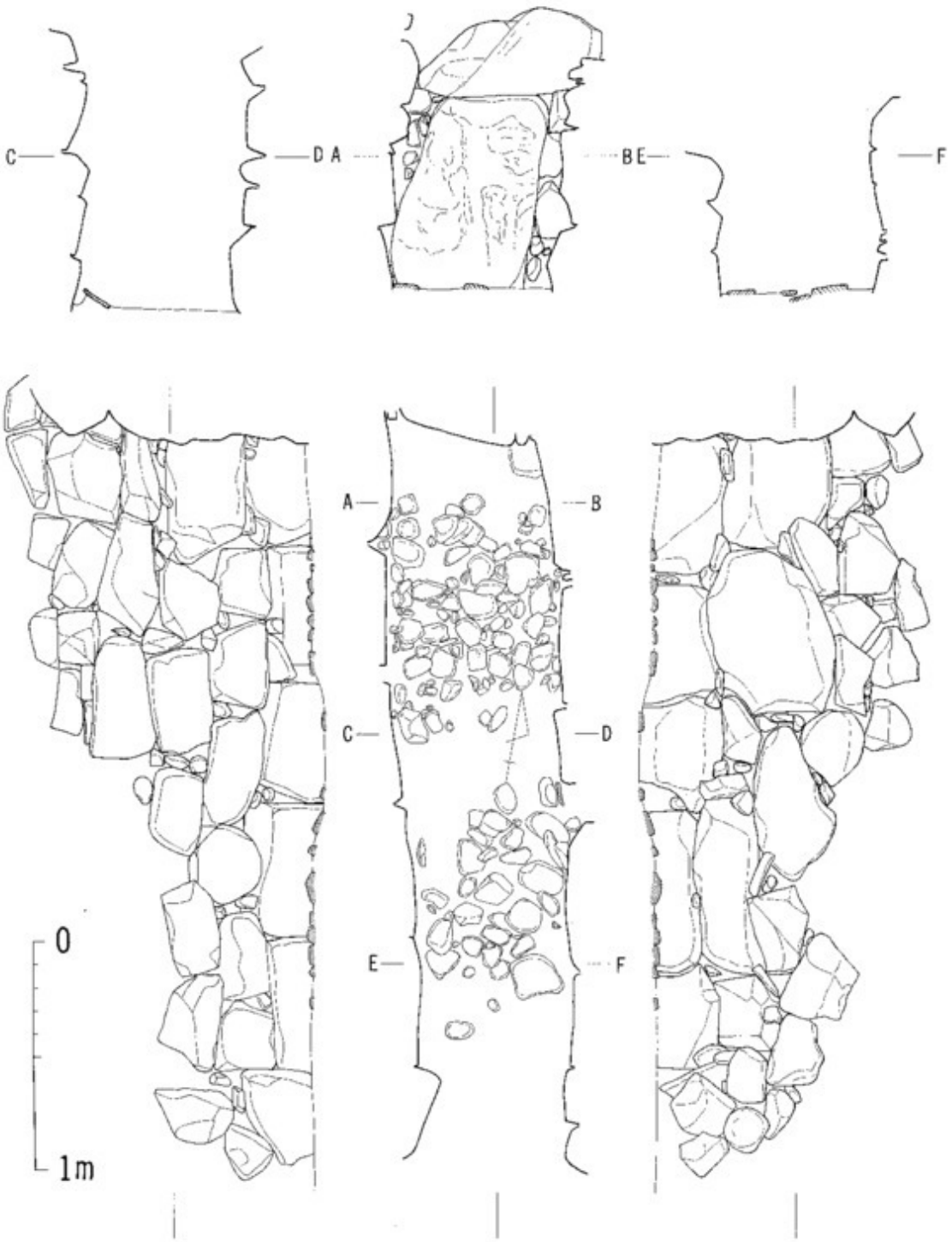
1　表土層
2　褐色土層
3　黄褐色土層
4　暗褐色土層
5　黒褐色土層
6　黄色土層
7　黒色土層
8　混粘土ブロック砂礫層
9　茶褐色土層
10　ローム層

がらも，垂直になるように積まれている。石室天井石は，調査時においてまったくみられなかった。当初からなかったのかもしれないが，仮りに，この側壁に天井石が構架していたとするなら，奥壁から1.4mのところで天井の段がつくはずである。そして，そこから奥壁までの天井の高さは1.2～1.3mを計ることができる。さらに，そこから羨門までは，高さ70～80cmになるであろう。こうした仮定を進めると，石室は天井が低い部分と高い部分に分けられる。これを，前者が羨道，後者を玄室と呼称することはできるであろう。しかし，厳密な意味での玄室と羨道をここでは区分していなかったのではないか。そうした区分があったとしても，この程度の小規模な石室ではたいした意味をなさないのである。石室底面は，河原石による石敷がみられる。石敷は厚くなく，せいぜい1枚か，1枚を2段に重ねている程度である。石敷には，丸みを帯びた平たい拳大の自然石が多く使用されている。石敷は，奥壁近くにはみられず，また石室中央部と羨門付近にも敷かれていない。羨門付近にみられないのは，これからのべる閉塞との関連からであろう。

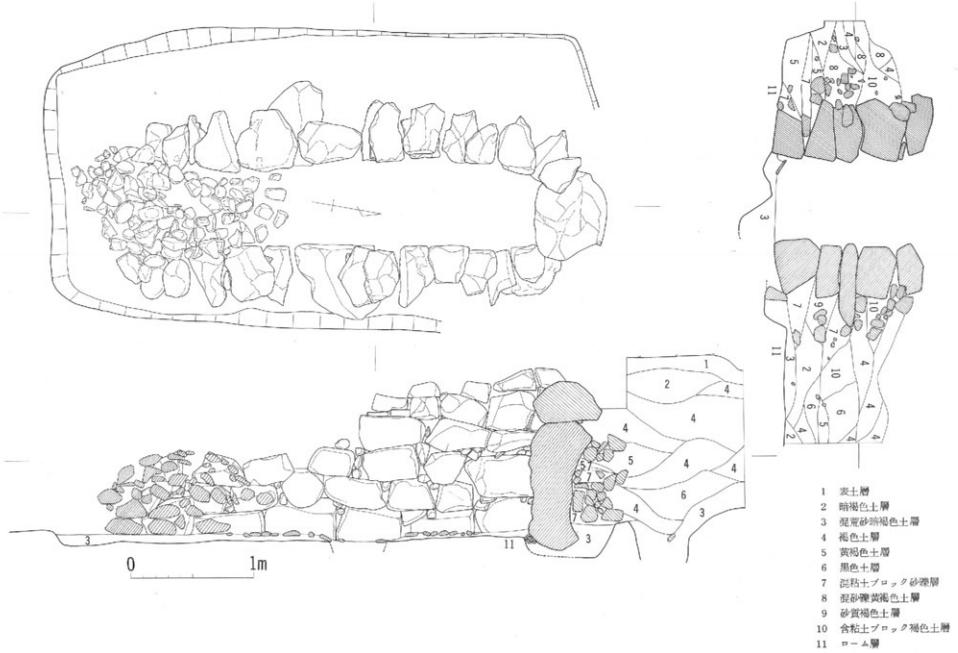
閉塞状況　閉塞は，羨門付近に河原石を積みあげて構築されている。閉塞の高さは，側壁3段目上端のレベルと一致し，68cmである。石室奥壁から閉塞内側までは，2.1m程であるが，崩れを考えれば2.4m程になるであろう。閉塞は，主軸断面が「山」形に積まれており，閉塞石は，下位になるにしたがって大きくなる。最下位の石は，直径30cm程の丸みをもち，平たい河原石である。閉塞の断面をみると，1次的に積みあげているとおもわれる。

石室土壙　石室を構築する以前に土壙を作っていることがわかった。前述したように，本墳では旧表土にあたる土層が存在していない。したがって，土壙もローム層地山面から掘り込まれている。土壙の規模は，長さ4.5m，巾2.4m，深さ約20～30cmで，長方形の平面プランを呈する。しかし，土壙の巾は，羨門部側では1.85mであるのに対して，奥壁側にゆくにしたがってやや開く傾向がある。南側のコーナー部は，両側とも丸みをまし，正確な直角を呈してはいない。奥壁裏側と北東コーナー部では，古墳構築以前のピットがいくつか検出され，土壙の明瞭な線を出せなかった。しかし，土壙全体の形状は長方形としてよいであろう。土壙は，地山面から約65°の傾斜をもって掘り込まれ，底面はほとんど平坦である。ただ，奥壁の部分は，他の部所と違った掘り込みをもつ。これは，奥壁1段目の大きな石材を配置するため，特に深く掘り込みをつけたものとおもわれる。土壙内の埋土は1層で，荒い砂まじりの暗褐色土がみられ，石室内では，この層の上面に石敷が敷かれている。

石室裏込めの状況　石室を構築する際，どのような裏込めがなされているかを石室中央部横断面と，奥壁裏側のセクションで観察した。まず，石室中央部横断面のセクションをみると，西壁1段目の石材が土壙底面に配置されているのがわかる。続いて，石室床面をなす荒砂混合暗褐色土層が移入される。東壁1段目の石材は，この土層の上に配置され，両壁とも裏側に砂と粘土まじりの砂礫層が裏込めされる。さらに，西壁裏では黄褐色土が入れられ，東壁裏では

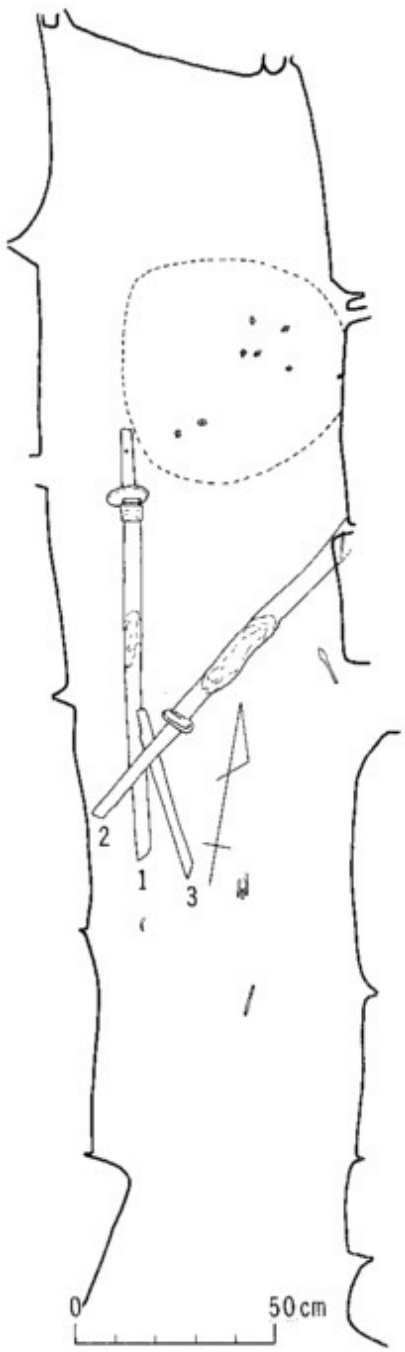


第17図　3号墳石室実測図1（水準線は標高52.50ｍ）



第18図　3号墳石室実測図2（水準線は標高52.50m）

小礫をふくむ暗褐色土が盛られる。この段階で東壁裏では，すでに墳丘盛土が開始されていることに注目したい。西壁側の土壙が，地山面から深く掘込まれているのは，地山面が東側に傾斜していることに関連があるだろうとおもわれる。この石室裏込めの特徴は，各段側壁が積まれるごとに，砂礫粘土まじりの裏込めがなされていることである。しかも，東壁裏側では，1段目が積まれてから盛土が開始されており，石室の構築と墳丘盛土が交互におこなわれていたことがわかる。したがって，石室の構築が終了した時点では，石室の周囲にはある程度の墳丘が盛られていたわけである。奥壁裏側のセクションでは，まず土壙内に荒砂まじりの暗褐色土が入れられ，奥壁1段目の石材が配置されている。続いて，砂礫層が裏込めされ，褐色土がその上に盛られる。この褐色土層も奥壁に近い部分では多量の河原石を含んでいる。ここも，裏込めと墳丘盛土が交互になされているのがわかる。なお，礫まじりの裏込めは，1段目石材上面までで，それより上位にはなくなる。



第19図　3号墳石室内遺物配置図

b　遺物の配置（第19図，PL．10）

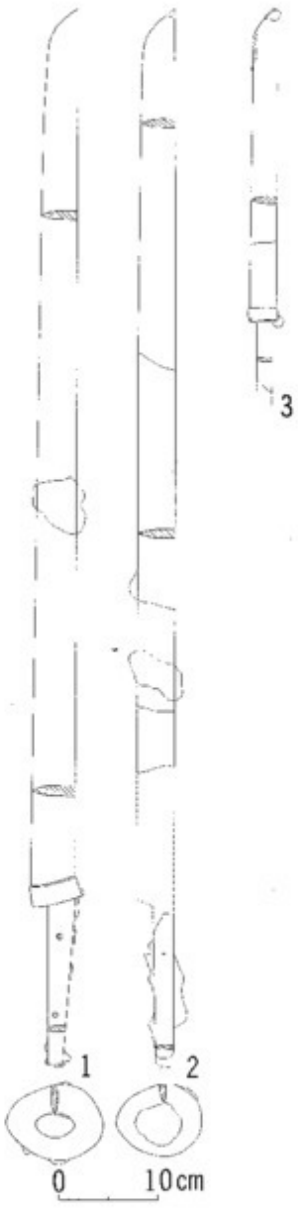
石室内は，土砂が充満していた。それを排土すると，河原石を敷石とする床面があらわれた。石室内の遺物は，この床面の上面，あるいは石と石の隙間に検出された。

玉類は，奥壁から羨門にむかって70cm程のところを中心とする径60cm内の部分からやや東壁よりに一括して検出された。それは，遺物配置図の点線内の範囲である。ここ以外に玉類はまったく検出されなかった。検出した玉類は，切子玉8，棗玉1，ガラス小玉31である。

直刀は，玉類の検出された部分から南の羨門よりに検出されている。1は，西壁に沿って切先を羨門方向に，刃部を東に向けて置かれていた。直刀は，鍔が関部に装着されている状態で検出された。これ

は，石室主軸と一致しているので原位置と考えてよいであろう。３の直刀は，切先を南東方向，刃部を北東方向に向け，茎が１の直刀の刃部にのっていた。２の直刀は，切先を南西方向，刃部を南東に向け，１・３の直刀の上を交差した状態で検出された。この直刀は，鍔が刀身部にかかった状態であったが，おそらく西壁に立てかけてあったのが倒れたものであろう。

鉄鏃は，直刀より羨門部側に検出された。いずれも破片となっていたため，詳細な配列状態を復原することは困難であるが，身のわかるものは，ほぼ奥壁方向に先端を向けていた。



第20図　３号墳出土直刀

石室外の遺物として須恵器大甕破片が検出されている。破片は，２０数片からなり，墳頂表土下２０～４０cmのレベルに一括して検出された。これらの破片は，意識的に破砕して埋置されているとおもわれる。

また，盛土から円筒埴輪片若干が検出されているが，本墳に埴輪が使用されていないことは調査であきらかである。この破片は，つくり，ハケ目などからみて４号墳の埴輪としてよいとおもう。したがって，本墳構築の際に混入したものとおもわれ，本墳が４号墳より後出していることがわかる。

３　遺　　物

a　武器類

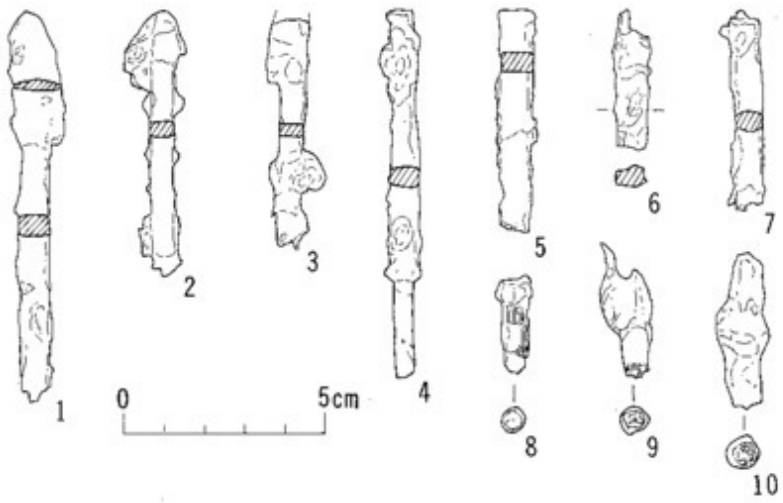
直刀　（第２０図，ＰＬ．１９－１～３）

１は，全長１０６.６cm，身長さ９０cm，身巾４.２cm，棟巾１cmの平棟平造の直刀である。出土の際，鍔が付いた状態で検出された。関部には，巾２.１cmの金具が装着されている。茎は，長さ１５.７cm，巾１.６cm，厚さ０.６cmで，茎端に近くなるほど細くなる。茎端より４.１cmと１２.６cmの２ヶ所に目釘が残存していた。目釘の現長は，２.９cmと２.１cmである。鍔は，無窓卵形の鉄製で長径９.７cm，短径７.８cm，厚さ０.６cmを計る。

２は，現在長８６.３cmであるが，錆が著しく，切先，関部，茎端をそれぞれ欠失している。身は，巾３.９cm，棟巾１cmで平棟平造である。茎は，現存長１４.８cm，巾１.７cm，厚さ０.４cmであるが，関部と茎端を欠しているため正確な計測はできない。茎には，２ヶ所の目釘孔が穿孔されているが，目釘は現存していない。両目釘孔間の間隔は９.９cmである。鍔は，卵形を呈し

ていたとおもわれるが，腐食が著しいため窓の有無もわからない。長径8.6cm，短径7.7cm，厚さ0.6cmである。

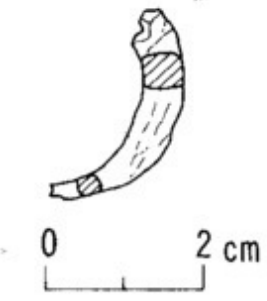
3は，現在長43.5cmで茎端を欠失している。本石室から検出した3口の直刀のなかでは一番短く，1・2の大刀と比較して短刀といってよいであろう。身長36.5cm，巾2.5cm，棟巾0.7cmの平棟平造である。関部には，巾1.2cmの金具が装着されているが，鍔はない。茎は，現在長7cm，巾1.6cm，厚さ0.5cmで，目釘孔はみられない。



第21図　3号墳出土鉄鏃

鉄鏃　（第21図，PL．20－2）

身部のわかるものは3本のみである。1は柳葉形を呈し，両丸造である。身長3.3cm，巾1.2cm，厚さ0.3cmで，篦被は，巾0.7cm，厚さ0.5cmで断面矩形を呈する。2も1と同形式とおもわれるが，腐食がはなはだしいために詳細は不明である。篦被は，巾0.6cm，厚さ0.4cmで断面矩形を呈する。3は，先端を欠失しているが，片関の形状を呈し，両丸造である。篦被は，巾0.5cm，厚さ0.3cmの断面矩形を呈する。4～7は，篦被である。いずれも断面矩形を呈する。4は，茎の一部が残存している。8～10は，茎の一部である。いずれも木質が残存している。



第22図　3号墳出土不明鉄器

不明鉄器　（第22図）

直刀の鞘に装着していた責金具の一部かとおもわれるが詳細は不明である。断面は矩形ないしは方形を呈する。

b 玉　　類

切子玉　（第２３図，ＰＬ．２１－３，付表１）

総計８個が検出されている。計測値は付表１の通りであるが，軸長1.５５～２４㎝，胴部径1.２～1.４４㎝で，いずれも片側穿孔である。稜は明瞭であるが，面にはキズが多い。材質は，すべて水晶である。

付表１　　３号墳出土切子玉計測値（単位　cm）

点	1	2	3	4	5	6	7	8
軸　長	1.7３	2.４０	2.１８	2.１０	2.０１	2.２８	2.２０	1.５５
胴部径	1.３０	1.３６	1.５０	1.３６	1.４０	1.４４	1.３９	1.２０

付表２　３号墳出土ガラス小玉計測値（単位　mm）

点	外径	孔径	厚	色調
1	4.００	1.１８	3.５８	淡青色
2	4.５４	1.５０	2.８２	〃
3	3.５８	0.９６	2.１６	紫紺色
4	3.９４	1.２０	2.３４	〃
5	4.３２	1.１０	2.７４	〃
6	4.５６	1.１２	2.５８	淡青色
7	3.３６	0.６８	3.５６	紫紺色
8	3.９６	1.２２	3.６６	〃
9	6.０４	1.８４	3.３０	淡青色
10	4.３０	1.１４	2.５０	〃
11	4.８８	1.１２	2.８６	〃
12	3.５０	0.９６	2.３０	紫褐色
13	3.３６	1.１２	1.８６	〃
14	3.６８	1.１８	2.０６	〃
15	4.２０	1.０４	2.３２	淡青色
16	4.００	1.３４	1.７８	紫紺色
17	3.７８	0.７０	2.３０	〃
18	3.５２	0.８２	1.７８	〃
19	6.３０	1.７２	3.７４	淡青色
20	4.３８	1.１２	2.７４	〃
21	4.１２	1.０２	2.７４	〃
22	4.３０	0.９２	3.０４	〃
23	5.１０	1.３６	3.１２	青色
24	7.５２	3.１２	3.７４	紫褐色
25	3.７０	0.９６	2.３２	〃
26	3.１２	1.００	2.６６	淡緑色
27	3.６６	0.８０	2.４４	紫紺色
28	3.３８	0.９４	2.３０	〃
29	3.５２	0.９２	2.４８	〃
30	4.０６	1.７４	2.４６	青色
31	4.１０	1.３６	2.１６	青緑色

ガラス小玉　（第２３図，ＰＬ．２１－１，付表２）

総計３１個が検出されている。大きさは，外径3.１２～7.５２㎜，厚さ1.７８～3.７４㎜の各種があるが，個々の計測値，色調については付表２に掲られたい。８，９，19，24をも小玉として含める点については，疑問がないではないが，ここでは詳説しない。色調の内別は，紫紺色16，淡青色１１，青色２，青緑色１，淡緑色１である。青色系統が圧倒的に多数を占めている。また，23，30，31の玉は透明感が強い。

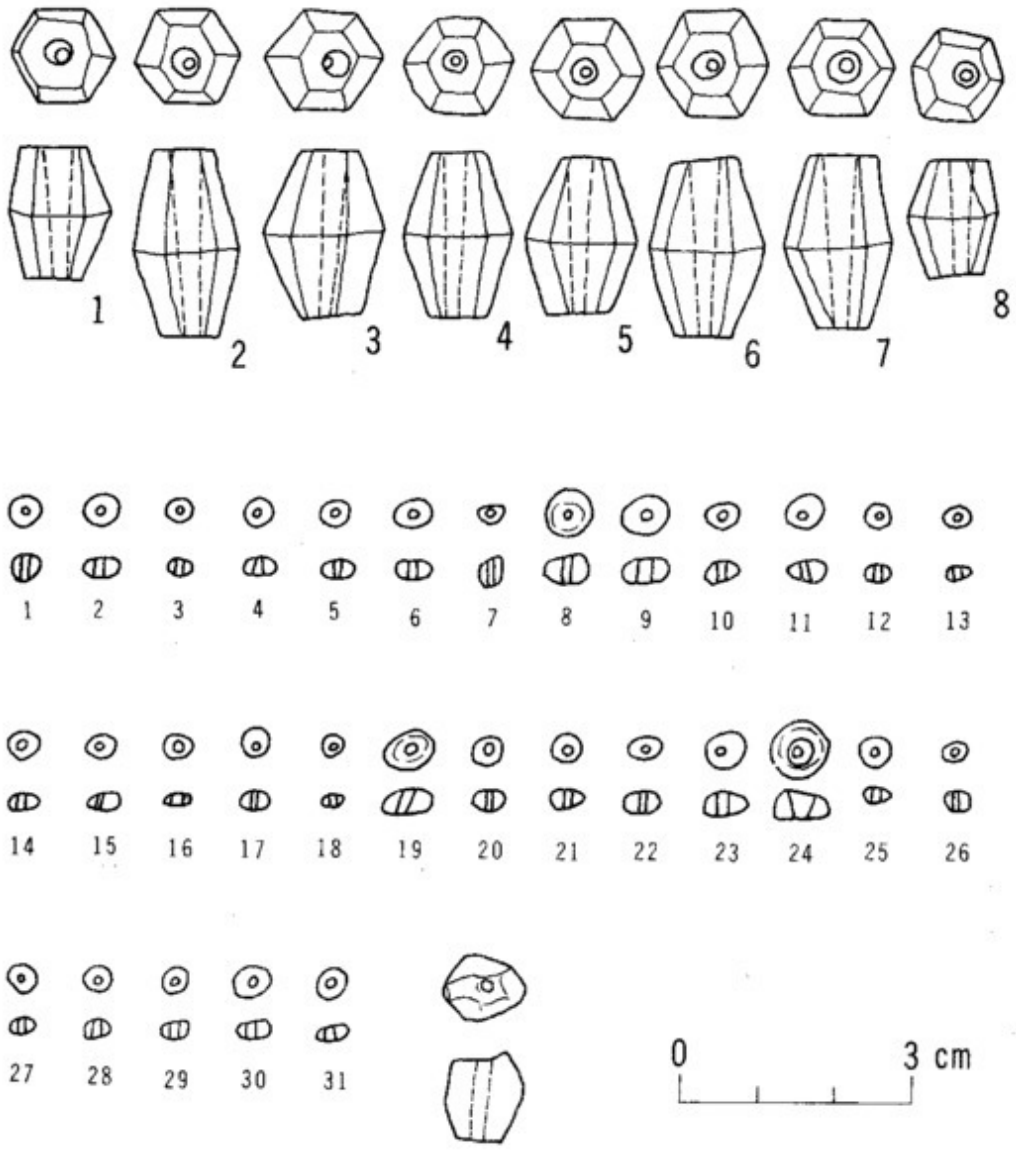
棗玉　（第２３図，ＰＬ．２１－１）

１個だけの出土である。軸長1.０５㎝，胴部径0.９９㎝で片側穿孔である。材質は，樹脂の化石した琥珀かとおもわれる。赤みを帯びた茶色を呈する。

c 土 器 類

須恵器破片　（ＰＬ．２２－３・４）

墳頂下からまとまって検出されたもので，青灰色を呈する大甕の破片である。破片は，全部で２０数片あり，口縁部５片，頸部１片で，あとはすべて胴部片であった。同一個体の破片とおもわれるが，まったく復元できなかった。口縁部表面には，波状櫛描文が２段にわたって施され，裏面は回転痕が明瞭である。肩部から頸部にかかる部分には，凸帯を張り出し，段をめぐらしている。胴部は，表面に縄席文，裏面に青海波文が施されている。



第23図　3号墳出土玉類

4　ま　と　め

本墳は，今回調査した古墳群中，一番小規模な古墳であった。本墳の埋葬施設は，南面に開口する無袖型の横穴式石室であるが，1，2号墳と比較してどうだろうか。まず，羨壁の構造は，3基とも共通しているとしてよいであろう。石材については，3基とも同じであり，荒い

面取り加工をした側壁を使用している点では，２号墳と共通する。２号墳は，盗掘によって内容が不明であったが，本墳では確実にそれをとらえることができた。しかし，直刀，鉄鏃，玉類というこの地域では普遍的な副葬品であったにもかかわらず，馬具や勾玉が含まれていなかったのは今後の問題となるであろう。

墳丘の構築は，石室の構築と深い関係性をもちながらなされていたことがわかった。本墳の構築年代をあきらかにできるものとしては，墳頂部下から検出された須恵器の大甕破片をあげることができる。この破片が混入したものや，後世に入ったものではないことは確かである。したがって，この破片によって，古墳の年代を検討できるとおもう。

（高根信和・小室　勉）

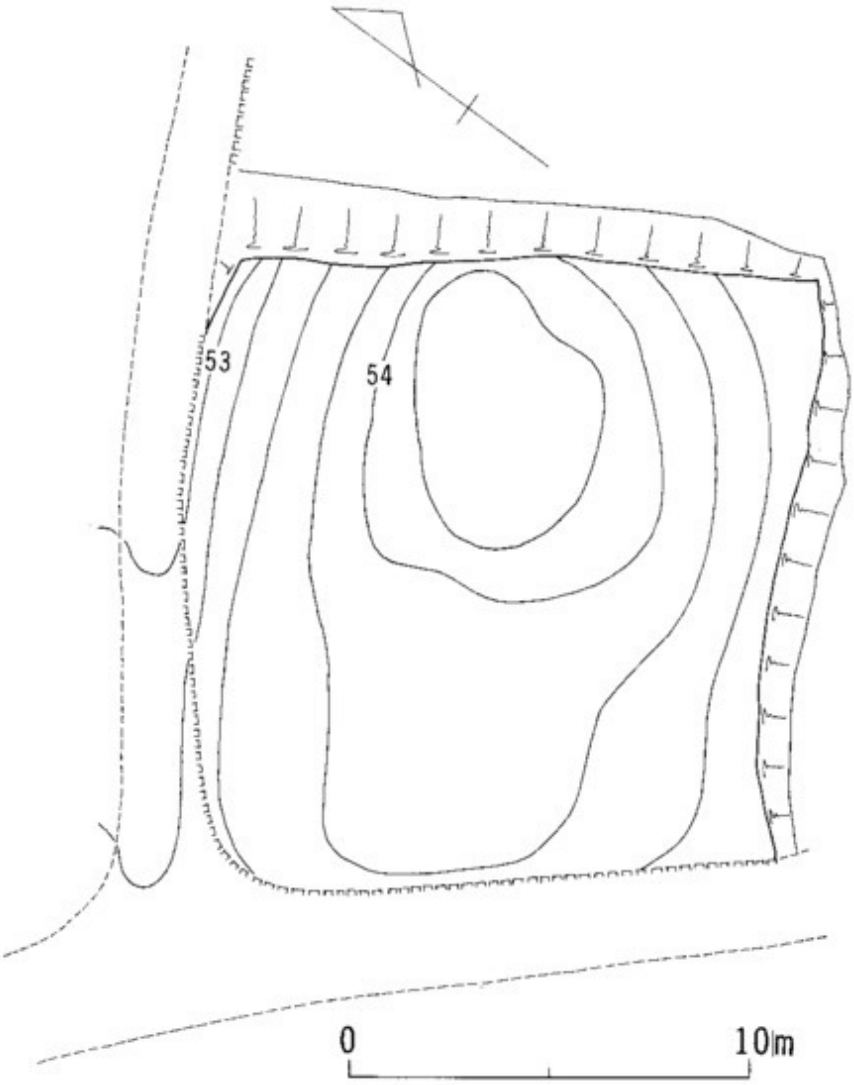
4　　号　　墳

本墳は，今回の調査で最初に発掘した古墳である。発掘調査は，県立大宮高校教員・生徒が主力となって８月８日から開始した。まず，丘かけの墳頂で直交する２本のトレンチを入れ，墳丘に埴輪が伴っていることを確認した。このため，できるだけ墳裾・周溝を露呈する調査方針をたて，トレンチを次々に拡張していった。周溝の調査が進むにしたがって，測量図が示す如く前方後円墳であることが判明した。埋葬施設は，調査に入って３日目に確認できた。当初埋葬施設は後円部墳頂付近に存在するものと考え，慎重に調査したのであるが，予想に反して，墳頂から西にかなりはずれて検出した。そこは，周溝の調査によってクビレ部から前方部にかけての位置であることが判明した。埋葬施設は，旧表土面から墓壙が掘込まれており，その中から割竹形木棺の痕跡を検出した。棺内からは，直刀１口，鉄鏃一括，管玉１，ガラス小玉１が発見された。埴輪の調査は，原位置の埴輪列を検出すべく努力したが，わずかに南側のクビレ部で基底部数個を確認したにすぎない。他はすべて周溝内に転落した状態で検出した。すべての調査が終了したのは９月９日であった。

1　墳　　丘

a　調査前の状況　（第２４図，ＰＬ．１１）

本墳は，今回の調査の対象となった４基の古墳の中では最南に位置する。古墳の北側には，玉川が形成する小規模な溪谷が進入している。本墳は，３号墳のほとんど南側に位置しており，両古墳の墳頂間の距離は２４ｍを計る。両古墳の周溝外端がもっとも接近している部分で３.６ｍを計った。調査前の古墳の状況は，墳丘全体が低い雑木と雑草におおわれ，墳丘の北側に農道が走っていた。墳丘の西側にも農道が走り，２本の農道が北西側で接していた。さらに，東側と南側は耕作による墳丘の破壊が著しく，畑地として削平されていた。このため，樹木伐採後の観察では，直径２０ｍ程の円墳のようにおもえたが，墳裾は方墳の如き形状を呈していた。このような観察の後に，墳丘測量を実施した。測量の結果，５４.２９ｍをトップレベルとして，－２５cmコンターの等高線を６本引くことができた。が，一周しているのはわずか１本の等高線だけで，あとはすべて墳裾の破壊のために一周できない。しかし，５４.２５ｍ，５４ｍの２本はやや不正形ながらも円形を呈しているが，５３.７５ｍの等高線は西側におおきく流れている。この形状が，単なる土砂の流出ではないことは，次の５３.５０ｍの等高線によってあきらかである。これによって，前方後円墳の疑いがもたれたのであったが，最終的な結論は発掘による確



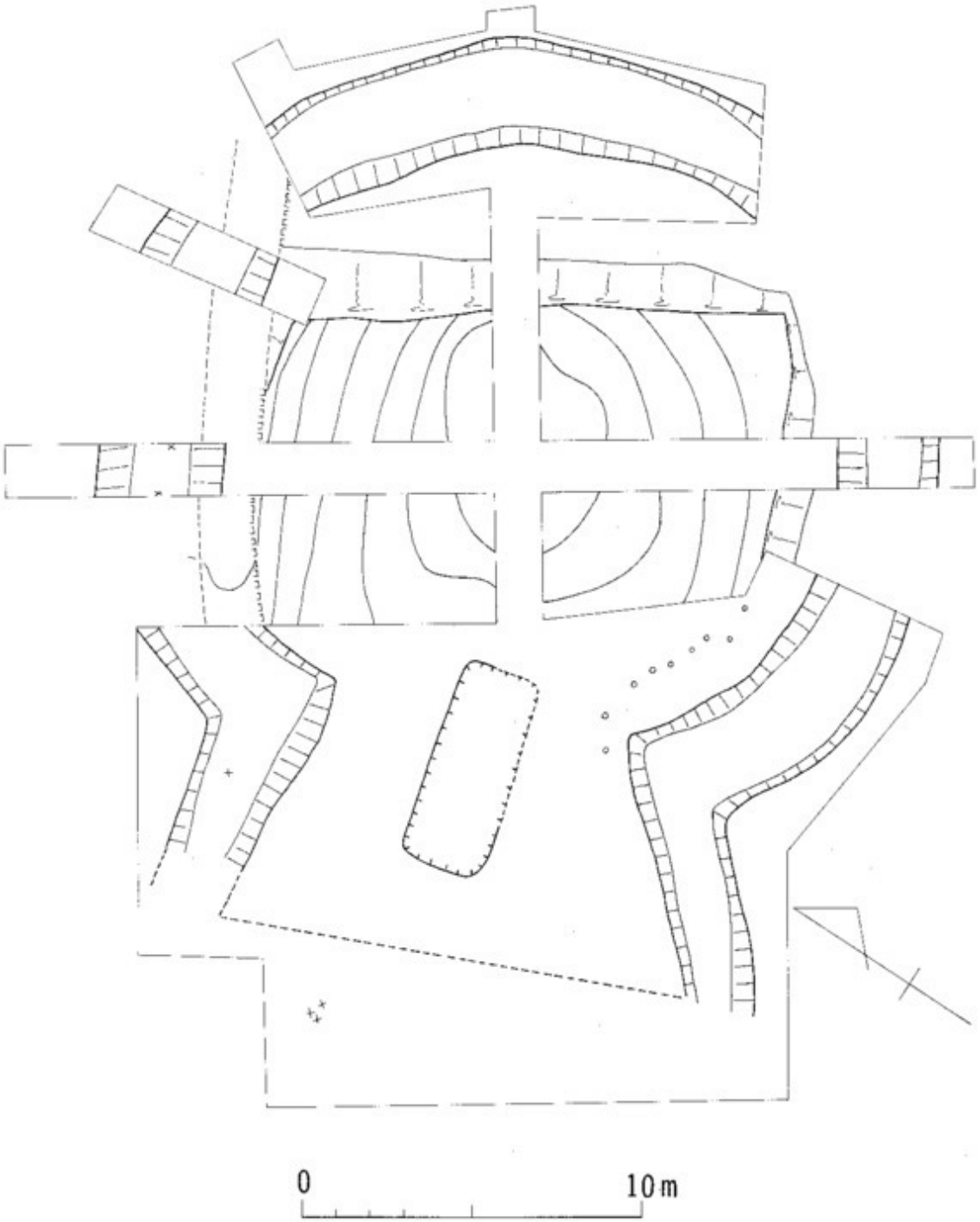
第24図　4号墳墳丘実測図

認をまたざるをえなかった。

b　盛土の状況　（第26図）

調査は，盛土の状況と墳裾をおさえるために，北西－南東方向に巾1.5mの第1トレンチを入れ，同様にこのトレンチに後円部墳頂で直交する第2トレンチを入れた。盛土の状況は，第1トレンチ西壁，第2トレンチ北壁のセクションで観察した。

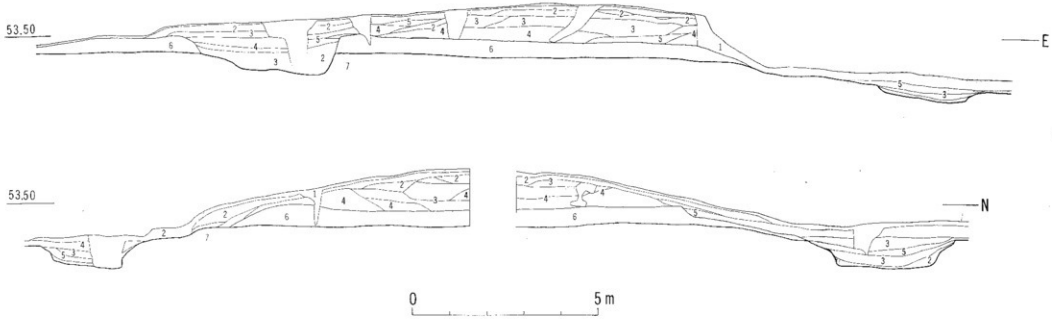
まず，第2トレンチ北壁セクションの観察所見をのべたい。このセクションの最下層は，地山であるローム層である。西側のレベルは53mであるが，東側の周溝外側では51.97mを計る。したがって，地山面ですでに1mもの落差が生じているわけである。この地山の上層と



第25図　4号墳調査区域図（○円筒，×形象埴輪出土地点）

して旧表土層（黒色土層）が平均５０cm程堆積している。旧表土面は平坦であるが，やはり東側に傾斜している。盛土は，後円部東側から開始されているようであるが，後円部東側は耕作によって，削平されていたので詳細は不明である。しかしながら，最初の盛土が東側からなされていることはセクション図によって確実である。最初に，粘性があってよくしまっている暗褐色土が盛られ，続いて，この層の西側に多量のローム・ブロックを含みしまっている褐色土が盛土される。さらに西側に，暗褐色土が盛られている。これらの土層は，２０～４０cm程度の厚みをもって盛土されており，墳丘構築の第１段階にあたる。この段階では，前方部に盛土された形跡はない。これらの土層の上に第２段階の盛土がみられる。第２段階最初の盛土は，やはり東側から開始されている。まず，暗褐色土が，次にローム・ブロックを含みよくしまっている黒褐色土が後円部中央に盛られ，この西側に多量のハード・ローム・ブロックを含みしまっている黒褐色土が盛られる。さらに，黄褐色土が盛られ，第２段階の盛土を終えている。ここまでの盛土は，旧表土面から７０cm程に達し，第２段階盛土層の上面は，ほぼ平坦である。埋葬施設の墓壙は，旧表土面から掘込まれているのがわかるが，ここで一番重要なことは，後円部の盛土と墓壙掘込みとの時間的前後関係である。まずいえることは，後円部の第２段階までの盛土が墓壙を意識した盛り方をしているということである。これは，後円部を盛土するにあたって，墓壙の位置がすでに決定していたことを意味するだろう。しかし，盛土以前に墓壙が掘込まれていたのであろうか。この場合には，第２段階の盛土が完了してから墓壙が掘込まれたとするのが自然であろう。第３段階の盛土は，墓壙内に埋土を入れてから再開されている。墓壙内埋土の最上層は，多量のローム・ブロックを含む褐色土があるが，この層の上層として，最初に東側で黄色土が小さく盛られ，続いて褐色土がその上に盛られている。この層と後円部第２段階盛土西側の黄褐色土との間に，粘性がありよくしまっている暗褐色土が入れられ，後円部と前方部が接合されている。後円部では，第２段階の上層に４０cm程のローム・ブロック・黒色土ブロック混合のしまった黄褐色土が盛られ墳丘が完成している。この層を第２段階にふくめるが，第３段階にふくめるかは即断できないが，最終的な盛土は，旧表土面から1.1ｍに達する。前方部側は，黄褐色土と黒色土が墓壙上面に４０cm程盛られ，覆土的な盛土であるのがわかる。

つぎに，第１トレンチ西壁セクションについてのべてみたい。旧表土の状態をみてみると，周溝落ち込み上端面には一定のフラットなテラス面があるのに気付くだろう。テラス面の巾は，北側で３.３ｍ，南側で３.８ｍを計る。テラスは，旧表土層を北側で厚さ５０cm，南側で厚さ３０cm程削り取って作っているが，北側では１０～２０cm程削り残しているのがわかる。周溝がこの層を切って掘削されているので，流出した土層でないことは確実である。第２トレンチでは確認できなかったが，このテラス部分に埴輪がすえられていたものとおもわれる。最初の盛土は，両端から開始されている。南側では，６０cm程の高さに粘性がありよくしまっている暗褐色土が盛られ，北側でも同質の暗褐色土が盛られている。これに続いては，南側で暗褐色土，



第26図　4号墳墳丘断面図

1　表土層
2　黄褐色土層
3　黒褐色土層
4　暗褐色土層
5　褐色土層
6　旧表土層（黒色土）
7　ローム層

黒色土が盛られる。さらに，北側から若干のロームブロックを含みよくしまっている黒褐色土が盛られ，その南側に多量のロームブロックを含んだ黒褐色土が盛られている。この段階での盛土は，旧表土層から高さ７０cm程で，前述の第２段階にあたる。これ以後は，黄褐色土を交互に盛って墳丘を完成させている。

以上は，ごく限られた墳丘切断面での観察所見であったが，注目すべき点をいくつかあげてみたい。まず，第１に，盛土が開始される以前に墳丘の基盤となる旧表土を加工している点である。加工は，後円部中心から5.5ｍ以上外側の旧表土を削り取っているのがわかった。これによって，周溝落ち込みの内側にはフラットなテラス面が生じている。この旧表土の削り取りは，前方部側に面する部位ではおこなわれていない。おそらく，旧表土を前方後円形に孤出させたのであろうとおもわれる。第２は，埴輪がこのフラット面の中程にすえられていたとおもわれることである。第３に，墳丘の盛土は，後円部の墳裾（この場合には，旧表土を削り取って作っているテラス面への落ち込み上端面を指す。）から開始されているわけであるが，東側から西側へと盛土されているのがわかる。つまり，最初の盛土は前方部側に面する部位を残して「Ｃ」字形に盛っている。埋葬は，後円部盛土の第２段階が終了してからである。このことは，埋葬がおこなわれる以前に後円部側ではすでに径１０.５ｍ，高さ0.７ｍもの盛土がされていたことを意味する。第３には，前方部の盛土は，墳丘と呼べる程の高さはなく，むしろ埋葬施設の覆土としての意味しか持っていないとおもわれる。その他の点については前述したので省略する。

ｃ　墳丘の平面形　（第２５図）

各トレンチに検出した周溝から，本墳は前方後円墳であることが判明した。しかし，後述する如く，西側の前方部先端の周溝は耕作による攪乱が多く，しかも，周溝の掘込みがクビレ部から西側にくるにしたがって浅くなっていたために前方部先端のコーナー部は確認できなかった。したがって，前方部先端の巾，および主軸全長は，埴輪の検出位置から推定せざるをえなかった。その部位の計測数値は，あくまで推定の域を出るものでないが，ある程度は，正確な数値に近いとおもう。

主軸は，ほぼ東西方向でＮ６５°Ｅを計る。後円部は，ほぼ正円形に近い形状を呈し，クビレ部から前方部先端のコーナー部にかけては，正確な対象形をなして開いている。それぞれの数値は，主軸全長２４ｍ，後円部径１８ｍ，前方部巾１４ｍ，クビレ部巾8.８ｍを計測した。この数値にしたがえば，主軸全長の$\frac{3}{4}$が後円部径にあたり，クビレ部巾の２倍が後円部径に相応する。このことは，古墳の構築にあたって，平面的な企画設計がおこなわれたことを示しているとおもえる。

d 周溝の状況

調査区域図が示す如く，墳丘の周囲を周溝が一周しているかどうかはわからなかった。墳丘の周囲は，耕作と農道によって墳裾が削平されており，その影響のためか，前方部先端の周溝は検出できなかった。しかし，全体的には，東側の周溝が深く，西にくるにしたがって浅くなる傾向にあり，この部位に周溝が存在していたか断言できないのである。後円部東側周溝の溝底面レベルは，５１.１９ｍを計測する地点があったが，クビレ部付近では，南側で５２.３１ｍ，北側で５２.３４ｍで，すでに1.１２～1.１５ｍもの比高がでている。これが前方部先端では，５２.９６ｍを計測し，1.７７ｍもの差がある。つまり，それだけの傾斜をもちながら東側にいくにしたがって溝底面のレベルが低くなっているのである。したがって，前方部先端に周溝があったとしても，ローム層まで掘込まない程度のものであろう。周溝巾は，後円部で平均3.２ｍ前後である。前方部側は，しだいに細くなる傾向がある。周溝の掘込みは，各所で異なるが平均５０cm程で，溝底は平坦である。

e 埴輪列の状況

本墳からは，円筒埴輪，朝顔形埴輪，人物埴輪，動物埴輪の各種埴輪が検出されている。周溝内からは，多量の埴輪片が検出されたが，いずれも墳裾から転落した状況を示していた。そこで，埴輪の囲繞形態を確認するために，各トレンチを拡張して調査を進めていった。調査の結果，原位置を示していたのは，南側クビレ部付近の墳裾に検出された円筒埴輪基底部片８個体分にとどまった。基底部は，後円部側で周溝の落込みから1.４～1.７ｍ内側に，０.６～０.８ｍ（中心間）の間隔をおいて検出された。前方部側では，落込みから０.７ｍ内側付近である。墳丘全体の囲繞形態は，一重で前方後円形に墳裾をめぐっていたものとおもわれる。その他の部分，例えば，後円部墳頂などに囲繞していた形跡はまったくなかった。形象埴輪は，古墳の北側，すなわち前方部先端北側から，後円部北側にかけて検出された。古墳の南側では，破片も検出されなかったのであるから，限定した位置に配置していたのであろうとおもわれる。朝顔形埴輪は，円筒埴輪とともに囲繞していたとおもわれるが，形態は，まったくつかめなかった。おそらく，数本の円筒埴輪に対して１本というような割合で配列されていたのであろう。円筒埴輪のすえ方は，ほとんどわからなかったが，南側クビレ部での観察では，旧表土は掘込んでなかった。しかし，前述の如く，旧表土を削って作られているテラス部分中央にすえていた可能性が強い。南側クビレ部での囲繞状況を資料として，本墳における円筒埴輪が何本使用されていたのか，その概数を算出してみると１００本程度となる。しかし，これはすべての埴輪を円筒埴輪としての計算であるから，実際にはこれより少ない数を推定できる。

（小宅　勉）

2　埋葬施設

a　埋葬施設（第27図，PL. 12・13）

埋葬施設の位置及び墓壙　埋葬施設は粘土槨で，前方後円墳のクビレ部の墓壙内に築かれていた。墓壙は黒色土の旧表土面から掘り込まれていた。旧表土は墓壙の東端で，標高約53.45m，北端ではそれより約15cm高く，西端で約5cm低い。北端の旧表土は他と比較して15～20cm高いので，盛土かとも思われたが，土層観察の結果旧表土と判断した。

その規模は旧表土上面で，東西（全長）約6.20m，南北（幅）約2.70m（東端で約2m，西端で約2.4m）のほぼ長方形で，深さは旧表土下約85～95cmであるが，北壁においては1.10mを示し，墓壙底面で四周ほぼ同レベルとなる。墓壙底面は東西約5.60m，南北約2mであるが，平面図上で東側は1.5mを示す。これは，2Tでローム土を切ってしまったためで，実際は約2mとみてよいだろう。墓壙の主軸方位はN76°Eを示し，前方後円墳の主軸方位（N65°E）より北に11°傾いている。

粘土槨は，墓壙底面をさらに掘り込んだ上に築かれていた。掘り込みは墓壙の主軸上にあり，西側は墓壙壁面に沿って下へ約15cm，東側は内に向ってゆるやかな角度で掘り込み，東壁約60cmのところで西側と同レベルになる。最深部は掘り込みの中央部でこれより10cm程下がり，標高約5.225m，旧表土下約1.2mである。従って，この第2次掘り込みの底部は東壁側において上昇はするものの，他の大部分はほぼ水平に近いといえる。幅は約1～1.1mであるが，西側で約70cm，東側（東壁まで掘り込まれているが，そこから内へ約60cmのところで分けることができる。）で約50cmを示し多少丸味をおびている。その断面はなだらかなU字形である。

粘土槨　第2次掘り込み上に築かれた粘土槨は，全長約5.5m，内法約4m，幅約1.15m，内法約65cmである。幅の内法については，B，Cセクション図をみると，両サイドの青白色粘土間の距離（槨床面上約30cmのところ）は約70cmである。しかし，この青白色粘土は発掘中多少削ってしまったこと。さらに粘土槨内の断面がU字形をなすので，断面がほぼ円形である割竹形木棺が使用されたと考え，内法は約65cmと推定した。

粘土槨は，2種類の粘土によって構成されていた。淡黄色粘土と青白色粘土である。第2次掘り込み上に砂利を含む淡黄色粘土を敷きつめ，つき固めている。厚さは中心で約8cm，中心から南北両サイドに行くにつれて増し12cm強となる。これは第2次掘り込みの断面がなだらかなU字形を示していたのに対して，淡黄色粘土上面を木棺の底部に合わせたためと考えられる。なお，南北両サイドの淡黄色粘土上には粘土粒子を含むローム土が重ねられているが，これはBセクションにおいてのみ確認され，Cセクションにおいては，そのローム土の上位のレ

ベルまで淡黄色粘土があるので，部分的に淡黄色粘土の不足分を補ったものと考えられる。この淡黄色粘土あるいはローム土上に青白色粘土が割竹形木棺の身を固定するように置かれている。厚さ約２２cm，長さ約３０cmで断面はほぼ三角形である。又，青白色粘土は，最高位で棺床面から約４０cmを示すので，割竹形木棺の身と蓋との目張りの役目も持っていたのであろう。なお，淡黄色粘土と青白色粘土との区別がセクション図の一部でしか明示されていないのは，発掘作業過程での不注意のゆえである。

粘土槨内の土層は２層に分けられた。粘土粒子を含む黒褐色土が淡黄色粘土上に５cm程あり，それは青白色粘土の最高位までみられた。この黒褐色土の最下位，いいかえれば淡黄色粘土上にはりつくように，若干の炭化物，及び副葬品が検出された。その上層には，しまりのない黒褐色土が約４５～５５cmあり，これは発掘過程において，旧表土下約５０cmのところで平面的にとらえることができた。

木棺の蓋の形状については，決め手となるものはないが，身と同様の形であったと推測する。

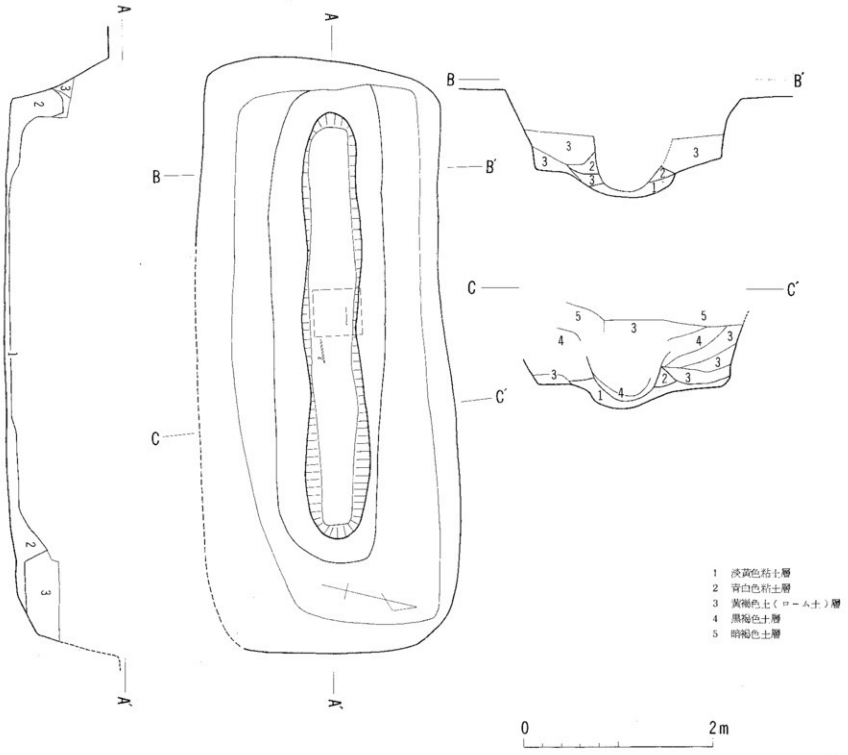
蓋が青白色粘土によって被覆されていたかどうかは，槨内に落ちこんだ粘土によって決定される。その粘土は，淡黄色粘土上の黒褐色土内のローム粒子及び，その土層の黒褐色土内の若干の粘土ブロックである。以上の粘土を持ってして，蓋が被覆されていたといえるかどうか。もし被覆されていたのなら，それは非常に薄かったであろう。従って，粘土槨というより，粘土床といった方が適切かもしれない。

裏込め及び覆土　粘土槨と墓壙壁との間を埋めている土層は，北，東，南において認められる。淡黄色粘土と墓壙壁間にローム土（部分的である）をほぼ水平に，その上に断面が三角形状の青白色粘土を固定するように黄褐色土を，さらに同じ黄褐色土を壁から内傾化させて二層積み，その内傾化している部分に黒褐色土を乗せてつき固めている。ただ墓壙の東側においては上記のような層序は示さず，一度に埋めたと思われる。この黄褐色土及び黒褐色土は上位で，標高約５３.１m（Cセクション）であり四周すべてつき固められている。この黒褐色土間，すなわち木棺直上をおおっていた土は２層に分けられる。下層は暗褐色土であり，上層は黄褐色土で，木棺が置かれていた直上なので共にしまりがない。

ここで，木棺は完全におおわれた。ほぼ平らになった上に，旧表土面まで，黒色土及び暗褐色土を主体として，周囲から内傾化させて埋め，さらに残った中央部を埋めている。

後円部との関係　第２トレンチ北壁セクションを観察してみると，墓壙内を埋めた褐色土が旧表土面まであり，その上に墓壙内と旧表土にまたがって，黄色ローム土が約８cmの厚さで乗り，さらに褐色土，黄褐色土が，後円部から墓壙上に傾けて積まれている。この土層はすべてしまりがない。以上の土層を基に，後円部構築と埋葬施設との関係を述べてみたい。

後円部の封土から墓壙が掘り込まれたと仮定するならば，墓壙は２段に掘り込まれたことになる。しかし，第１に，墓壙の北，西，南は全て旧表表土から掘り込まれていること。第２に，



第27図　4号墳埋葬施設実測図(水準線は標高53.50m)

後円部側の旧表土が，封土からの掘り込みによって何ら変形を受けていないこと。第３に，旧表土上の土層が後円部封土を構成している土層と連続性をもたずに後円部側から墓壙上に傾いていること。以上３点によって墓壙が旧表土から掘りこまれていたことがいえよう。ただ，墓壙に覆土する時点においては，すでに，後円部封土が存在していたのである。

粘土槨築造過程　以上を整理して粘土槨築造過程を推測してみたい。

1　旧表土面に，前方後円墳の平面プランを描き，埋葬施設の位置をクビレ部に設定する。墓壙の方位は，古墳主軸より11°東へずれてN76°Eを示す。

2　墓壙を掘る。規模は，旧表土上面で全長約6.2m，幅約2.5～2.7mで，深さは旧表土から約85～95cm（北端で1.1m）である。底面は全長約5.6m，幅約2mである。

3　墓壙の長軸上に第２次掘り込みを作る。その範囲は，東西で墓壙底面と同じであるが，東壁より60cmのところで区切る。幅は両端でやや丸味をおびているが，大部分は約1～1.1mである。

4　第２次掘り込み上に淡黄色粘土を敷きつめつき固める。断面は木棺の底部に合わせてU字形にする。

5　木棺（身の部分）を安置する。全長4m以内，幅約65cmと推定する。

6　青白色粘土で，身の側面を固定する。

7　遺体を安置し，副葬品を入れ，蓋をする。

8　青白色粘土で目張りをする。（但し，青白色粘土で蓋をおおったかどうかは断定できない。）

9　青白色粘土と墓壙壁との空間を黄褐色土で埋め，さらに黄褐色土を壁から内傾化させて積み，その内傾化した所に黒褐色土を積み重ねる，木棺の蓋の直上に覆土する。

10　旧表土まで，黒褐色土及び暗褐色土を壁から内傾化させて積み，最後に中央部に覆土する。

11　後円部封土と連結する。

12　前方部を褐色土でおおう。

b　遺物の配列　（PL．14）

粘土槨の床面上（淡黄色粘土上）に棺内副葬品として検出されたのは，直刀1口，管玉1個，ガラス小玉1個，鉄鏃19本である。

直刀は槨の中心点からやや東に，南側によって，刃部を南側に向けていた。身には木質部が残存していた。その方向はN68°Eを示し，槨の主軸方位はN76°Eであるから，埋葬遺体とほぼ平行におかれていたといえる。碧玉製管玉は，直刀の南側で，さらに管玉に接触するかのようにガラス小玉があった。

鉄鏃は直刀の切先から約25cm離れて，槨の北側に，先頭を東に向けており，それは槨の主軸にほぼ平行であった。ただ，槨の中央によっている数本は，先頭が他より多少ずれていること

や，この位置は遺体の直下になることから，移動したものであろう。

以上の遺物の配列によって，遺体は，割竹形木棺の中央部に，頭を東（後円部方向）に向けていたと考えられる。又，管玉及びガラス小玉については棺の南側によっていることから，首飾りでなく腕飾りとも考えることができる。

（荻沼勇市）

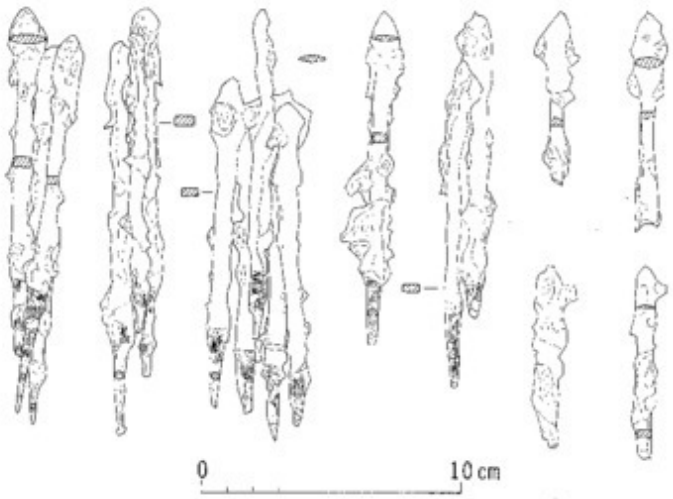
3 遺　　物

a 武 器 類

第28図　4号墳出土直刀

直刀　（第28図，PL.19－4）

現在長26.5cm，身長20.6cm，身巾2cm，棟巾0.4cmで細身，小形の直刀である。刀身部は，切先を欠いているが，本質部がよく残存している。上下に関をもち，茎長5.6cm，巾1.2cm，棟巾0.4cm，で茎端の一部を欠失している。茎巾は，関部で1.5cm，とやや広くなる。茎全体は，錆が著しいが，目釘がよく残っている。目釘は，長さ2cm，径0.35cmで，関部から4.8cmのところに装着されている。



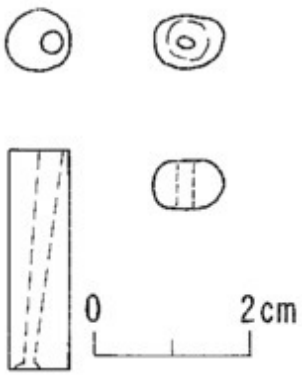
第29図　4号墳出土鉄鏃

鉄鏃（第29図，PL.20－1）

全部で19本を数え，すべて有茎鏃である。全体に錆が著しく，整理の段階でも個別に分離できなかったため，そのまま実測した。鏃の型式は，いわゆる　棘篦被鏃であるが，錆のため棘状突起を確認はしていない。茎までよく残っているものは，全長15.1cmを計測する。身の形状は，すべてが柳葉形式かとおもわれ，逆刺のあるものが5本確認

できた。両丸造りがほとんどであるが，１例のみ片丸造りである。篦被は，長さ７cm前後，巾0.6cm，厚さ0.3cm程の断面矩形のものが多数を占めるが，１例だけ巾0.5cm，厚さ0.4cmの正方形に近い断面をもつものがある。茎は，よく残っているもので，長さ4cm程，断面円形である。いずれも矢柄の木質が付着しているのがみられ，樹皮の残っているものも多い。

b　玉　　類



管玉　（第３０図，PL.２１－２）

碧玉製で長さ2.8cm，径0.8cm，横断面は円形を呈する。片側穿孔で，上端面孔径は0.3cm，下端面孔径0.１５cm，ななめに穿孔されている。色は濃緑色である。側面はよく磨かれているが，小さいキズが残っている。

ガラス小玉　（第３０図，PL.２１－２）

厚さ0.6cm，径0.７～0.9cmで横断面はやや楕円形を呈する。孔径0.2cm，濃青色で，表面は風化によるヒビ割れが著しい。

第30図　4号墳出土玉類

c　埴　　輪

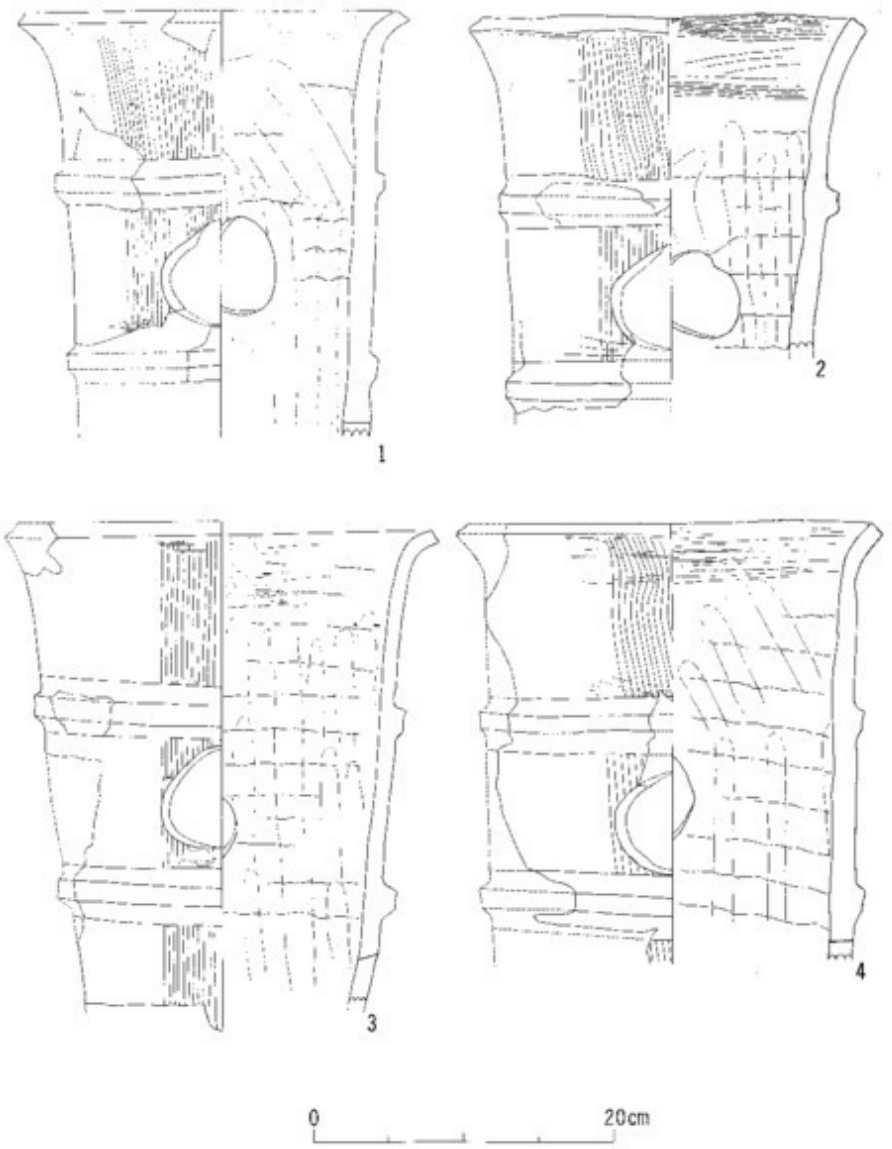
円筒，朝顔形，人物，動物埴輪の各種が検出されている。それらはかなりの量であったが，原形に復元できたものはない。

円筒埴輪　（第３１・３２図，PL.２７・２８－１，付表３）

円筒埴輪の破片は，本墳の埴輪のなかで圧倒的多数を占めている。整理の結果，全体の器形を示すほどに復元できたものはなかったが，ここでは，図示できた９個体の円筒埴輪を中心とした所見をのべてみたい。

まず，全体的な共通点からあげてみよう。本墳における円筒埴輪の基本的形態は，３条凸帯を原則としている。透孔は，全部で4孔あり，すべて円形を呈している。透孔の位置は，２段目と３段目に限られており，各段で相対する２孔が一組となっている。また，当然のことながら，２段目の透孔に対して，３段目のそれは直交した位置に穿孔されている。器高は，完形のものがないので正確な数値はわからないが，破片などから推定すると５０cm前後であったらしい。口径は，わかるもので２４～２８.6cmを計測する。底径は，基底部の資料が少なく，そのうえ後述する朝顔形埴輪との区別がついていないのでほとんどわからなかったが，１５.５cmと１８cmの２数値を得ている。円筒の外面は，上下方向のハケ目がみられる。ハケ目は，ほとんど垂直に近く施されている。製作技法からいえば，２～３cm程の粘土紐を巻上げて円筒形を作っているが，基部は，５～７cm巾の粘土帯を輪にして基礎としている。

以上が，本墳出土円筒埴輪の共通的形態の概要である。個々の埴輪の計測値などについては

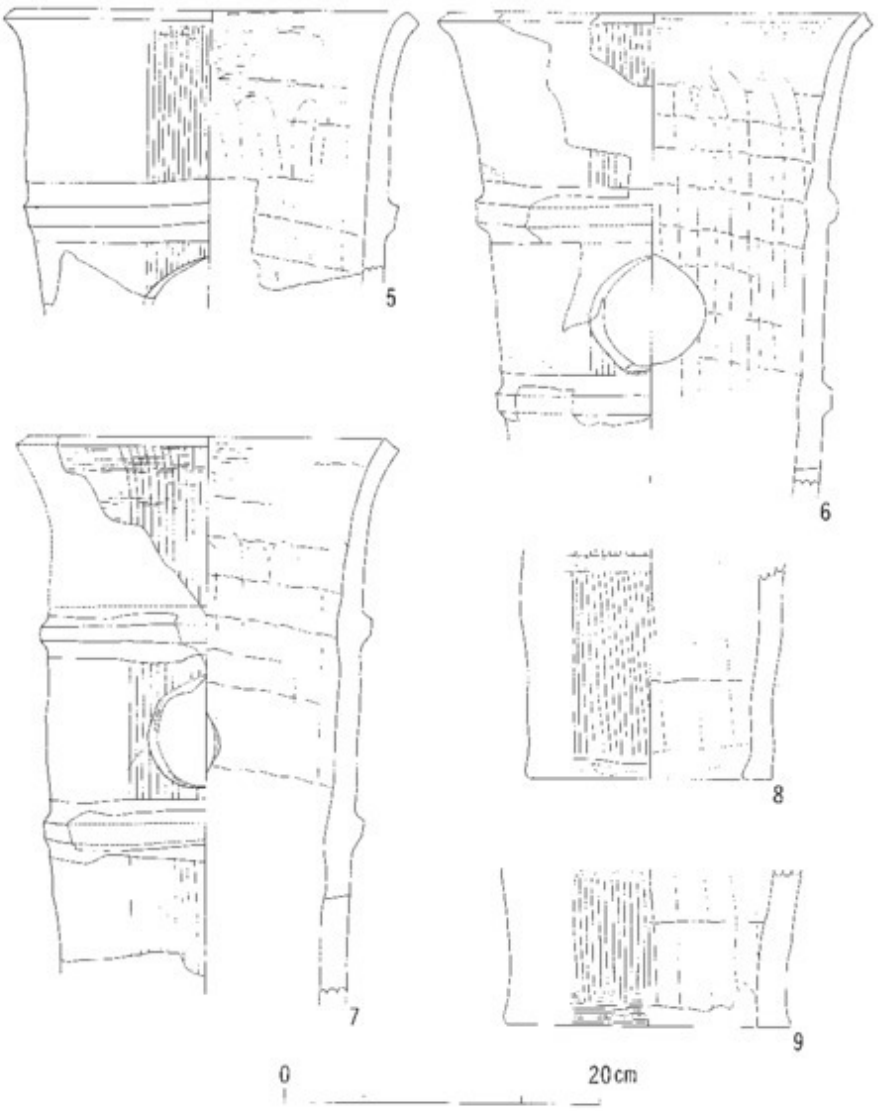


第31図　4号墳出土円筒埴輪1

付表にあげておいたのでここでは詳説しない。

つぎに，各部分についての観察所見をのべてみよう。

まず，成形法であるが，最初に5～7cm程の巾をもった粘土帯の輪を作っている。これが，円筒の基礎となる基部である。基部は，かなりしっかりしたつくりをもち，器厚は上位のどの器厚よりも厚く，底面で2cm前後のものが多い。№9には，2.7cmの厚さを計る部分もあった。基部の内面は，指頭による整形でなめらかである。これは，指頭で形を整えながら輪を作って



第32図　4号墳出土円筒埴輪2

いることを示している。しかし，このなめらかな面は，縦方向の手ナデによって底面から2cm程しか残っていない。基部粘土帯の接合は，Aa8で確認できたが右回りであった。基部の外面は，縦方向より先に施された横方向のハケ目が残存しているものがあった。これも基部を整形するときに施したものであろう。また，底面にしばしば植物繊維状の圧痕が観察された。長さ2cm程，巾0.4cmのものが多いが，木目ではない。

基部の整形後には，その上位に巾2～3cm程の粘土紐が巻上げられて円筒をかたち作る。粘土紐は，基部から口縁まで一気に巻上げているようであり，一度巻上げをやめて，かたちを調整してからもう一度巻上げているようなことをしていない。巻上げ方向は，観察した埴輪のす

付表3　4号墳出土円筒埴輪計測値　（単位　cm）

番	器高	口径	底径	器厚	透孔 下段		透孔 上段		凸帯 1	凸帯 2	凸帯 3	ハケ目	粘土紐巾	色調	成形	備考
1	(28.2)	26.3	—	1.1 1.6 —	—	27.5	14.0	13.7	—	23.3	11.1	6	2.0	赤褐色	左巻上げ。外面は縦ハケの後，部分的に横ハケで整形。内面は口縁から3.6cm下位まで横ハケ整形。そこより下位に左上右下斜方向の指ケズリ整形，この下位には縦方向の指ケズリ。	
				—	—	—	7.2	7.3	—	1.2	0.9	1				
				—	—	—	7.2	7.3	—	0.6	0.6	7				
2	(26.5)	26.8	—	1.3 1.6 —	—	—	15.4	15.9	—	24.5	11.8	5	2.0	黄褐色	左巻上げ。外面の縦ハケ，横ハケは№1と同じ。内面は口縁より5.4cm下位まで横ハケ整形。この下位に縦方向の指ケズリ。	
				—	—	—	(7.0)	—	—	1.1	1.2	1	1			
				—	—	—	7.1	7.9	—	0.5	0.7	6	2.6			PL.27-1
3	(32.2)	(29.1)	—	0.9 1.0 1.2	28.2	28.2	15.0	18.1	—	24.1	11.5	5	2.0	茶褐色	左巻上げ。外面は縦ハケの後，口縁下位・第3凸帯上位・上段透孔下位と第2凸帯上位の間に若干の横ハケ。内面は口縁より5cm下位まで横ハケ，この下から縦方向に指ケズリ。ケズリは荒い。	
				—	—	—	6.8	6.8	—	1.3	1.4	1	1			
				—	—	—	7.4	7.2	—	0.8	0.8	6	2.5			PL.27-2
4	(29.5)	(28.6)	—	1.1 1.6 —	27.9	—	(16.6)	(15.6)	—	24.5	12.5	5	2.2 1 2.9	茶褐色	左巻上げ。外面の縦ハケは各段ごとに不連続。縦ハケの後に口縁下位と第3凸帯上位に横ハケ。内面は口縁より4cm下位まで横ハケ整形。この下位から左上右下斜方向の指ケズリが口縁から14cm下位まで。この下位は縦方向の指ケズリ。	
				—	—	—	(6.8)	—	—	1.2	1.3					
				—	—	—	7.5	—	—	0.7	0.7					PL.27-3

5	(18.7)	26.3	—	1.1 — — —	—	—	15.6 — — —	—	—	—	12.3 1.3 0.7	5 1 6	2.5 1 3.6	黄褐色	左巻上げ。外面は縦ハケの後，口縁下位に横ハケ。内面は口縁より5cm下位まで横ハケ。この下位は縦方向の指ケズリ。	
6	(26.5)	27.6	—	1.0 1.3 — —	—	28.5	15.1 — (8.0)	(15.4) (7.2) 7.9	—	23.6 1.2 0.6	12.0 1.2 0.6	5	2.0 1 3.0	赤褐色	左巻上げ。外面は縦ハケの後，口縁下位・第3凸帯上位・第2凸帯上位に横ハケ。内面は口縁より4cm下位まで横ハケ。この下位は縦方向の指ケズリ。上位部は左上右下斜方向にカーブしている。	PL.27-4
7	(35.0)	24.0	—	1.1 1.4 1.6 —	28.9 — — —	28.9 — —	14.9 (7.0) 7.2	— — —	— — —	24.2 1.1 0.6	11.4 1.0 0.6	5 1 6	2.0 1 2.8	黄褐色	左巻上げ。外面は縦ハケの後に口縁下位5cmまで横ハケ。第2凸帯上位にも横ハケ。内面は口縁より1.6cm下位まで横ハケ。この下位に左上右下斜方向のハケが5cm下位まで整形され，続いて縦方向の指ケズリ。	PL.28-1
8	(14.4)	—	15.5	— — — 1.9	— — — —	— — — —	— — — —	— — — —	— — — —	— — — —	— — — —	6	?	黄褐色	基部粘土帯は右回りで接合。基部巾6.1—6.3cm。外面は縦ハケの前に最下部のみ巾1.3cmの指ナデ整形。内面は縦方向の指ケズリの前に最下部のみ巾1.6—2.2cmの指ナデ整形。底面に植物繊維状の圧痕。	
9	(10.0)	—	18.0	— — — 2.1	— — — —	— — — —	— — — —	— — — —	— — — —	— — — —	— — — —	5 1 6	?	赤褐色	基部巾6.7cm。外面は縦ハケの前に最下部のみ巾2cmの横ハケ整形。内面は縦の指ケズリの前に最下部のみ巾1.0—2.9cmの指ナデと指頭による整形痕。底面に植物繊維状の圧痕。	

円筒埴輪計測値凡例

1. 番　：第３１・３２図番号及び現品の註記番号に対応する。
2. 器高：（　）は現高。
3. 口径，底径：（　）は推定値。
4. 器厚：上の数値から順に，口唇部，３段目中央部，２段目中央部，底部。
5. 透孔：上の数値から順に，口縁より孔上端まで，縦径，横径。（　）は推定値。
6. 凸帯：上の数値から順に，口縁より上端稜まで，稜間の巾，厚さ。
7. ハケ目：２cm間の本数。

べてが左巻上げであった。

内面の整形は，大部分が指頭によるものである。基部から口縁部にかけては，指頭による縦方向の整形痕がみられる。これは，「指ケズリ」と呼称されている整形法に該当するものであろう。方向は，下位から上位方向である。それは，粘土紐巻上げ痕のつぶれ具合をみればよくわかる。しかし，この「指ケズリ」はあまり念入りに整形されず，巻上げ痕が明瞭に残っているものが多い。「指ケズリ」は，基部から口縁部中程まで一気に施しているものが多いが，№3では，これを何回か重ねているのがわかった。№1と№4では，縦方向の「指ケズリ」が3段目上位までしか施されておらず，そこから別に上位左上右下斜方向に整形しているのが観察された。この斜方向の「指ケズリ」は，縦方向のが続けて方向を変化させたのではない。それは，№4の状態をみればあきらかである。ここでは，斜方向の「指ケズリ」が縦方向より先に施されていることがよくわかる。口縁下位付近の内面は，ハケによる横ナデ整形がみられる。このハケナデは，口縁から4～5cm程下位まで施されているのが多いが，№6と№7では，横ナデの前に左上右下斜方向のハケナデがみられる。したがって，ここでは横ナデが口縁から1.5cm下位までしか施されていない。このように，口縁部の内面だけが下位の内面に比べて念入りに整形しているのは，外面と同様に「見られる」ことを意識していたためであろう。

外面は，ハケによる整形が施されている。ハケ目は，上下方向でほとんど垂直に近い。ハケ目の横断面は，どちらかといえばU字形をなしており，抉りは深くない。ハケ目の密度は，2cm間に5～7本というのがほとんどで，ハケ目としては太い部類に入るであろう。ハケは，一気に施しているものが多いが，№4の如く不連続のものもある。またまれに，やや波形になっている№2のような例もある。外面には，縦ハケのほか部分的に横ハケがみられる。横ハケは，縦ハケの後に施している。とくに，口縁下位，口縁部，2段目凸帯上位の透孔付近に多い。口縁下位のハケは，口縁の外反を整えるために施しているとおもわれる。ハケ目の巾は，1～2cmの間でごく狭い。また抉りは，縦ハケより浅い。この横ハケは，おそらく仕上げの段階で施されたものであろう。透孔によって切られている横ハケはないので，透孔切込みの後かとおもわれる。この横ハケの工具が，縦ハケを施した工具と同一のものかは，№3の第2凸帯上位にみられるような細いハケ目があるのでわからない。

口縁の整形は，指頭による横ナデが施されている。口縁は，2本の稜線が明瞭にわかる。口縁端部は，ややくぼむ傾向にあり，指横ナデによって端整に整形している。

凸帯は，よく円筒に密着しており，接合痕がわからない。上端には，明瞭な稜線を出している。断面は，上端稜の張出しが強調され，台形を呈するが，2本の稜線の中間の側面はややくぼんでいる。上端，側面，下端は，指横ナデによって丹念に整形している。

透孔は，鋭利なヘラ状の工具で切込まれている。切込みは，円の右上あたりから始まり，右回りにまわしている。しかし，これでは工具を途中で持変えることなしには円形に切取れない。

したがって，左上方向に工具を一度とめている痕跡がみられる。そのため，下半分は整った円弧を呈しているが，上半分の弧は乱れていることが多い。穿孔後に，指などによって整形している痕跡はなかった。

焼成は良好で，赤褐色と黄褐色の色調を呈するものが多い。胎土は，小礫と砂を混合しているのが一般的である。

つぎに，形態についてのべてみたい。前述したように，本墳の円筒埴輪は３条凸帯である。透孔は，４孔が穿孔されている。これが基本的形態をなしている。しかし，個々の埴輪にあたってみると，その個体差はかなりある。たとえば，口径にしても，大きいもので２８.６cmあり，小さいものでは２４cmである。したがって，この両者をならべて比較してみると，前者の方がかなり太身にみえる。口縁部の開き具合を観察してみると，これにも個体差がある。まず，大きく分類すると，(1)として，３段目上位付近から徐々に径を増しているもの，(2)として，口縁下位まで垂直に近くなっているものに分けられる。(1)には，№３，６があげられ，他は全部(2)としてよいであろう。しかし，全体的に口縁は徐々に外反するというより，急激に開く形状を呈している。凸帯は，厚さ０.７～０.８cm，稜間巾１～１.３cmの断面台形を呈し，上端稜を強調しているのが一般的である。透孔の位置は，ほとんど個体差がないといってもよい。径は，やや横径の方が大きい傾向があるが，概していえば円形を呈し，径の平均は７cm程である。

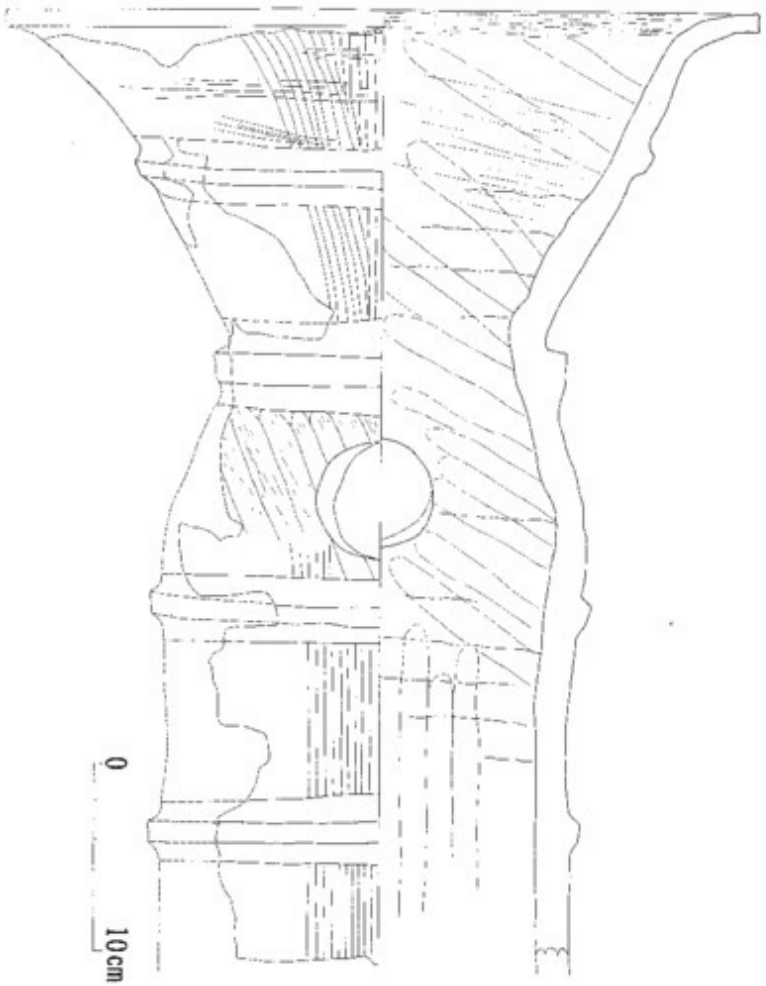
以上報告したのは，図示した円筒埴輪，およびその他の破片の観察所見であったが，このほかに，まったく別種としかいいようがない円筒埴輪が検出されている。それらは，２０数個の破片で図示することができなかったが，おそらく２，３個体の円筒埴輪であろうとおもわれる。出土位置は，南と北側のクビレ部周溝内で，他の場所からはまったく検出されていない。したがって，この埴輪の使用数は極端に少なかったのであろう。南側クビレ部周溝内から検出された破片については，いくつかの計測が取れるほどには復元できたので，以下それをのべていく。

口径は，推定で２２cm前後。４段目高さは１２.６cm。器厚は，口縁で０.８～１.３cm，第３凸帯（凸帯数はわからないが３条凸帯と仮定して）上位で０.８cmである。色調は，淡黄褐色で，焼成は硬く，全体的に薄手小作りの感じである。口縁は外反せずに，内反ぎみである。口縁端部は，指頭によって内側につぶされており，稜が明瞭でない。透孔は，径６cm前後が推定される。凸帯巾は，０.６～０.８cm，厚さ０.４cmである。凸帯の接合も粗雑で，接合痕が残っている。凸帯断面は矩形であるが，稜は明瞭でない。外面には，縦方向のハケ目がある。密度は，２cm間で７～１０本となり，いままでのべてきた円筒埴輪よりやや密である。挟りは深くない。内面は，縦方向の「指ケズリ」がみられるが，粘土紐巻上げ痕を消すほどに念入りではない。粘土紐は，巾２.１～２.８cmで上位になるにしたがって細くなる傾向がある。横のハケナデは，口縁外面，第３凸帯上端下端に施されている。

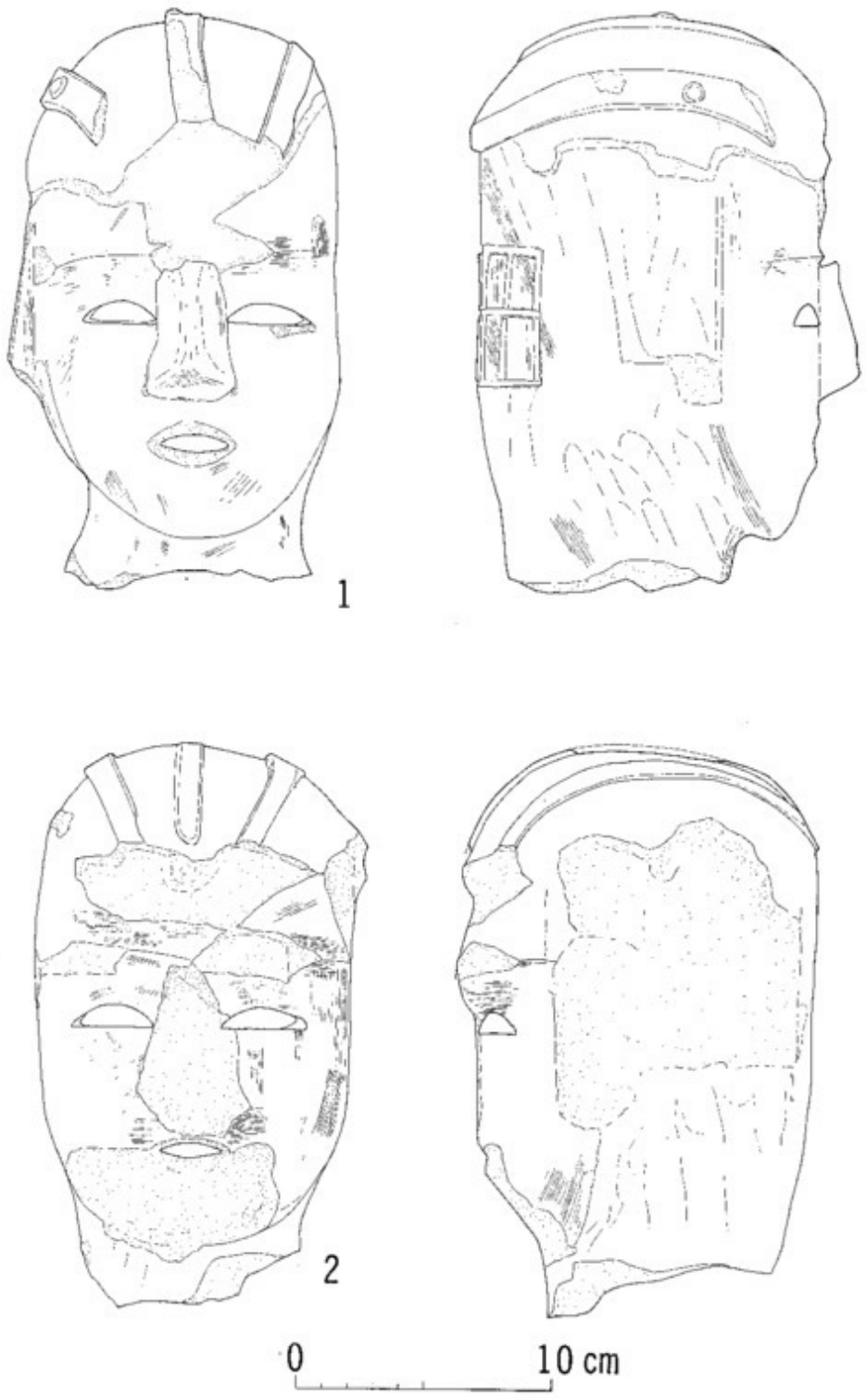
（付記）　円筒埴輪の報告を記述するにあたって，東京大学文学部考古学研究室編『我係子古墳群』我係子町教育委員会　昭和４４年，轟俊二郎『埴輪研究』第１冊　昭和４８年，吉田恵二「埴輪生産の復原 － 技法と工人 － 」考古学研究７５　昭和４８年，を参考とした。記して感謝の意を表したい。

朝顔形埴輪　（第３３図，PL.２８－２）

円筒埴輪に比べてその量は少ないが，墳丘をめぐる各所から検出されている。完形に復元できたものはなかったが，１例だけはおおよそ形状がわかった。図示した１例は，現高５０cm，口径４０cm，頸部径１６.８cm，肩部径２２.４cmで，現状では４条の凸帯がめぐっている。透孔



第33図　４号墳出土朝顔形埴輪



第34図　4号墳出土人物埴輪1

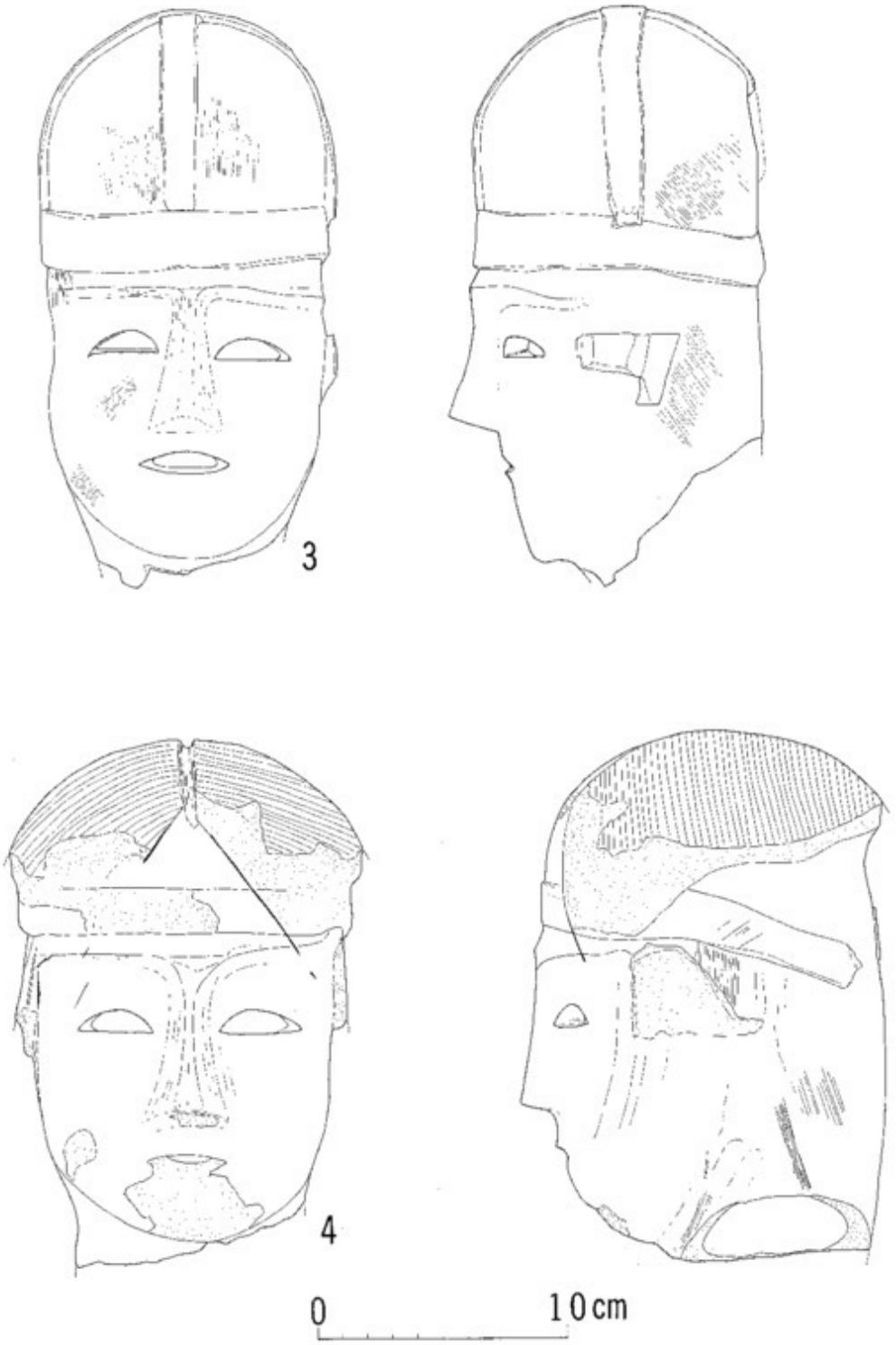
は，肩部に１対が穿孔されている。透孔径は，横径6.8cm，縦径6.3cmで円筒埴輪よりやや小さい。花状部は，約60°の角度で開き，口縁下位から急激に大きく外反している。成形法は，円筒埴輪と変わるところはほとんどない。巾２cm程の粘土紐を左巻きに巻上げている。外面は，２cm間で５－６本のハケ目が花状部と円筒部に施されている。肩部は，左上右下斜方向の「指ケズリ」が施され，その後を軽くハケで整形している。凸帯の上端，側面，下端は，円筒埴輪と同様に横の指ナデがみられる。これらの所見は，他の破片でも同じであった。この朝顔形埴輪の原形はどのようなものであろうか。もし，肩部下位までが円筒埴輪と同様の形態であったとするなら，凸帯は計６条となり，器高は８０cm程を推定できる。

人物埴輪　（第３４～３６図，PL．２３～２６）

形象埴輪のなかで人物埴輪は，５点の頭部と身体部，付属物，器台の破片が検出されている。ここでは，５点の頭部を中心として報告したい。

１は，武人埴輪頭部である。現高２８cm，正面横巾１３.１cmで，ややくすんだ黄褐色を呈する。頭部上位は，衝角付冑を表現する巾1.5cmの粘土帯３本が前頭部から後頭部上位まで接合されている。帯上には，直径0.9cm，高さ0.2～0.3cm程のボタン状突起がついている。鋲を表現しているのであろう。後頭部の下位には，小札綴りの錣が棒状工具による沈線で表現されている。錣は，８個並列の小札が２段になっている。また，PL．２５－３は，この頭部後側頸部に接合するものであるが，短甲を着装していることが沈線によってわかる。さらに，PL．２５－２もこれと同一個体とおもわれる。左肩から腕にかけての破片であるが，肩には小札綴りの肩当が沈線によって表現されている。頭部は，巾1.5cm前後の粘土紐を巻上げて成形している。内面の頭頂部は，よく観察できなかったが，フタ状の粘土盤をかぶせて接合しているようである。この技法は，以下の人物埴輪のすべてに共通してみられる。外面は，指ナデとハケによって整形されている。顔面は，眉を表現するために，薄い粘土を貼りつけて隆起させている。ここの造作は，鼻スジに対してやや右上り（正面から見た場合。以下の左右はすべてこれと同じ。）であるが，さほどアンバランスではない。鼻は，あきらかに貼りつけているのがわかる。鼻の高さは，1.6cmで，鼻下から鼻先にかけての角度は直角でなく，30°程上向きである。目と口は，鋭利なヘラ状工具による穿孔で表現されている。目は，ヘラを左から右に動かしたらしく，右側に上端と下端の合せ目がわかった。目の形状は，下端が直線で，上端が円弧をとる。横巾左３cm，右3.5cm，縦巾左0.9cm，右0.8cmである。鼻とのバランスからいえば，やや下位に穿孔されている。口は，縁部が剥離しているので原形はわからない。側頭部左側には，美豆良を表現した巾4cm前後，横断面台形の凸帯がみられる。途中で切れているのでその形状は不明であるが，おそらく肩付近まで長く垂れていた「さげ美豆良」であろう。さげ美豆良は，２，３，４で共通してみられる。

２も形態的には，１とほとんど同じであるが，１がやや面長であるのに対し，下脹れの感じ



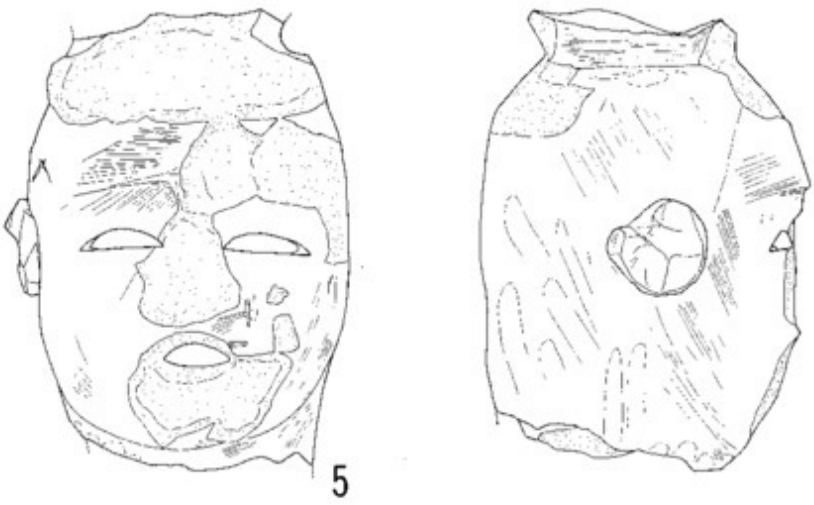
第35図　4 号墳出土人物埴輪2

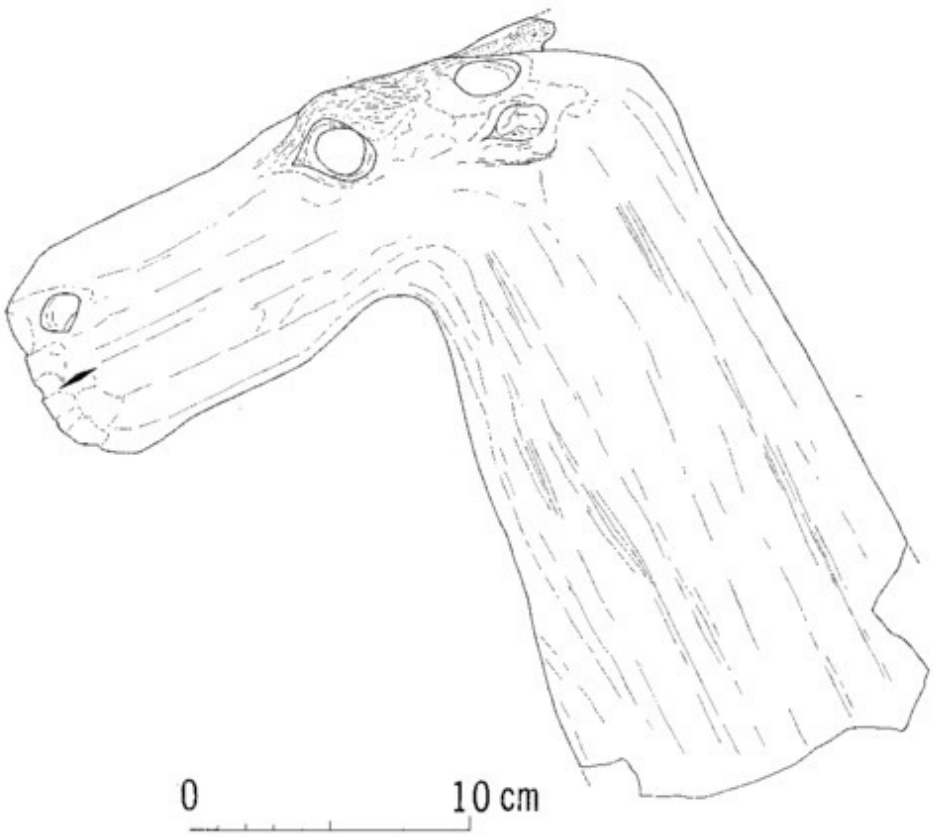
をうける。目の穿孔は，1とまったく同じで，計測値，形状とも一致している。しかし，後頭部下位に鍛は表現されていない。胴が剝離しているために，成形のときに貼りつけているのがわかる。

3は，明るい黄褐色を呈する男子埴輪頭部であるが，その形態は1，2とまったく異なる。現高23.2cm，横巾11.9cmで，1，2より小作りである。頭部上位には，3本の帯が貼りつけられている。これは冠帯の一種を表現しているものであろうか。とても冑とはおもえない。それが冠帯でないにせよ，何か冠り物をつけていることは頭の形状からしても確実である。第1の帯は，額を横にはしって後頭部中程に達している。帯巾は2.2cm程である。帯の両端は，後頭部中央で0.3cm程の隙間をもち接していない。第2の帯は，前頭部で第1の帯に接し，顔面の中心線上を頭頂部から後頭部へぬけている。後頭部側では，第1の帯に達せずに，2cm程間をあけている。第3の帯は，左右の側頭部で第1の帯に接し，頭頂部で第2の帯とクロスしている。帯の貼りつけ順序は，1→2→3である。帯上に装飾はまったく施されていない。顔面のつくりは，1，2とほとんど同じであるが，目の位置は左右がややアンバランスである。眉から鼻にかけての整形は，丹念によくなでられている。鼻の高さは，2cmで，1よりやや高く形も整っている。口は，上唇の形状がわからないが，下唇はやや外に出ている。全体的な顔面の整形は念入りにおこなわれている。

4は，男子埴輪頭部である。現高21.2cm，横巾14.2cmで，赤褐色を呈している。髪の形状は，中央で左右に分けて美豆良にしている。眉の上位には，ヘアバンド状の帯を貼りつけている。帯は，巾1.8cm程で，こめかみ付近までは直線をなしているが，側頭部から下降しはじめ後頭部に至る。後頭部では，帯端が接しておらず，3cm程の間隔をもっている。髪の中央は，中心線上に横断面U字形をなす太い波線が施されている。額は，鋭利なヘラ状工具による細い波線が三角形にはしる。この沈線によって，髪と額とを分離して表現している。毛髪は，ハケ目によって表現されている。ハケ目は，2cm間5～6本である。髪は，額の両端でヘアバンド状帯にかぶっている。顔面の作りは，前述のものとほとんど同じであるが，眉がやや釣上がっている。眉から鼻にかけては丹念に仕上げられている。口は，下唇が剝離してわからないが，上唇はやや外へ突き出している。

5は，唯一の女子埴輪頭部かとおもわれる。他の頭部と比較して一番小作りである。現高16.5cm，横巾12.4cmで，黄褐色を呈する。頭頂部は，欠失しているために抜けている。おそらく漬島田髷をのせていたものとおもわれる。左側側頭部中央には，耳を表現したとおもわれる径3.5cm前後，厚さ0.8cmの不正形な手捏状円盤が貼りつけられている。右側は欠落しているが，痕跡が残っている。耳としては稚拙な表現である。目の穿孔は，前述のものとほとんど同じであるが，やや下がり目風の感じである。これは左側眉の表現でも同じである。鼻および口から下腮は欠落している。





第36図　4号墳出土人物埴輪3・鹿形埴輪

このほかには，腕，美豆良，足などの身体部破片と，短甲，草摺，頭椎大刀，など装着物の破片が検出されている。

つぎに，人物埴輪の器台についてふれてみたい。調査で検出できた器台の破片はほんのわずかであった。その中でもっとも形状がわかる全身像の器台についてのべてみよう。推定で，底部巾３０～４０cm程，高さは３０cm程であろう。横断面で隅丸方形を呈する。底面から高さ２０cm程のところから本体をのせる面のためのカーブがはじまる。凸帯は，底面から５cm（凸帯上端破まで），幅間巾1.2～1.4cm，厚さ0.8cmで横断面矩形を呈する。透孔は，底面から孔上端まで１4.9cmを計り，縦径5.8cm，横径5.3cmの円形を呈する。全体の作りとしては粗雑な感じをうける。成形は，巾４～５cm，厚さ1.4～1.8cmの粘土を基部とし，巾２cmの粘土を巻上げている。巻上げ方向はわからない。内面はよくなでられており，とくに基部は念入りに整形されている。外面は，全体に２cm間５－６本のハケ目が荒く施されている。また，凸帯側面には，左上右下斜方向の平行条痕が施されている。

動物埴輪　（第３６図，ＰＬ．２５－１）

検出した埴輪のなかで，動物埴輪と認められるものは１例だけである。全体は，一見「馬」によく似ている形状を呈しているが，以下の点で「馬」とは断定できなかった。第１に，馬具が装着されていない。第２に，「たてがみ」がない。第３に，両耳の間に２個の円孔が穿孔されており，整理の結果，角状の破片が接合できた。このような所見から「鹿」を表現しているのではないかとおもわれる。現高は，頸部を垂直に立てた状態で２９.８cmであるが，胴部の破片から推定すると原高は５０cm近くになるとおもわれる。成形は，２～3.6cm程の粘土紐を左まわりに巻上げてつくっている。色調は黄褐色を呈し，焼成は良好である。口部は，指頭による整形痕が残っている。口径は，3.8cmで円形を呈する。側面には，長さ1.5cm程の条痕が両側にみられる。条痕より1.5cm上位には鼻孔がみられる。孔径は，1.5cm前後で円形であるが，後側は粘土を盛上げて鼻孔が前面を向くようにしている。口部から１３.５cm（中心で）の部位に眼孔が作られている。眼は，上瞼が盛上がっており，縦巾2.5cm，横巾3cmを計る。眼の後側のやや下位には耳が作られている。耳は，後側に反っていたとおもわれる。形状は，外縁が欠損しているのでわからない。耳の上位（頭頂部にあたる）には，角を挿入するための２孔が穿孔されている。径2.3cm程の円孔であるが，整理の結果，右側は角を接合できた。角は，現長4.3cmで先端が欠損している。しかし，さほど長いものではなかっただろう。後頭部の作りは，うまくいかなかったらしく，丸みをおびて頸部へ移行していない。おそらく，頸部の円筒作りをここで一度止めてから頭部を作り始めたとおもわれる。頸部は，ほとんどなだらかに仕上げている。図示した頸部下端での器厚は1.6cmである。内面は，左上右下斜方向の「指ケズリ」によって整形されている。外面は，口部を除いて，ハケによって整形されている。しかし，一部ではヘラケズリのような痕跡もみられるため，断定はできないがヘラとハケを併用してい

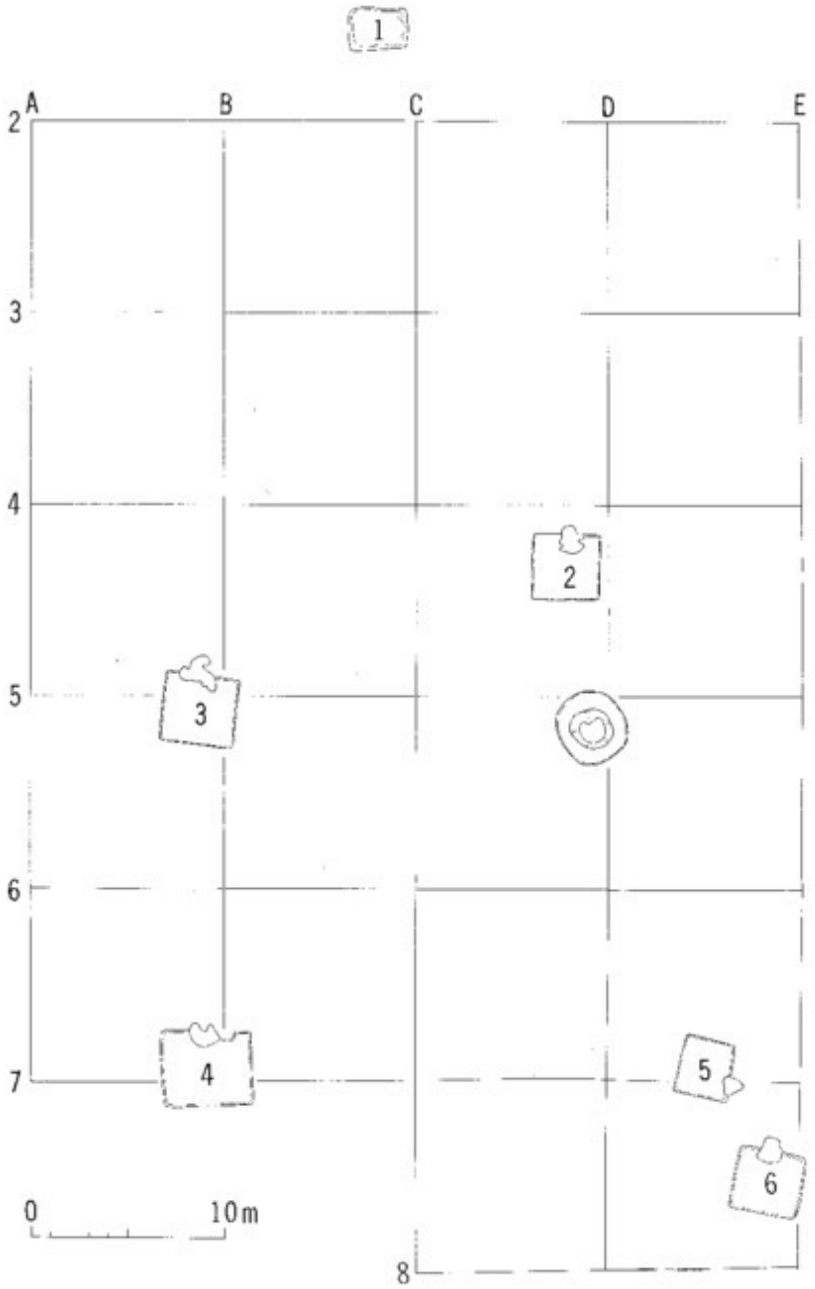
たかもしれない。胴部は，図示できるほどに復元できなかったが，胴部が器台の役割をはたしているという特殊な構造をとる。つまり，胴部の横断面は「Ω」字形をなし，足を作ってはいない。おそらく，胴部が直接土にふれる形で配置されていたのであろう。尾は確認できなかったが，これは当初からなかったのかもしれない。制体長は，４５～５０cm程と推定される。全体の形状としては，すわっている「鹿」の姿を表現しているとおもわれる。また，外面には「鹿」の特徴である白斑を表現するとおもわれる薄い斑点がわずかに観察できた。

4　ま　と　め

調査によって，本墳が古墳群のなかで中核的役割をはたしていることがわかった。まず，第１に，埴輪の使用があげられる。第２に，埋葬施設の特異性である。どのような理由からあのような位置に埋葬したのであろうか。第３として，副葬品の貧弱性を指摘できるかとおもう。墳形として前方後円を採用し，外観を円筒埴輪や形象埴輪群で飾り立てながらも，直刀１，鉄鏃１９，管玉１，ガラス小玉１という内容は貧弱としかいいようがない。これはやはり，北常陸のもつ停滞性後進性を反映しているのであろうか。しかし，一面においては，貧弱な玉類が形骸化した葬送儀礼の実態を具象しているわけであり，他古墳群との比較のなかで位置づける必要があろう。

（小室　勉）

III. 住居跡の調査



第37図　住居跡全測図

1 号 住 居 跡

1 概要（第38図，PL．16－1）

本住居跡は今回調査した住居跡群の北側より発掘されたもので，東西３ｍ，南北２．１ｍの矩形を呈する住居跡でありコーナーは丸味をもっている。壁の状態はローム を約30cmほど掘り下げきつく傾斜していた。

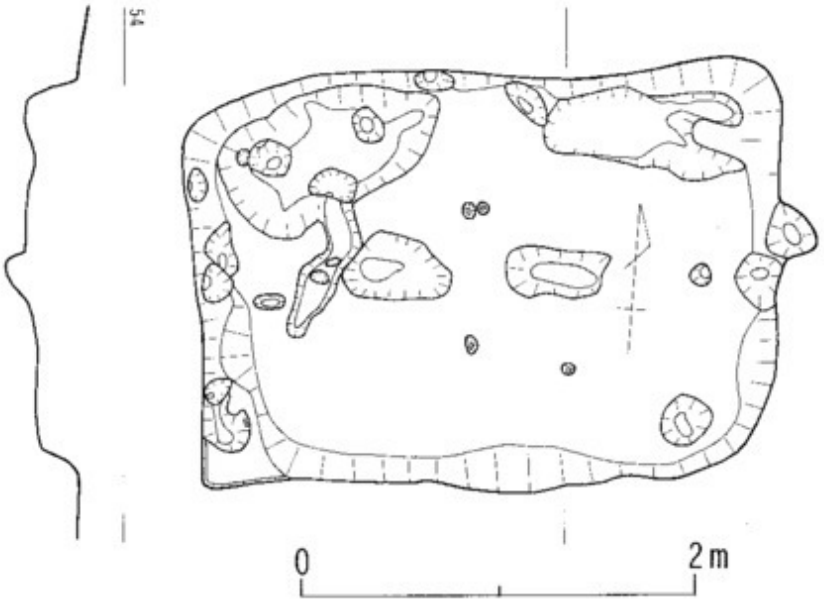
床面は，全体に凹凸がみられるが，堅くしまっている。

柱穴は，東・西壁のほぼ中央に一個ずつ検出できた。ピットは，床面の壁附近に10数個検出されたが，いずれも不整形を呈している。カマドは検出されなかった。覆土は竪穴の大半をしめる黒色土層であり，その下部に黒褐色土層が床面まで堆積していた。

遺物の出土状況は，主に西壁よりの不整形なピット状の凹地にわずかに土器の数片が細くくだけて出土した。

2 出 土 遺 物

本住居跡から出土した遺物は，土師器であるが，いずれも破片であり，復元は不可能である。わずかに坏形土器がみられる程度である。



第38図　1号住居跡実測図

2 号 住 居 跡

1 概要（第39図，PL．16－2）

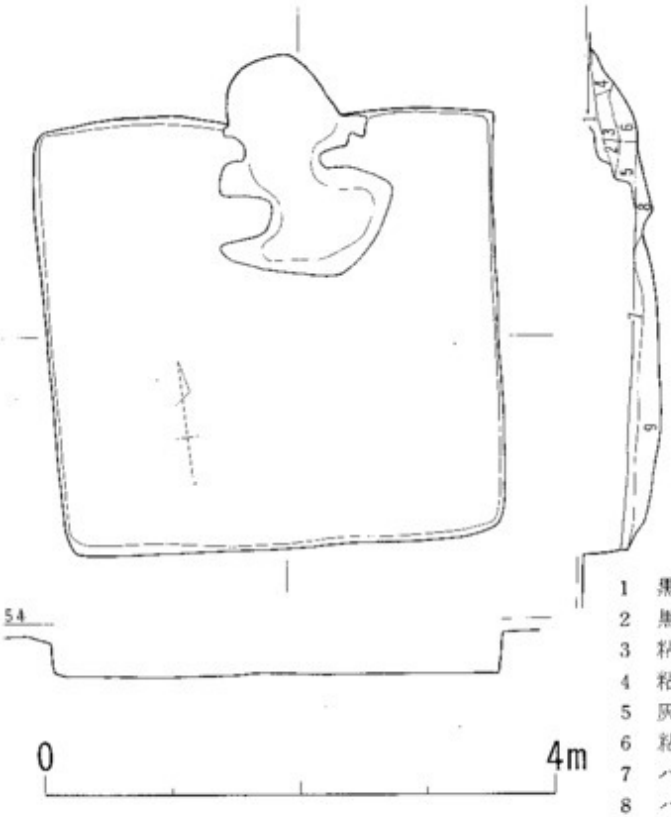
本住居跡は，土壙の北約5mの地点に位置する。東西3.5m，南北3.4mの方形プランを呈する。

壁はロームを30cmほど掘り込んでおり，その状況は，きつく傾斜している。コーナーはむしろ角状を呈している。

床は，ハードロームブロックの混在する黒色土層よりなる貼床で，全体的にしまりがよい。周溝はない。

本住居跡はピットはなく，従って，柱穴は確認されなかった。

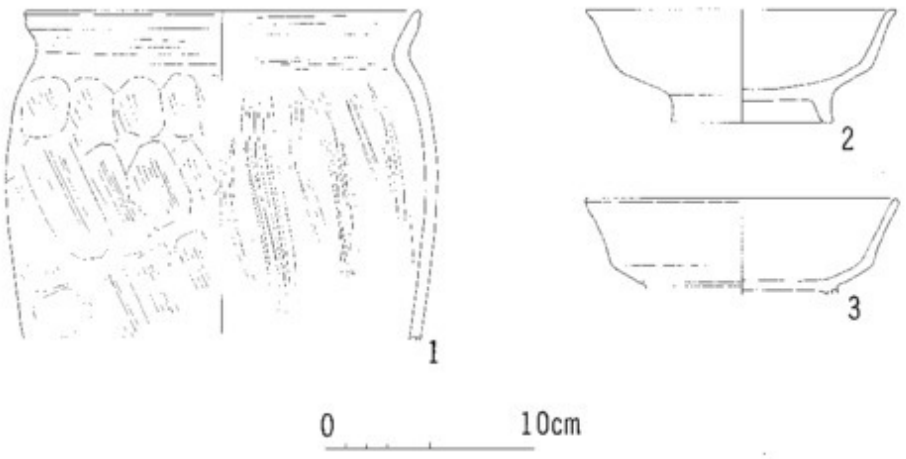
カマドは住居跡の北壁のやや東側によった中央に位置しており，平面は楕円状を呈する。巾約1m，軸長約1mで全体的に灰混合の褐色土層が，くずれた状態で検出した。従って，焚口，煙道，それに掛口が残っていない。覆土は，表土層下に，黒褐色土層が床面まで堆積していた。



1 黒褐色土層
2 黒色土層
3 粘土ブロック・灰・混合黒色土層
4 粘土ブロック・ローム粒子混合赤褐色土層
5 灰混合褐色土層
6 粘土ブロック混合灰層
7 ハードロームブロック土層
8 ハードロームブロック混合黒色土層
9 ロームブロック混合黒色土層

第39図 2号住居跡実測図

遺物はカマド附近を中心として，土器片が散在していた。

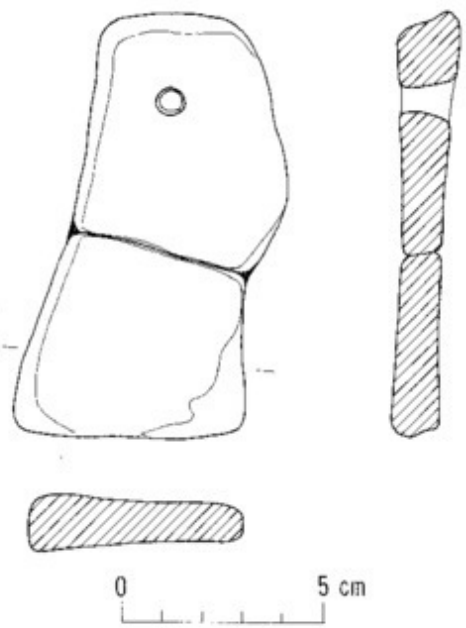


第40図　2号住居跡出土土器

2　出土遺物（第40·41図，PL．31－1）

本住居跡より出土した遺物の完形品は，甕形土器1，高台付坏2，砥石1が出土した。その他の遺物は，破片である。

甕形土器は胴部から底部が欠けているのが1個出土した。器形は，口縁が短く外反する長胴の甕で，成形は胴部にヘラけずり，内部にハケ目があり，口縁部は，ヘラナデで整形をしている。胎土は小石まじり粘土，焼成は良好，色調は，黄褐色を呈する。



第41図　2号住居跡出土砥石

高台付坏形土器は2個出土している。いずれも同形，法量も同じである。整形はロクロを使用し，胎土は，土砂，小雲母まじり粘土，焼成はきわめて良好，色調は，内黒色，外側は，黄褐色でやゝくすんでいる。

砥石は，カマドの右側より出土した。石質(材)は砂岩製で，はじめ完形品で出土したが，水洗中破損した程，非常にもろい。全長約10.6cm，中約5.3cm，厚さ1.5～1.0cmで，断面は，中央がややくぼむ長方形を呈する。が，水平に全面使用，うら，おもて使用されている。上部に直径約0.7cmほどの丸く穿かれた穴があいており，紐をつけ提げたのではないかと思われる。

3 号 住 居 跡

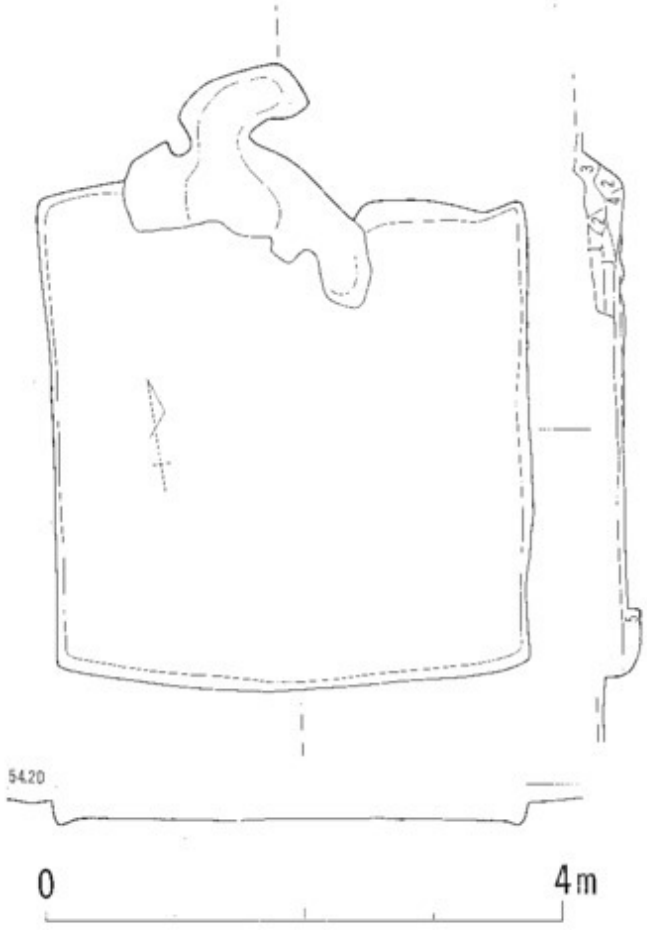
1 概要（第42図，PL．17－1）

本住居跡は住居跡群中最も西側から発見された。東西3.65m，南北3.8mの方形プランを呈する。壁は，ロームを17cmほど掘り込んでおり，きつい。住居跡のコーナは角状であり，壁にそって周溝が東南西側に不明瞭ながら確認をできる。床は，2号住居跡同様貼床で非常によくしまっている。

ピット・柱穴は確認できなかった。

カマドは，北壁のやや西側よりに位置している。不整形で粘土が流れ，くずれた状態を呈している。

覆土は，表土層下に黒褐色土層が床面まで堆積していた。貼床は，黒色土層が混在するロー



1 粘土・灰混合褐色土層
2 粘土・灰混合層
3 灰混合黒色土層
4 灰・ローム粒子混合暗褐色土層
5 ロームブロック層

第42図 3号住居跡実測図

ムブロック層からなっている。

遺物は，カマド附近の北壁側と東壁の南よりより出土した。

2　出土遺物

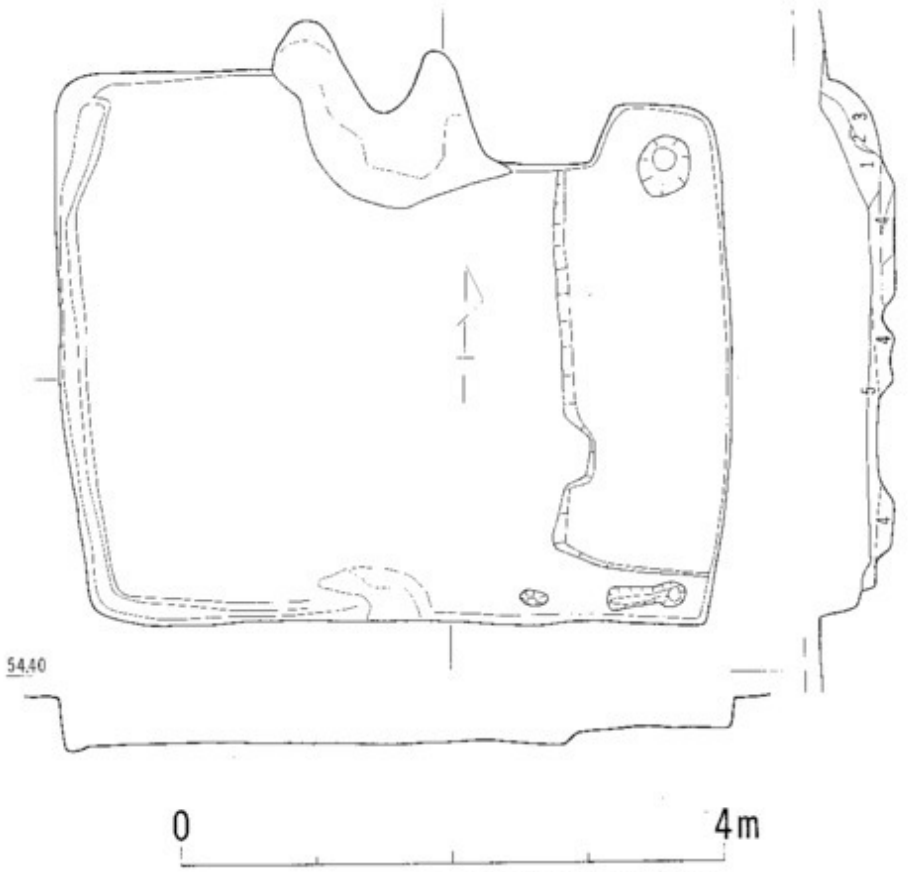
出土遺物は，土師器であるが，完形品は出土せず，破片のみである。それらを分類すると，甕形，坏形土器が多い。

4　号住居跡

1　概要（第43図，PL．17－2）

本住居跡は，5号住居跡の西方約22mのところに位置して発見されたものである。

東西4.95m，南北4mの方形プランを呈する。壁はロームをやや垂直に切り込み住居跡のコーナーはやや丸い。床は，貼床で，しまりはほぼ平均に住居跡全体をおおっている。



第43図　4号住居跡実測図

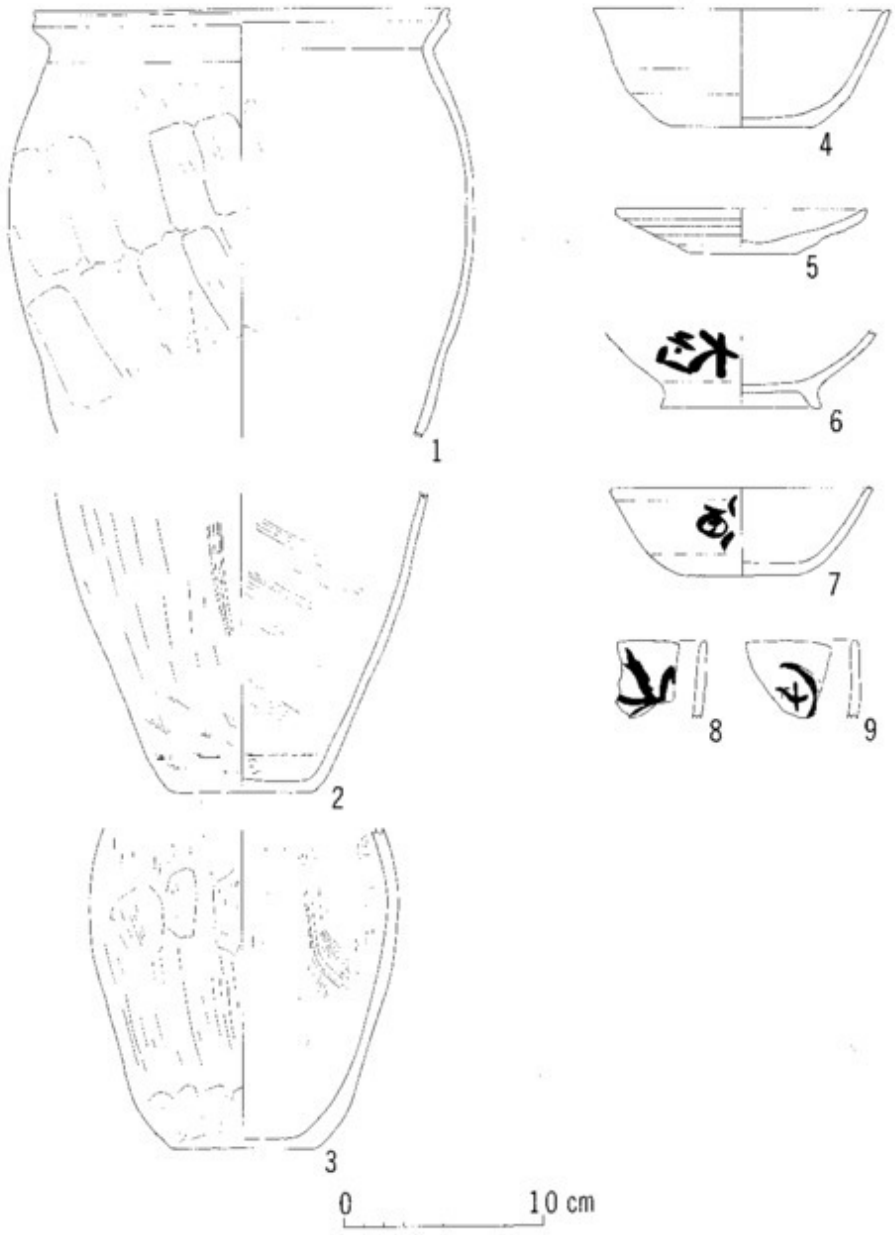
1　粘土・灰混合褐色土層
2　粘土
3　灰・炭化物混合赤褐色土層
4　ロームブロック混合黒色土層
5　ロームブロック土層

周溝は，西側壁が顕著であるほかその他の壁は明確でない。

ピットは北東コーナーに一つ発見されたのみで，柱穴はともなわない。

カマドは，北壁中央に，粘土が流出し，つぶれた状態で出土した。覆土は他の住居跡とまったく同様の状況を呈している。

遺物は，他の住居跡と異なり，住居跡の床面に全面的に散在して出土した。



第44図　4号住居跡出土土器

2　出土遺物（第44.45図，PL.30）

本住居跡より出土した遺物は，大半土師器で，甕形土器，坏形土器，小皿，墨書坏，墨書高台付坏，墨書土器片，鉄片等である。

甕形土器（3）

土器は，口縁部をふくむ器形の半分，1個分。他の2個は，下半分（底部）が出土した。口縁部は短く，外反する長胴の甕で，口縁部はよこなで，胴部にはヘラけずりで整形を施している。胎土は小石まじり粘土。焼成は，良好。色調は，ややくすんで黄褐色を呈する。

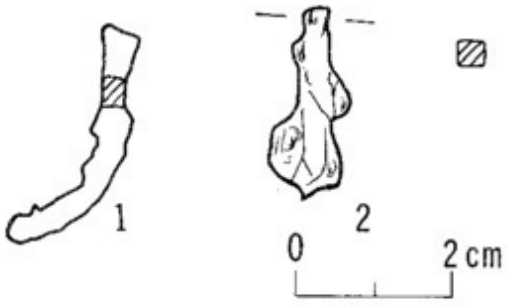
甕形土器の底部は，約$\frac{1}{2}$復元実測する。焼成，胎土，色調も長胴の甕形土器と同質形のものである。

坏形土器は，完形品1個出土した。整形は，ロクロを使用し，胎土は，砂まじり粘土。焼成はやや悪い。色調は，内黒色，外側は黄褐色を呈する。

皿形土器は，1個出土した。整形は，ロクロを使用し，胎土は小砂まじり粘土。焼成は良好であるが，色調は，黄褐色でやや灰色にくすんでいる。

墨書土器は4個出土した。高台付坏1，坏形土器1と坏の口縁部破片2である。高台付坏と坏付器形の横に二字が書かれており，無理して読むなら「大田？」であろう。他の破片に書かれているものは文字とはほどとおい記号のようでもある。墨書土器の出土は，本住居跡のみであることも注目される。

鉄片(2)は，釘の一部分と思われる。さびがはげしく悪い。断面は約3㎜の方形を呈する。



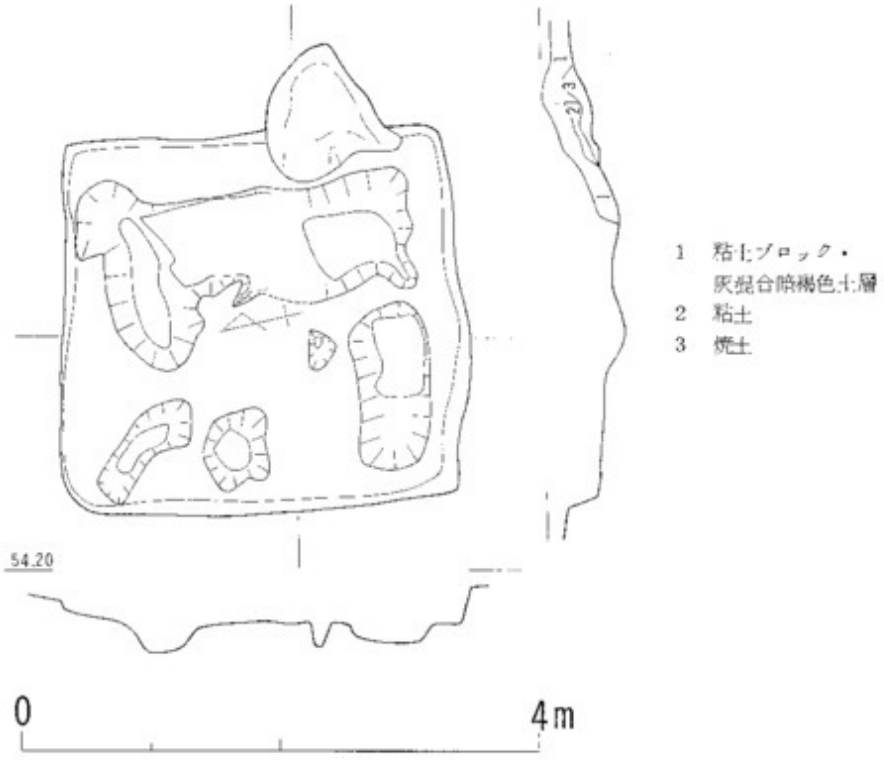
第45図　4号住居跡出土鉄片

5　号　住　居　跡

1.　概要（第46図，PL.18－1）

本住居跡は，6号にほぼ接する状態で発見されたものである。

東西3.1m，南北2.9mの方形プランを呈する。



第46図　5号住居跡実測図

壁はローム を切り込み，住居跡のコーナーは丸味をおびる。床は全体的に凹凸がはげしい。

周溝はない。ピットは，西側壁附近に1つあるが柱穴はない。

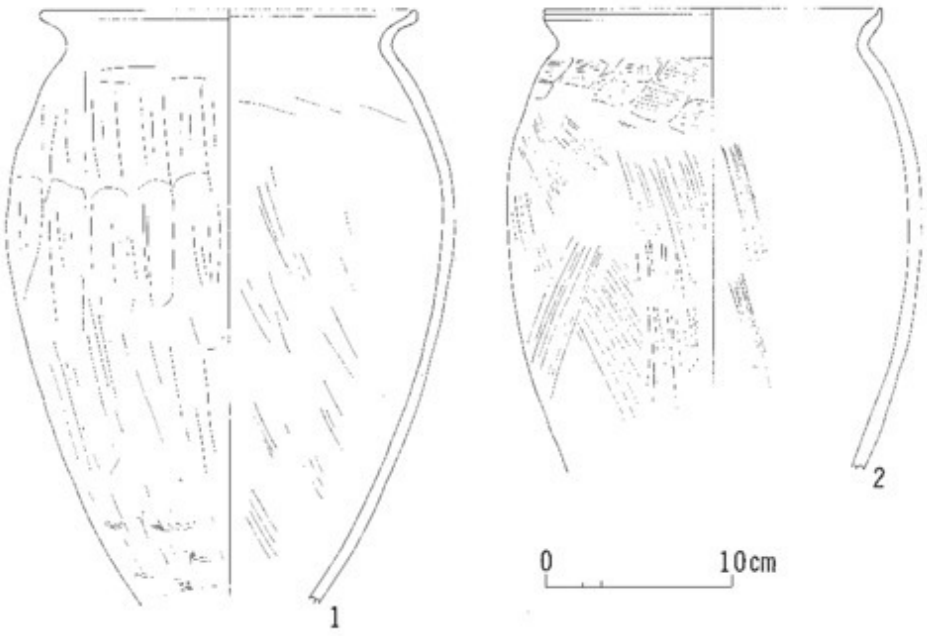
カマドは，東壁に粘土が流れた状態で検出した。

遺物は，住居跡のほぼ中央より出土した。

2　出土遺物（第47図，PL．29）

本住居跡より出土した遺物は，土師器で，甕形土器が底部を欠いて2個出土した。

口縁部は短く外反する，よこなで整形し，胎土は小石まじり粘土，焼成良好。色調はややくすんだ茶褐色を呈する。



第47図　5号住居跡出土土器

6　号　住　居　跡

1　概要（第48図，PL．1ℓ－2）

本住居跡は5号住居の南に接して検出された。

東西3.55m，南北3.4mの方形プランを呈する。壁，コーナの状態は5号住居跡と類似する。床は，ほぼ水平に一様のかたさにかためられてしまっている。ピット，柱穴は確認されなかった。

カマドは，北壁にそってつくられており，内より甕形土器が口縁部を下にむけ出土した。

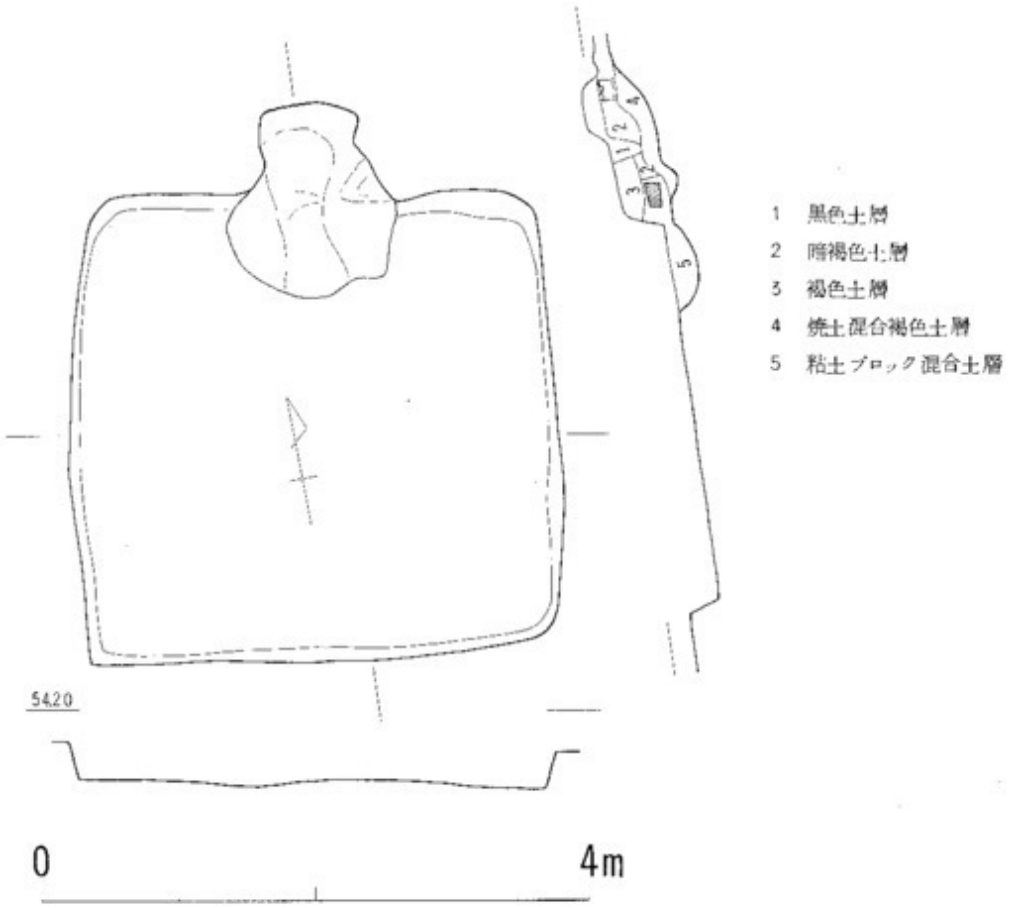
遺物は，住居跡内全体に散在した状態で出土した。

2　出土遺物（第49～51図，PL．31－2～4）

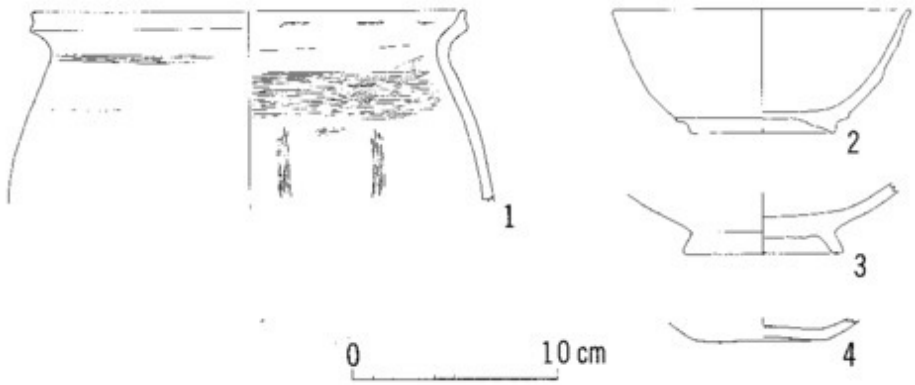
本住居跡より出土した遺物は，他に住居跡に比して，多くバライティに富んだものである。大半は土師器で，甕形，坏，高台付坏，刀子，鉄片，石ノミ，紡錘車，土錘等である。

甕形土器は口縁部が外反する，5住出土の土器と法量，器形とも類似するものである。

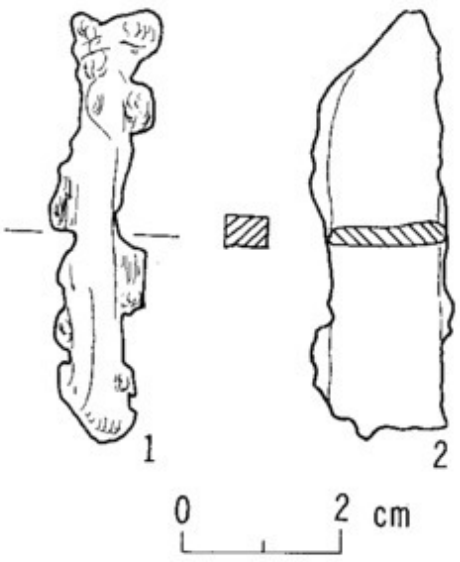
坏形土器は，$\frac{1}{2}$破片で，整形はロクロ使用し，底部は糸切り底，胎土は小砂まじり粘土。焼成はよい。内黒で，外は黄褐色を呈する。表面に墨書の痕跡があるようにおもわれる。



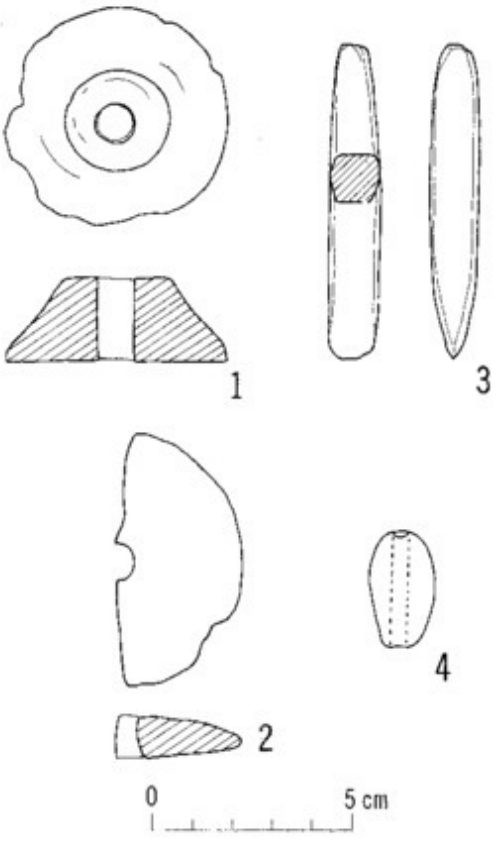
第48図　6号住居跡実測図



第49図　6号住居跡出土土器



第50図　6号住居跡出土鉄片



第51図　6号住居跡出土土製品・石製品

高台付坏は，1個出土した。ロクロで整形しており，胎土，焼成とも良好である。

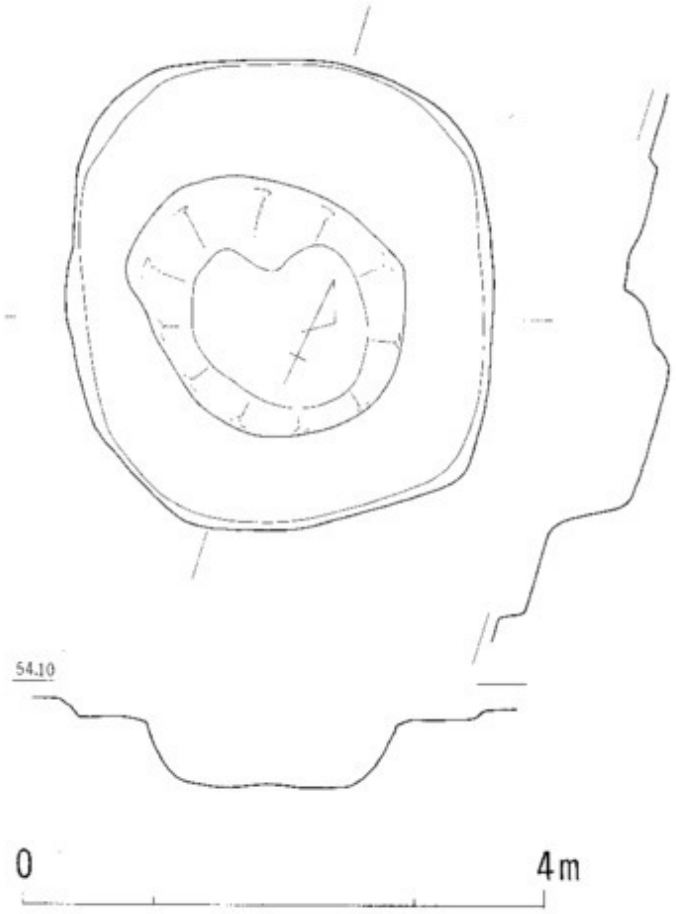
刀子は，先端部のみで茎はない。現長5.3㎝，巾1.5㎝をはかる。腐蝕しているので，かろうじて刀子の形態をとどめているにすぎない。

石ノミは，長さ7.8㎝，巾1.3㎝，厚さ1.2㎝，磨製の蛤刃をもつ柱状ノミ形石斧である。

紡錘車は2個出土した。1個は石製で他は土製である。石製は，摩滅が著しく，現形は半分で径6.4㎝，孔の径0.6㎝程である。土製のものは，直径5㎝で断面は梯形を呈する孔径0.9㎝程である。

土錘は1個出土した。孔径0.4㎝。孔の先端は摩滅している。色調は灰褐色を呈する。

これらの遺物の中で石ノミについては，本住居跡の時期ではなく弥生時代の所産である可能性が強い。



第52図　土壙実測図

土　壙（第52図）

楕円形のプランを呈する。長軸3.51m，短軸3.25mである。深さは，約60cm。底部は約1.4cmほどの平坦部をもち，やはり楕円形を呈する。ローム まじり褐色土が混入していた。遺物はなく時期も不明である。

（高根信和）

Ⅳ. 考　　察

1　一騎山古墳群の提起する諸問題

(1)　4号墳埋葬施設

4号墳の埋葬施設の特徴は，①位置が，くびれ部の旧表土下にあること。②粘土槨で内法約4mであること。③副葬品が貧弱であること。④追葬が認められないことの4点を上げることができる。

4号墳としては，横穴式石室を含む群集墳の一基であること。朝顔形埴輪を含む円筒埴輪列及び形象埴輪の存在。周溝の存在（前方部先端においては確認できなかった）等を上げることができる。

以上から，4号墳は古墳時代後期の群集墳が展開される時期の築造であることは明白であるが，その性格及び年代を考える上で，埋葬施設の第1の特徴に注目したい。それは，東関東中央部を中心として分布する箱式石棺を埋葬施設とする「変則的古墳」と同じ現象を示しているからであり，それについて編年が試みられているので参照したい。

茂木氏は箱式石棺を三期[1]に区分し，II期以降が変則性を有する古墳になることを述べている。さらに杉山氏は，茂木氏の編年の6条件のうち第一条件「箱式石棺の構築位置について」を進展させて「変則的古墳」の分類[2]を試みた。そこで杉山氏は，「内部施設の墳丘に対する位置が封土中から封土下へ移行している」点を前提として分類し，「上述の分類に示された各形式は，横穴式石室を除く内部施設の種類に関係なく個々の古墳に適用できる。」としている。

杉山氏の分類に従えば，4号墳は「変則的古墳」の第二段階にあたるB－I…イ形式である。すなわち，＜B＞内部施設が封土下（旧表土下）にまで構築されたもの（封土下類）－＜I式＞内部施設が主軸上に位置するもの（主軸上式）－＜イ型＞内部施設の長軸方向が墳丘の中心を向くもの（求心型）であり，この中には堂目木1号墳[3]等が含まれている。従って4号墳の築造年代は，堂目木1号墳とほぼ同時期とすることができるであろう。

ただ，杉山氏は上記論文の中で分類した古墳に実年代を与えてはいないが，茂木氏の編年論と矛盾するところがないので堂目木1号墳のグループを6C末頃と考えてもよいであろう。

しかし，堂目木1号墳の時期と4号墳との間には大きな差違がみられる。第一は，堂目木1号墳の時期は埴輪の存在がほとんど認められていない。第二は，堂目木1号墳は単独葬であるが，箱式石棺を埋葬施設とする「変則的古墳」は，追葬（合葬）との関係をぬきにしては語れないにもかかわらず，4号墳の埴輪は盛行しているのであり，単独葬である粘土槨なのである。この相違する現象はいかに理解されるべきであろうか。それには一騎山古墳群自体を考えてみたい。

一騎山古墳群は，今回調査の対象となった4基以外に数基存在しているが，内容が不正確なのでここでは一応除きたい。1[4]，2，3号墳は，追葬を前提とする横穴式石室の採用，副葬品の内容，埴輪がないことから考えて4号墳より後出であろう。4号墳は前方後円墳であること，単独葬の内法約4mの粘土槨であること，埴輪列を有することから考えて，一騎山古墳群の中で盟主的存在であると考えられる。従って4号墳の被葬者を頂点とした「人間集団」の中の支配者としての性格をうかがうことができる。と同時に，4号墳が「変則的古墳」の要素を持ち，前方部盛土があまりないこと，周溝がクビレ部から前方部にかけて浅くなりその先端においては確認できなかったこと等からして，権威の象徴としての古墳の性格の変質は十分に認められるのである。

以上から，箱式石棺を内部施設とする「変則的古墳」と4号墳にみられる差違は，「地域性」との関係において把握されねばならないと考える。

（荻沼勇市）

註

(1) 茂木雅博「箱式石棺の編年に関する一試論 ― 霞ヶ浦沿岸を中心として ―」上代文化 第36輯 昭和41年

(2) 「所謂『変則的古墳』の分類について」 茨城考古学 第2号 昭和44年

(3) 茂木雅博「常日木1号墳調査報告」 茨城考古学 第1号 昭和43年

(4) 1号墳は周溝の確認のみなので詳細は不明である。

(2) 4号墳出土埴輪

今回発掘した古墳のなかで埴輪が出土しているのは4号墳のみである。一騎山古墳群は，計10基以上の古墳から形成されていたとおもわれるが，すでに破壊消滅した5基から埴輪が出土したということは聞いていない。現在も高校敷地南側の道路をへだてた畑の中には3基のマウンドがかすかにわかるが，そこを注意して観察してみても，埴輪片は散布していなかった。したがって，一騎山古墳群中埴輪を使用したのは4号墳だけであったといってもよいかとおもう。他の調査古墳で埴輪が出土していれば，それぞれを比較検討できたのであるが，ここでは，いくつかの気付いた点を指摘しておくにとどめたい。

まず，周辺地域における出土例を概観してみよう。大宮町での出土例は，これまでに東京国立博物館所蔵の1例[1]があったのみである。大宮町以北の久慈川流域においては出土例を知らない。本例に一番近接するところでは，瓜連町大塚所在の大塚古墳[2]の例が報じられているが，その内容はまったく不明である。金砂郷村では，星神社古墳，諏訪神社1号墳，同2号墳，大方古墳群があげられる[3]。星神社，諏訪山1・2号墳は，久慈川本流と同支流の浅川，山田川によっ

て形成される中洲状の独立丘陵上に占地している。大方古墳群は，阿武隈山系から南下する丘陵の突端に占地する5基の円墳から形成されている。この丘陵も山田川と浅川とにはさまれている。常陸太田市では，幅10号墳[4]が埴輪を伴う古墳としてあげられる。この古墳では，円筒埴輪，人物・動物埴輪が出土している。久慈川の下流域では，右岸の東海村で舟塚古墳群[5]，二軒茶屋古墳群[6]，石神外宿古墳群[7]が埴輪を出土している。

以上は，久慈川流域に占地する古墳例であるが，4号墳は，これらの最上流域にあたる。これは，本例の特徴のひとつとしてあげておきたい。

円筒埴輪　本例の円筒埴輪についての詳細は，報告にのべておいたが，それらはどのような位置づけがなされるであろうか。本例の基本的形態は，3条の凸帯数を有しているということである。轟俊二郎氏によれば，凸帯数3条の円筒埴輪は関東地方でも普遍的な存在であるという[8]。透孔の数や位置などもこれといった特異性はみられない。ただ口縁部の開き具合は，よく発達した形状を呈している。これは，他の北常陸の出土例と具体的に比較したわけではないので，決定的なことはいえないのであるが，円筒埴輪の製作としては技術的な頂点に達しているとおもわれるのである。以下，その理由をのべておきたい。本例の凸帯は断面台形で，側面がややくぼんでいる傾向がある。上端と下端の稜線は明瞭であり，とくに上端稜を強調しているのがわかる。しかし，全部がそうではなく，部分的には簡略化・粗雑化が目立っている。これは，上端稜を強調するあまり，下端の横ナデ整形が不徹底に終ってしまったことに起因しているのかもしれない。整形は，外面の横ハケが特徴としてあげられる。横ハケは，口縁下位，口縁部中間，第3凸帯上位，第2凸帯上位に施している例が多い。内面の整形は，口縁近くに横ハケが施され，これ以下はすべて「指ケズリ」[9]である。透孔は，穿孔した後に整形を施していない。器高50㎝前後，口径24～29㎝，底径15.5～18㎝の形態を有する。形状としては2種類の円筒があるとおもわれる。50㎝前後という器高は，3条凸帯の円筒埴輪として大きい部類に入るのではないかとおもわれる。全体的には堅牢な作りという印象をもつ。

こうした特徴を下総の円筒埴輪にあてはめてみると，轟氏のいう下総型円筒埴輪[10]の前段階に相応しているとおもえる。もちろん，下総と北常陸とでは円筒埴輪が同一の変遷過程をたどっているとはおもっていないが，この比較はあながち無意味ではなかろう。それは，北常陸において円筒埴輪の変遷過程が示されていない以上，今後の研究課題として本例にひとつの仮説的指標を与えておく必要があると考えるからである。さて，本例は轟氏が下総型円筒埴輪の前段階として位置づけた我孫子市久寺家古墳の出土例[11]に近似している。実見していないので氏の研究から引用するが，氏はこの埴輪例を下総の工人達が技術的頂点に達したとして以下の点をあげている。「大きさと堅牢さは我孫子一帯の円筒埴輪の中では際立った存在で」，器高は50㎝にも及び，底径と口径の比率の開きが大きくなる。内面の整形は，口縁部近くしかハケ目を施していない。形態的には，3条の凸帯と2対の透孔をもっている。凸帯は，側面がややくぼみ，上端と下端の稜が明瞭であるが，ややくずれかけている傾向にある。このような諸点は，

本例と近似しているが，口径と底径は本例の方がやや大きい。しかし，本例の№7の例はこの埴輪の例に口縁の開き具合，口径，凸帯間隔ともよく似ているといえる。№7は，本例では一番細身だからであろうか。このような理由から本例の円筒埴輪が技術的には頂点に達しているとしたい。安易な「似ている論」でかたづけるつもりはないが，北常陸における円筒埴輪の変遷過程をあきらかにしていく作業を展開するためのひとつの踏み台として本例を位置づけておきたい。

つぎに，報告で前述した底部の植物繊維状圧痕であるが，これと同じとおもわれる圧痕が長野県妙前大塚古墳[12]で報告されている。報告者は，イネかヨシのような禾本科の植物を想定し，「それらを敷きつめた上に製作した粘土の円筒を置いたものらしい」とされている。本例の圧痕をにわかに禾本科植物とは断定できないが，製作時か，あるいは乾燥の際に，底部下にそれらを敷いていたことは十分推定できよう。

朝顔形埴輪については，周辺地域に類例がなくまったく比較できないのであるが，花状部にも凸帯をめぐらしている例として，水戸市赤塚西団地Ｄ３号墳出土例[13]をあげることができる。

形象埴輪　本例の形象埴輪は，人物埴輪と動物埴輪とに分類できる。器財埴輪はまったく検出されていない。人物埴輪は，原形に復原できたものがないのでまとまったことを報告できなかったが，頭部５個体の観察では，衝角付冑をかぶって武装している武人埴輪が２個，天冠をかぶっているらしい男子像埴輪１個，ヘアバンド状の帯を頭につけている男子像埴輪１個，女子像埴輪１個が確認できた。衝角付冑をかぶっている武人埴輪の例は，大宮町下村田坪井出土例[14]があり，常陸太田市幡古墳群[15]では頭部だけが出土している。本例とよく似た冠帽をかぶっている埴輪として，東海村石神小学校所蔵[16]の例があげられる。しかし，本例のは威儀の具としての天冠といえるかどうかわからない。広義の冠帽にはちがいないだろうが，そのどちらに含めるかは決定を留保しておく。しかし，このような冠帽が実際に使用されていたなら，３本の金属帯は当然布で裏張りされていたはずである。それは，本例の頭の形状でわかる。また，冠帽にある程度の自由をもたせて大きさを調整できるように，後頭部側の帯が接していない点も納得できよう。

本地域は，市毛勲氏の顔面赤彩色人物埴輪の分類[17]では常総Ⅰ型の分布地域に含まれているが，本例の人物埴輪の顔面にはなんらの彩色も施されていなかった。

動物埴輪としては鹿の例が唯一の出土であった。常陸で鹿形埴輪が出土している例として三昧塚古墳例[18]があげられる。この例では角の表現はない。胴部以下の作りもまったく不明である。また柿岡考古館所蔵の２例[19]もあるが実見していないため詳細はわからない。周辺地域の例としては，東海村石神小学校所蔵の２例[20]，那珂湊市三ツ塚古墳群出土例[21]がある。また，確実ではないが鹿とおもわれる破片が水戸市赤塚西団地Ｄ３号墳[22]で検出されている。本例の作りは特異というべきであろう。このような作りの埴輪は管見にふれたことがないので結論は留保しておき

たい。

小結　本例の円筒埴輪に太身と細身の２種があるのではないかということは何度も前述した。それを曖昧な表現でのべてきたのは，意識してそれらを製作しているのか確信できなかったからである。それらの２種を樹立したときの効果を考えて製作しているというのならそれ以上に追究することは困難である。しかし，これを個々の埴輪製作工人の技術差，あるいはクセとして理解してはどうだろうか。工人達が埴輪作りを要求されたとき，工人達の間には，凸帯数，透孔の位置などの基本的形態についての原則的な意思統一があったかもしれないが，太さなどは個々の工人にほとんどまかされていたのではないか。それゆえ，ある工人は太身のものを，ある工人が細身のものを作りだすという一見不統一な結果が生じてくるのだとおもう。

さて，本例の場合，円筒埴輪を作った工人が人物埴輪をも製作しているということはいえるかとおもう。それは，ヘアバンド状帯をつけた男子像埴輪頭部のハケ目が円筒埴輪と同じハケによって施されている可能性が強いからである。それ以外に両者を結びつける材料はなにもないのである。

関東地方で形象埴輪群などのいわゆる行列埴輪が出現するのは６世紀初頭ないし前半と考えられている[23]。常陸で三昧塚古墳[24]をその最古の例とするなら，本墳の年代は三昧塚古墳より後出しているとしなければならないだろう。三昧塚古墳出土の埴輪の作りは全体的に稚拙で粗雑である。人物埴輪は，器高60cm前後の半身像だったらしく，非常に小型の作りである。この点だけをみると本例が三昧塚古墳出土例より発達しているということがいえるであろう。ただ，霞ヶ浦沿岸と北常陸とでは同一の形態変化をたどって埴輪が変遷しているとはいいがたいのである。

（小室　勉）

註

(1) 茨城県史編さん原始古代部会編『茨城県史料―考古資料編　古墳時代』　茨城県　昭和49年

(2) 『茨城県遺跡地名表』茨城県教育委員会　昭和45年

(3) 註２と同じ。『茨城県古墳総覧』茨城県教育庁社会教育課　昭和34年

(4) 大森信英「常陸太田市幡町幡古墳群調査概要」史考　第19号　茨城県立太田第一高等学校史学会編　昭和42年

(5) 大森信英『常陸国村松村の古代遺跡』村松村教育委員会　昭和30年

(6) 註２と同じ。

(7) 註２と同じ。

(8) 轟俊二郎「凸帯数よりみた関東地方の円筒埴輪」埴輪研究　第１冊　昭和48年

(9) 呼称は，吉田恵二「埴輪生産の復原 ―技法と工人―」考古学研究　第19巻第３号　昭和48年　による。

(10) 轟俊二郎「下総型円筒埴輪論」埴輪研究　第1冊　昭和48年

(11) 註10と同じ。

(12) 大沢和夫・佐藤甚信『妙前大塚（3号）古墳』長野県飯田市教育委員会　昭和42年

(13) 伊東重敏『水戸市河和田町赤塚西団地造成用地内埋蔵文化財包蔵地昭和45年度調査略報』水戸市教育委員会　昭和45年

(14) 註1文献図版114

(15) 註1文献第28図

(16) 註1文献図版133下段右

(17) 市毛勲『赤い埴輪（茨城編）―人物埴輪顔面の赤彩色についてII―』茨城考古学第1号　和年43年

(18) 斎藤忠・大塚初重・川上博義『三昧塚古墳』茨城県教育委員会　昭和35年

(19) 『茨城の文化財』第9集　茨城県教育委員会
註1文献図版130

(20) 註1文献図版10

(22) 註13と同じ。

(23) 甘粕健「関東」新版考古学講座5　雄山閣出版　昭和45年

(24) 註18と同じ。

(3) 2号墳特殊遺構

今回調査した古墳のうち2号墳にみられる特殊遺構について若干のべてみたい。

まず，横穴式石室より周溝に至る遺構であるが，これは虎塚古墳[1]で指摘されたような墓道という考え方，これは追葬を前提にしたものであり，追葬のある時期に円墳が変形し，表現はわるいが，逆凹字形のマウンドを量すると想像すると必ずしも円墳は円でないことに気ずく。当地方では，追葬例は本古墳の南方那珂郡瓜連町静所在の新宿古墳[2]によって実証していることである。

周溝内の敷石遺構については，このものに一連の関係があるものと考えられるし，宮中野古墳[3]で指摘された通路という考え方も当然起るであろう。

しかし，周溝より一本の排水溝と思われる遺構の存在は非常に解釈にくるしむ。

仮に排水溝と考えれば，石室前面よりの遺構は排水施設と考え，石敷は，その暗きょ的役割をはたしたのではないだろうかという考えもでてくるが，ここでは結論を出すことはさけたいと思う。次にくる横穴の排水施設にみられるような表面に出さないかくれた施設を有していることからみると，何かここに工夫がなされているようなことを推察する。

いずれにせよ，3号墳には存在せず，本墳のみであり，きわめて特殊な遺構である。

周溝の機能や古墳の形状も充分考えなければならないし，後期古墳の二次・三次的変化も充分考えねばならない。

（高根信和）

註

(1) 大塚初重　「虎塚壁画古墳の調査」（「茨城県史研究」27）昭和48年

(2) 大森信英　「茨城県那珂郡静村大字静新宿古墳調査報告」（「茨城高等学校史学部記要」第1輯）昭和27年

(3) 茨城県教育委員会「宮中野古墳群調査報告」昭和45年

(4) 年代について

調査した古墳についてそれぞれの問題点を残しているのでそれらを明記してまとめをしたい。

1号墳については，測量と周溝確認のみで永久保存された古墳であるが，その法量からも尚残っている古墳群中最大径を測り，石室もその奥壁の石材はりっぱな大形のものであり，当時のものか後世のものか不明であるが，その石材の頂部にタガネ痕が三ケ所ある。

2号墳については，主体部は盗掘により従って遺物の存在も不明瞭であったが，それに反し，特殊遺構の存在は注目すべきものがあり，今後の後期古墳の研究に問題をなげかけている。削平されたとはいえ，そう高い墳丘をもったものではないと考えてよいだろう。

3号墳については，当地方としてもまれな未盗掘な古墳を調査することができた。谷頭附近の狭い地形を利用し，4号墳と周溝と接しながら造られている。副葬品も武器類，装飾類を主体とする古墳である。この古墳の問題点は，天井石の無いことである。後期横穴式石室における天井石の有無については以前より関心があったが，盗掘をうけている古墳の調査では非常に不正確なものであったが，ここにあらためて天井石の問題を指摘したい。横穴式石室の末期的症状は，すでに羨道部は存在してもその役割ははたさず，天井から追葬が行なわれたとすれば，埋土を充満するが，内部を厚葬のため空間をあける。即ち，石ではなく丸太，木板で天井を作るというような方法がとられたのではなかろうか。

4号墳については，古墳中前方後円墳という他の古墳と異にした結果であった。埴輪の存在もさることながら，粘土槨を有する前方部の短い古墳で，当地方においても新発見の古墳であることが判明した。すでに前述のとおり，埴輪及び主体部については一考をのべたが，更に埴輪については，埴輪製作跡との関連や主体部の位置についての古墳の存在も，もう少し追求する問題がでてきており，これらの解明をいそがなければならない。いずれにせよ，4号墳の築造された6世紀前半以降から1.2.3号の築造された7世紀にかけての古墳群の形成は，県北

地方の即ち那珂・久慈川流域の古墳文化の最末端におけるはなやかな文化の最盛期のころではないだろうか。

（高根信和）

2　住居跡群の考察

今回の調査の結果今後の問題を記し，まとめとしたい。

遺跡については，標高約50m，約7ha台地のうち調査面積約6,000㎡であり，遺跡全体の約1／2にすぎない。分布調査の結果，調査地点より西方の現在の集落までのびていることがわかってるが，永年耕作により遺跡の保存度がいちじるしく悪く，今日の調査地点もその例にもれず，7遺構を確認できたのみであった。

台地を探さくすると，縄文土器の散布もみられ，いくつかの時代に生活が営まれていたことがわかる。遺構については，6基の住居跡を調査したが，いずれも国分期（2,3,4,5,6号）のものと思われる（時期不明　1号）。

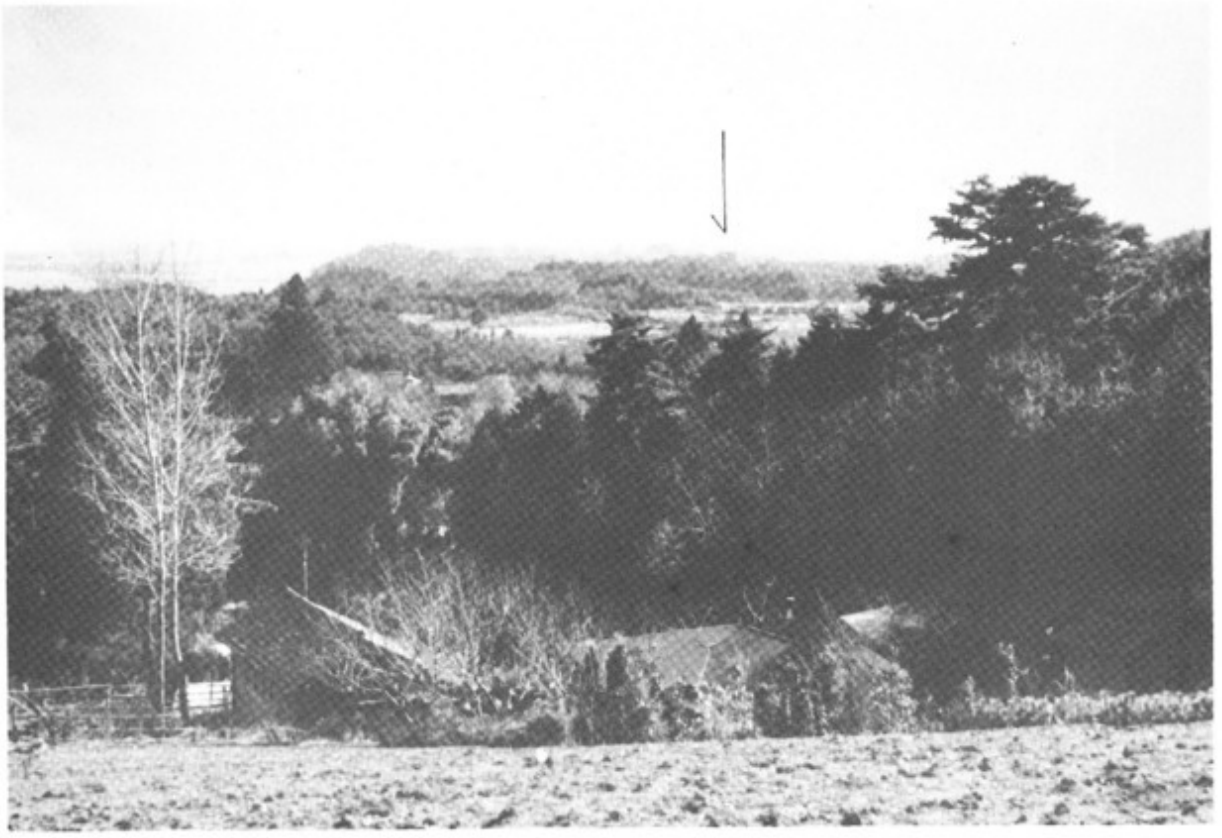
北カマドの位置，規模もほぼ一定し，1号住居跡をのぞいて，柱穴が存在しない。住居跡もある程度間隔をもち築造されている。国分期の特徴を出していると思われる。

遺物については，甕形土器，坏形土器も器形・法量も一定しており，又，4号住居跡より出土の墨書文字「大田？」は何らかのカギをにぎっているようにおもわれる。2号住居跡出土の提瓶も特筆すべき遺物であろう。

以上が今回の一騎山遺跡群の調査の概要であるが，問題点は，これにとどまらない。多くの問題を残しながら，その解決には時間がかかるであろうが，これを機会に県北地方の遺跡，遺物の研究が一日もはやく発展するよう努力することを約束しながら，本調査の事実記載を中心に報告する次第である。

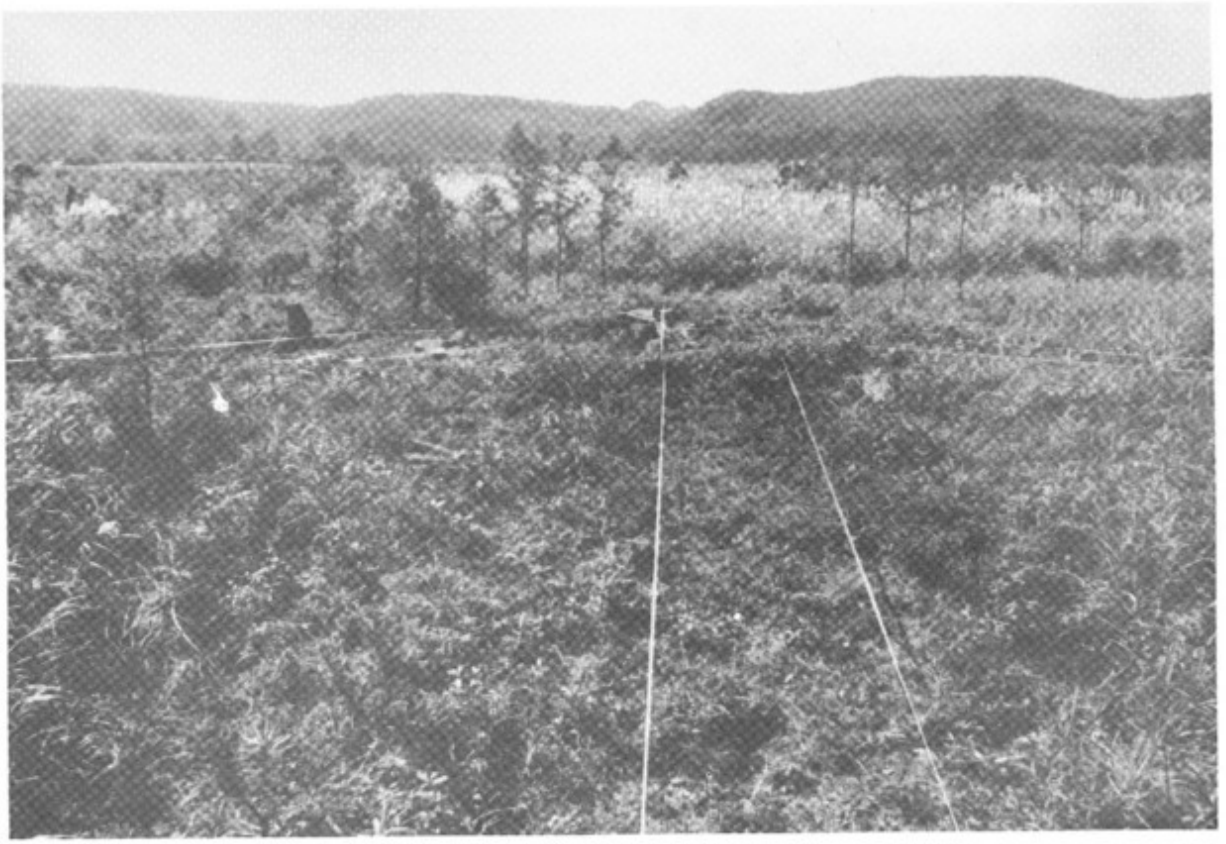
（高根信和）

PLATES



1. 西側の台地から<矢印>

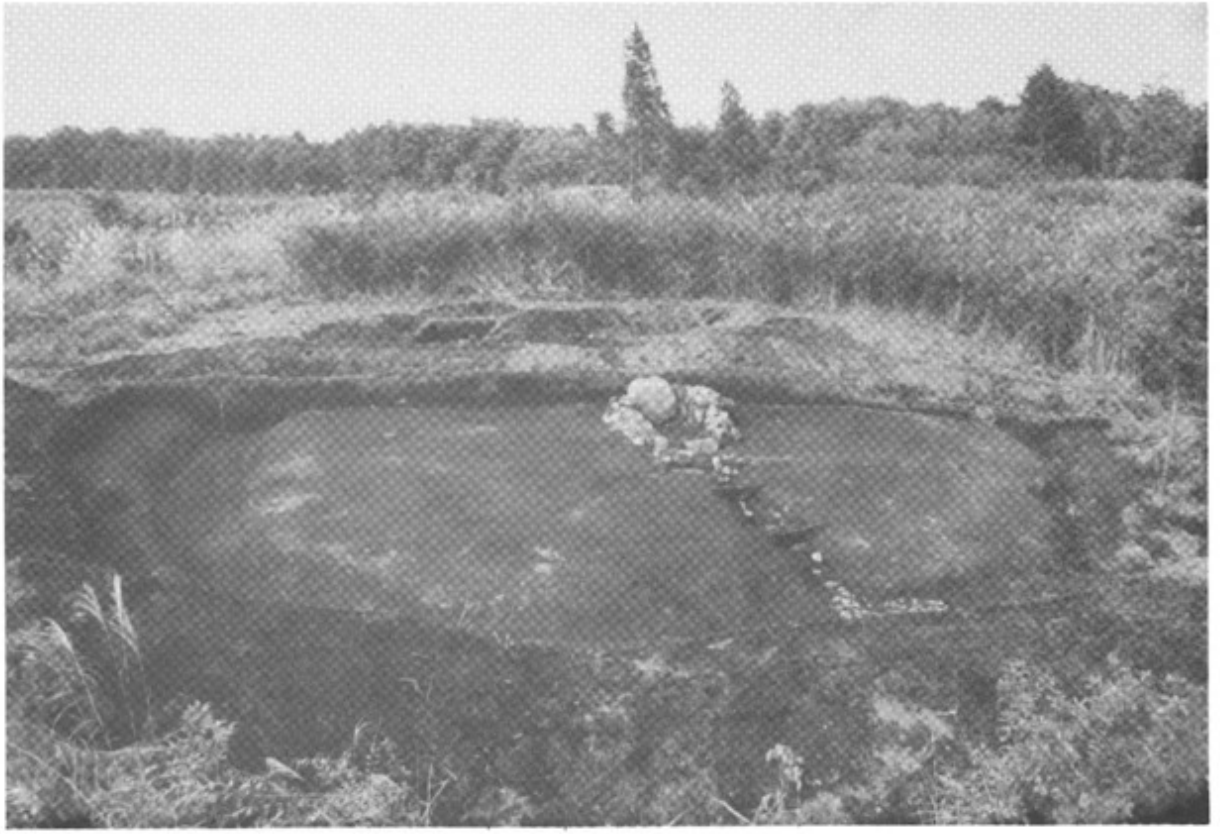
2 東側の玉川から<矢印>



1. 調査前墳丘（東から）

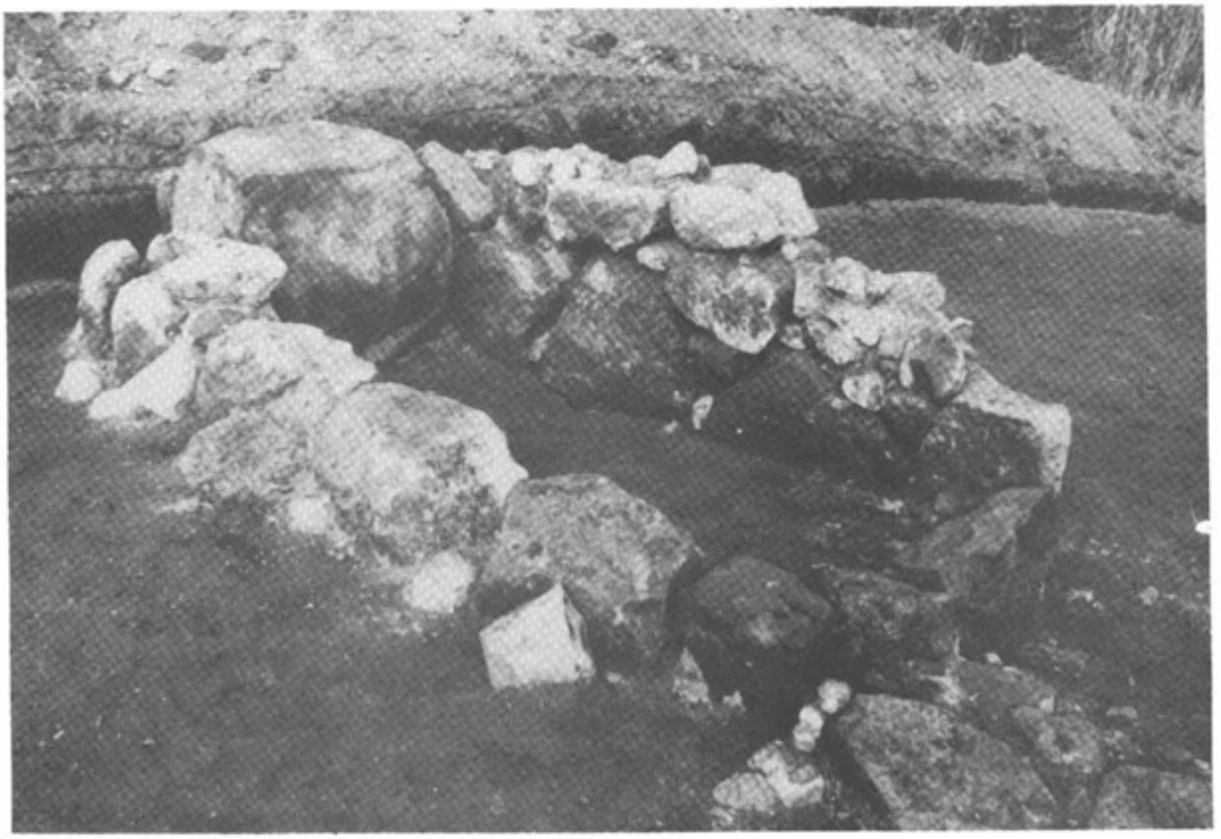
2. 調査後墳丘（南西から）

1. 調査前墳丘（西から）

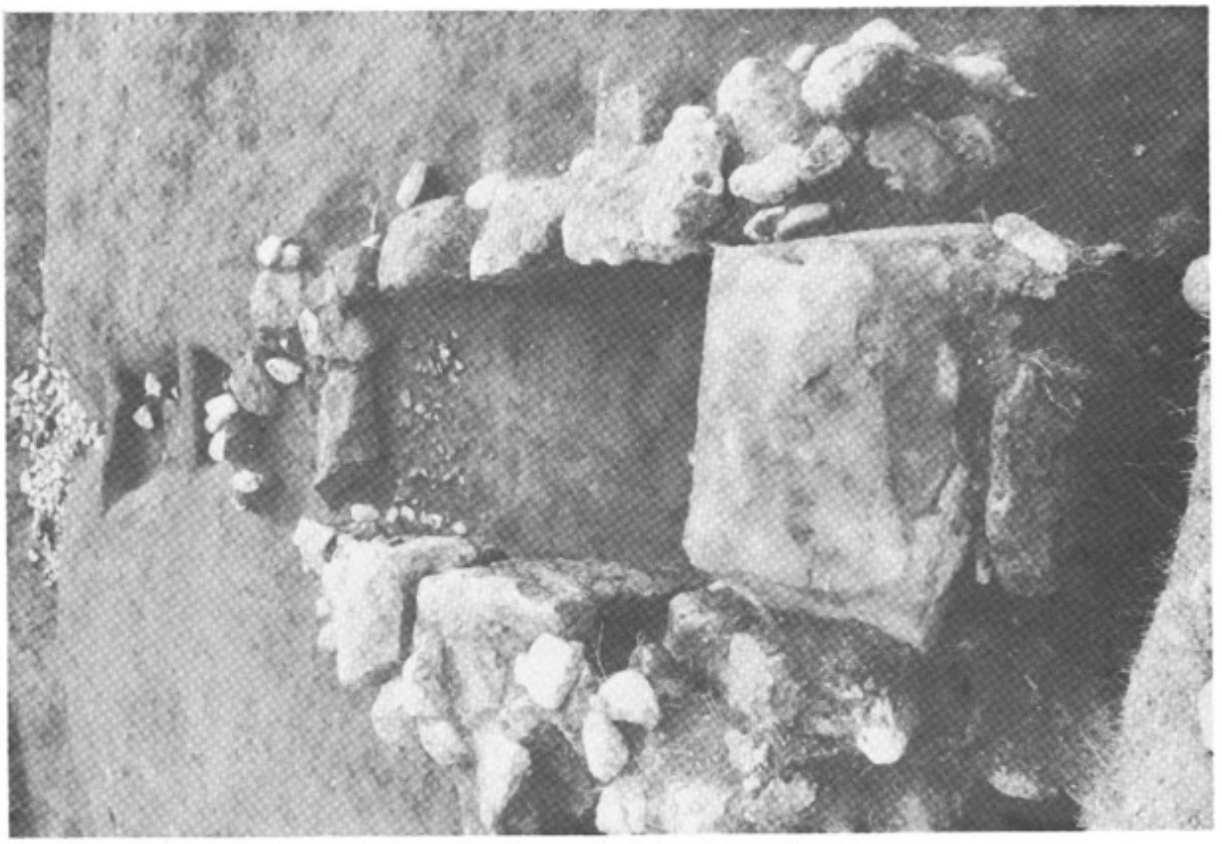


2 調査区全景（南西から）

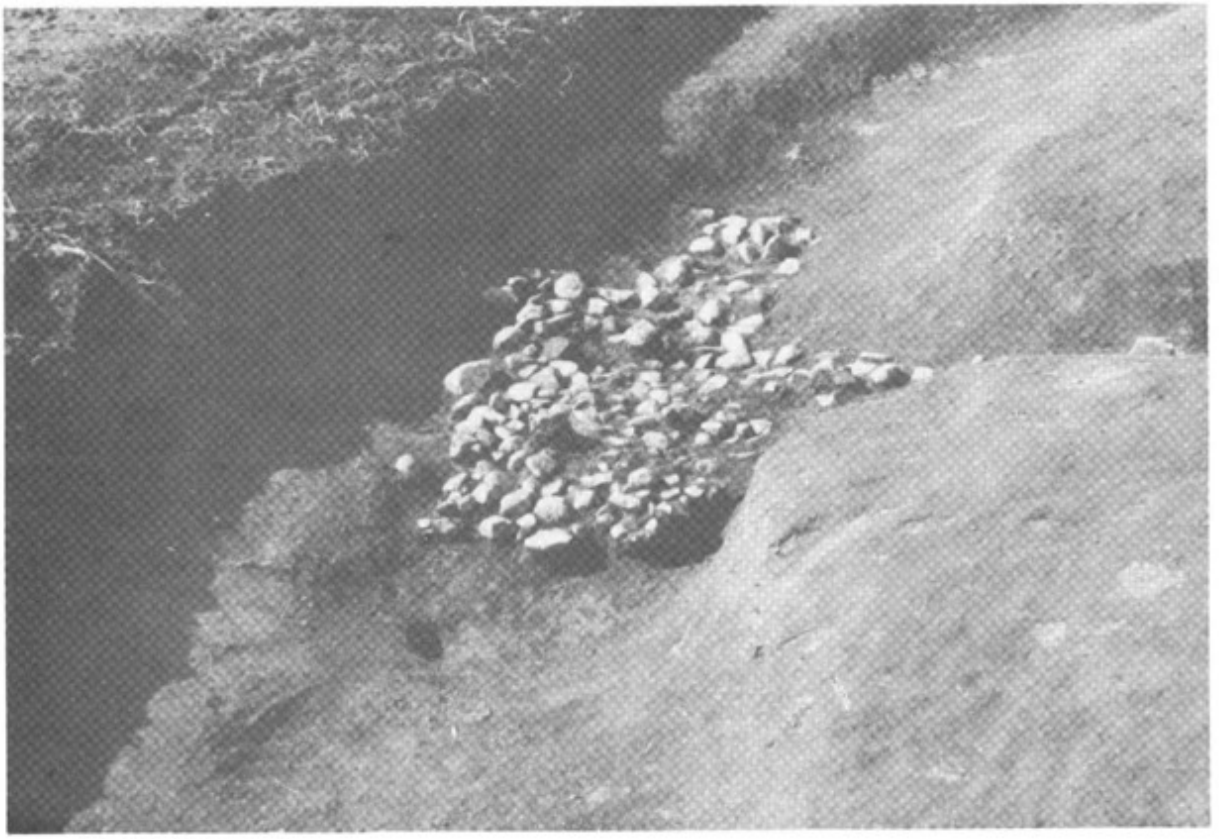
1. 石室（南から）



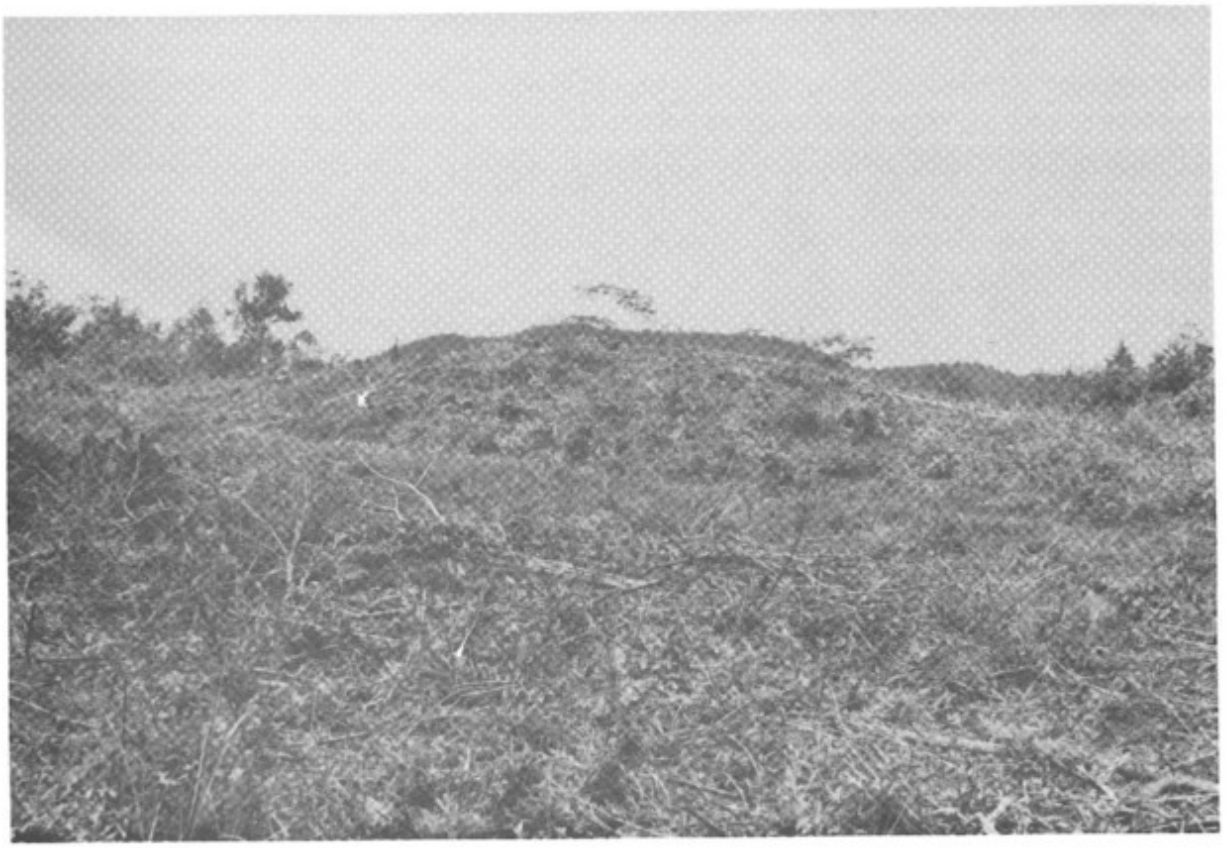
2　同上（南西から）



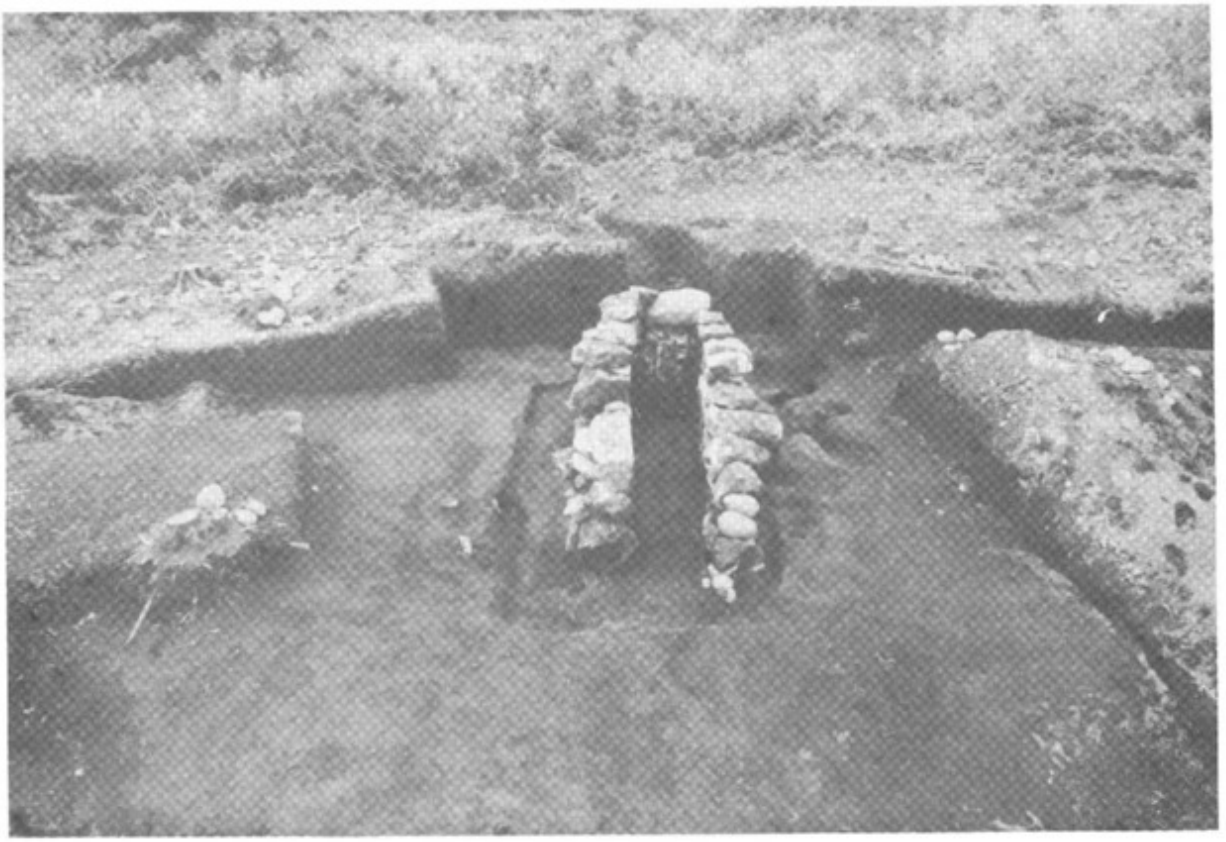
1. 石室及び排水溝（北から）



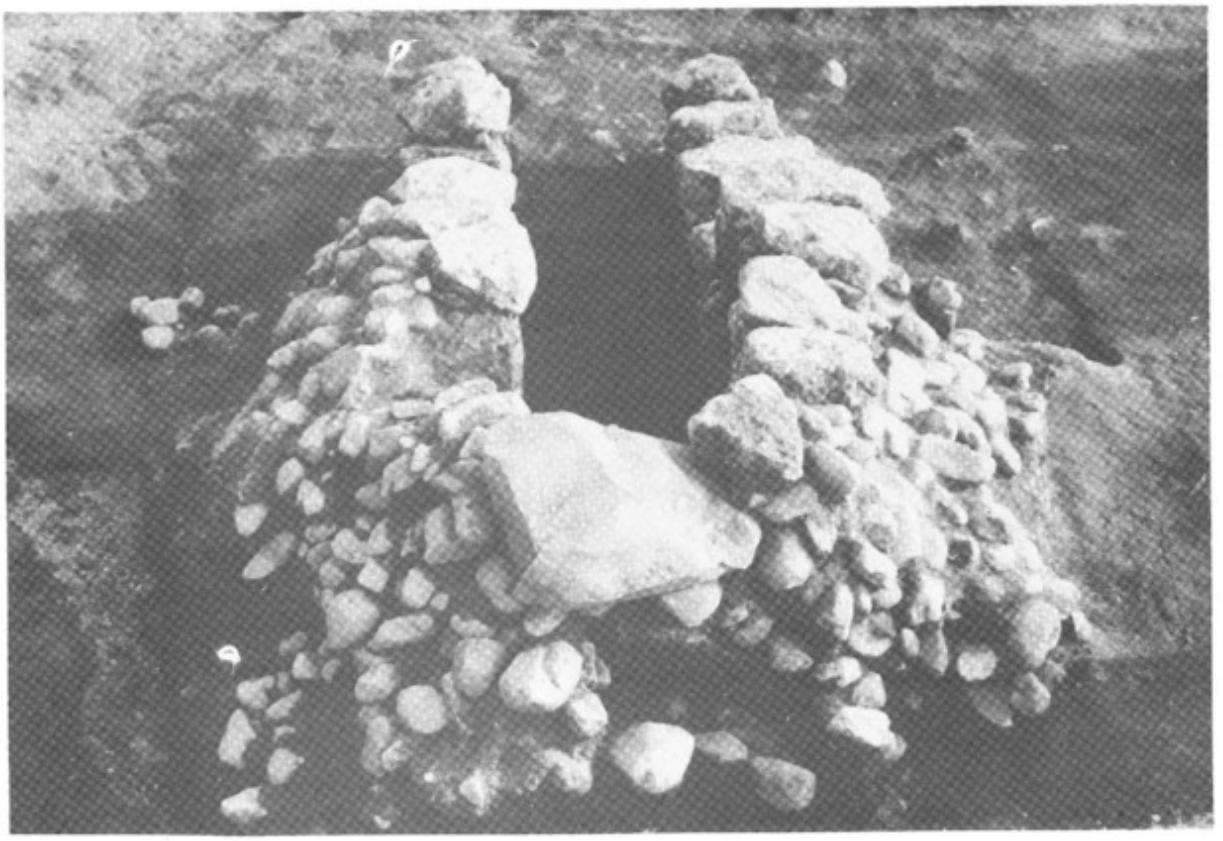
2. 敷石遺構（東から）



1. 調査前墳丘（南東から）

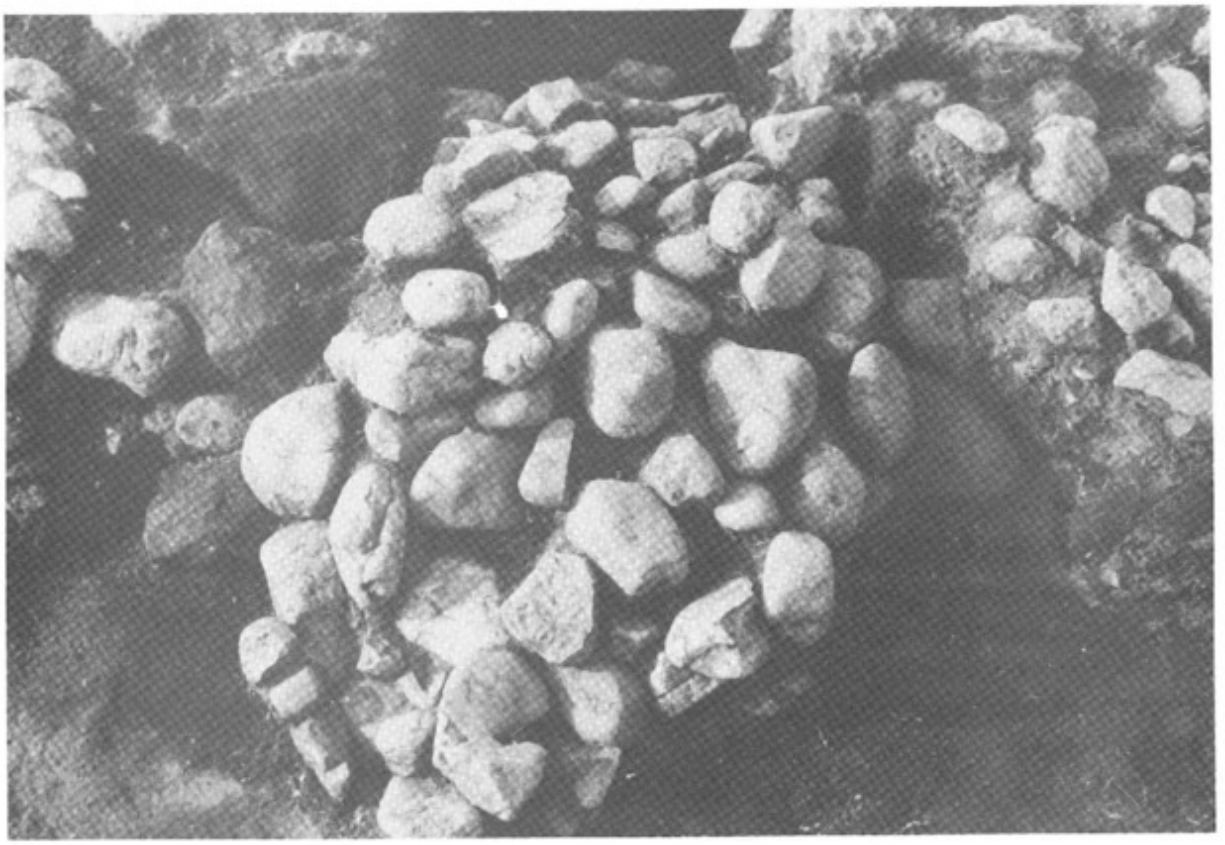


2. 調査区全景（南から）

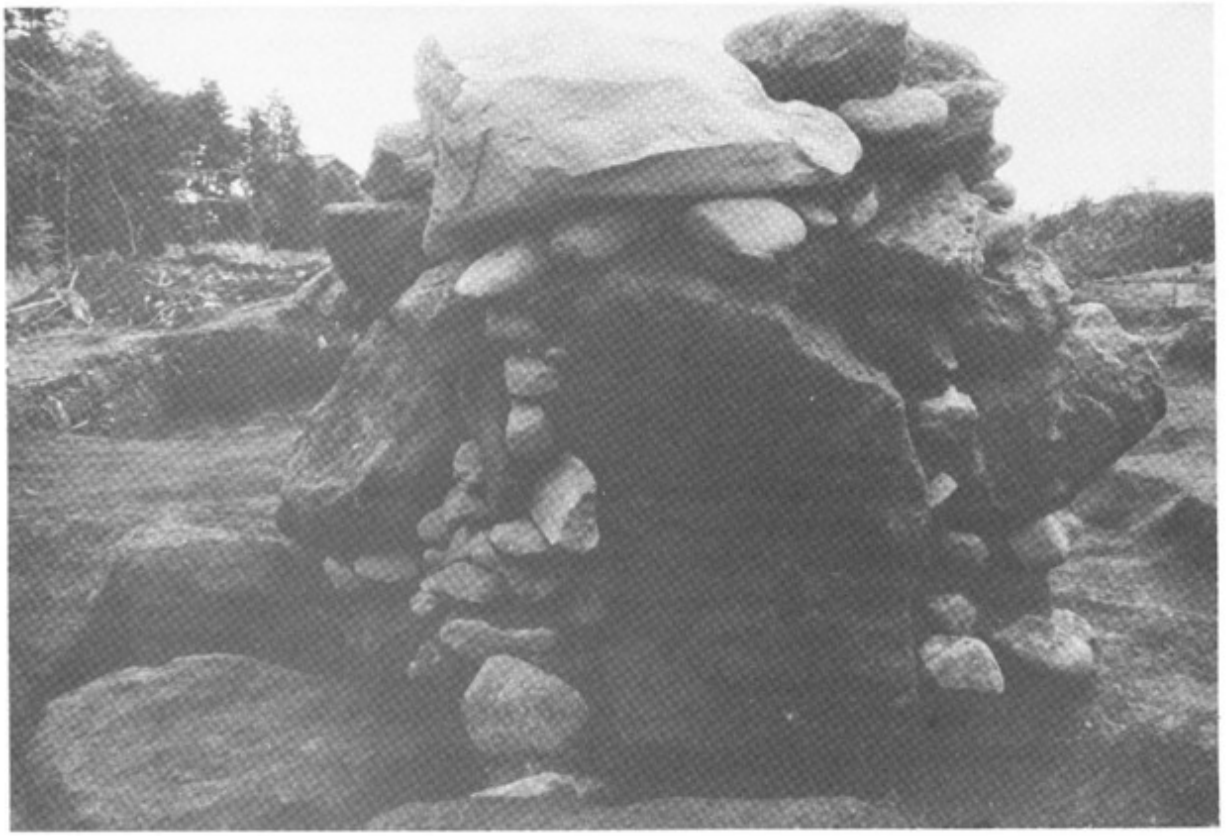


1. 石室（北から）

2. 石室裏込め除去後（北から）



1. 石室閉塞（南から）



2. 石室奥壁裏側（北から）

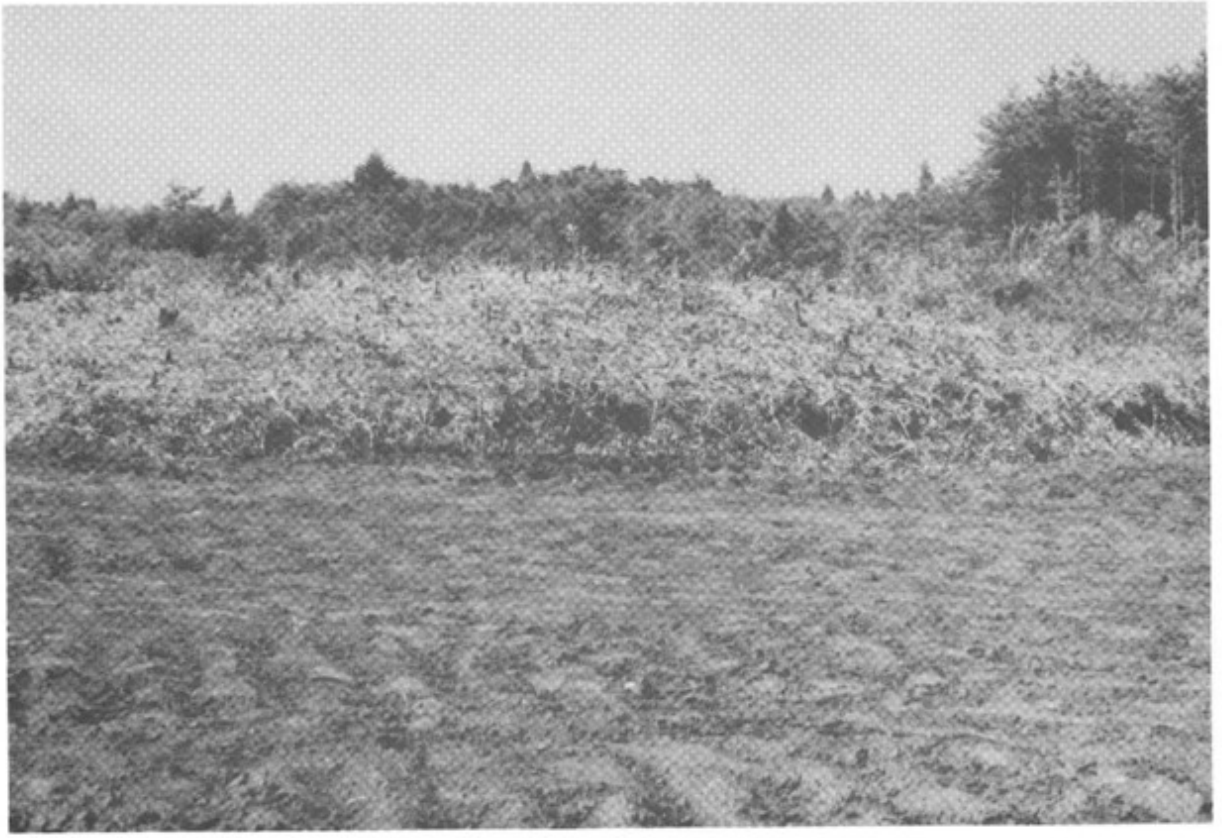
1. 石室西壁

2. 石室東壁

1.　直刀出土状況

2　玉類出土状況

1. 調査前墳丘（西から）



2. 同上（南から）

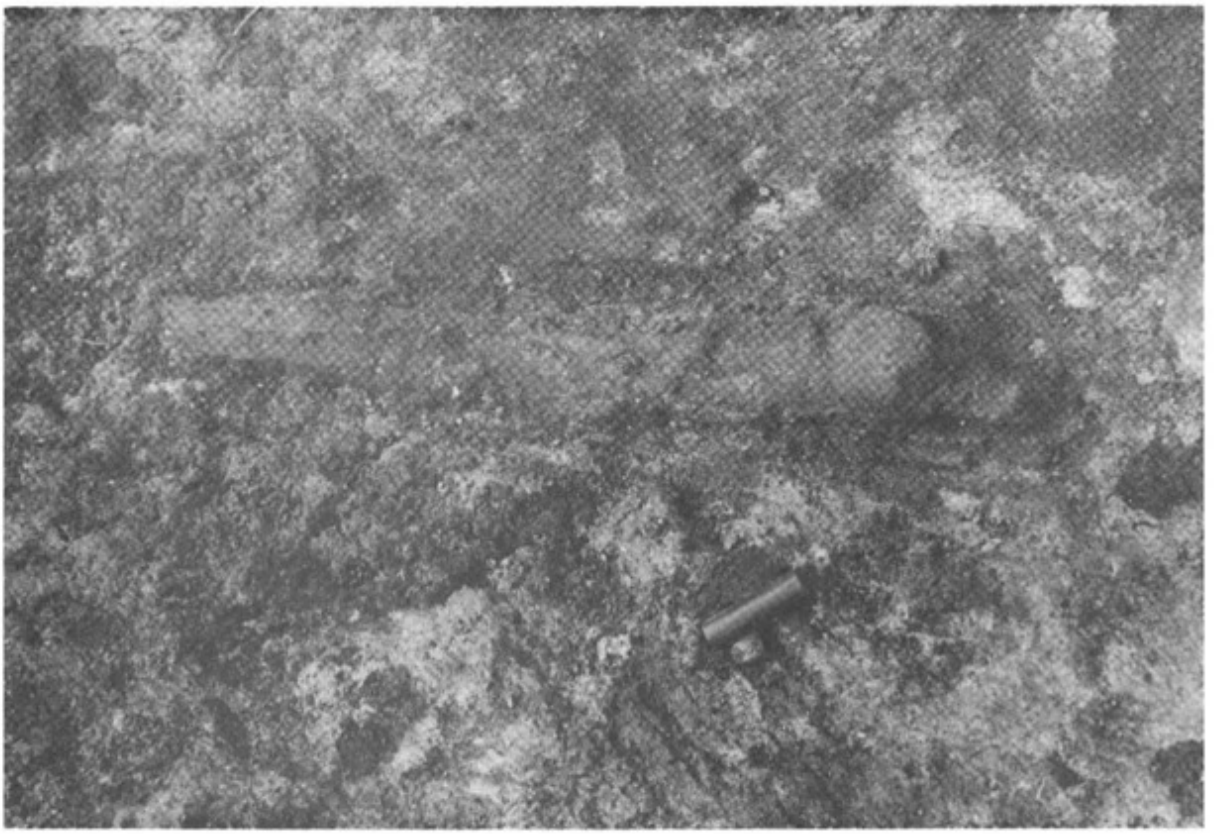
1. 埋葬施設（東から）

2　同上（西から）

1. 埋葬施設内部（西から）

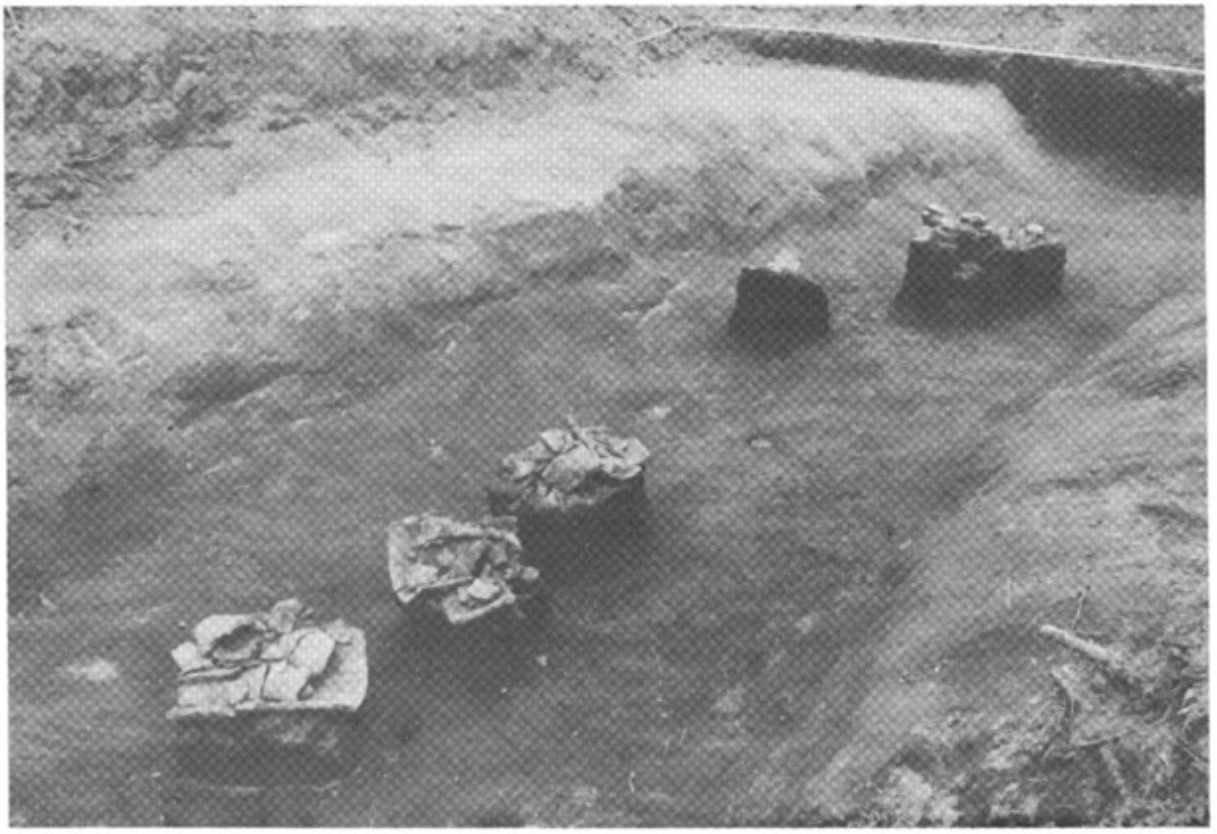
2. 埋葬施設粘土除去後（東から）

1. 副葬品出土状況

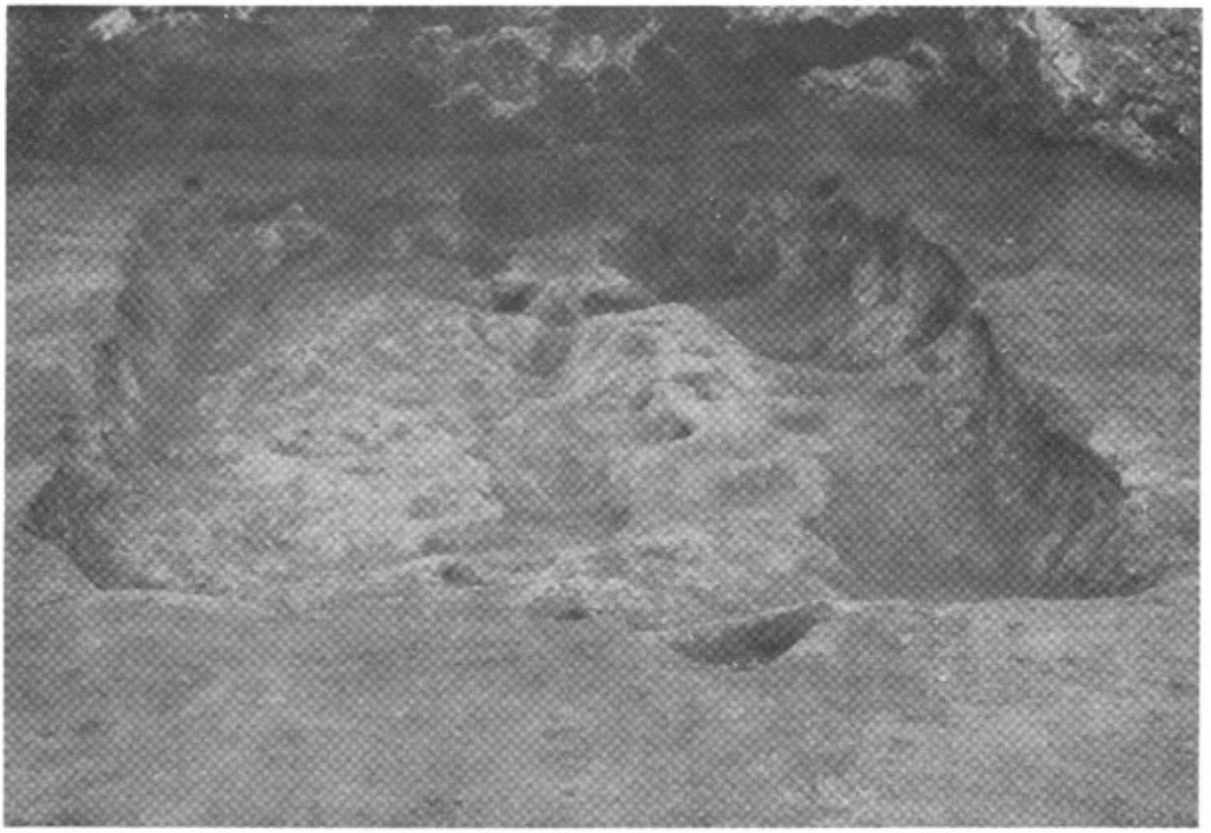


2. 直刀・玉類出土状況

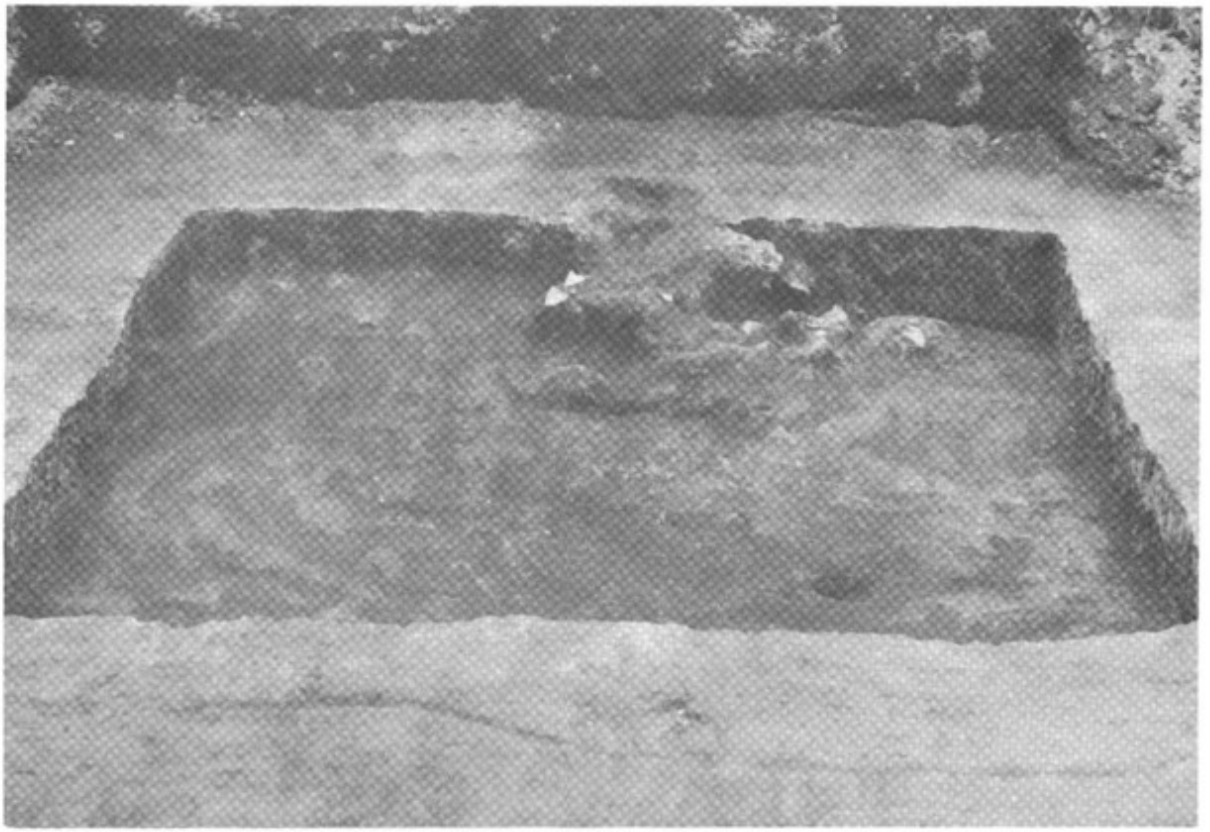
1. 墳輪出土状況（北側クビレ部周溝内）



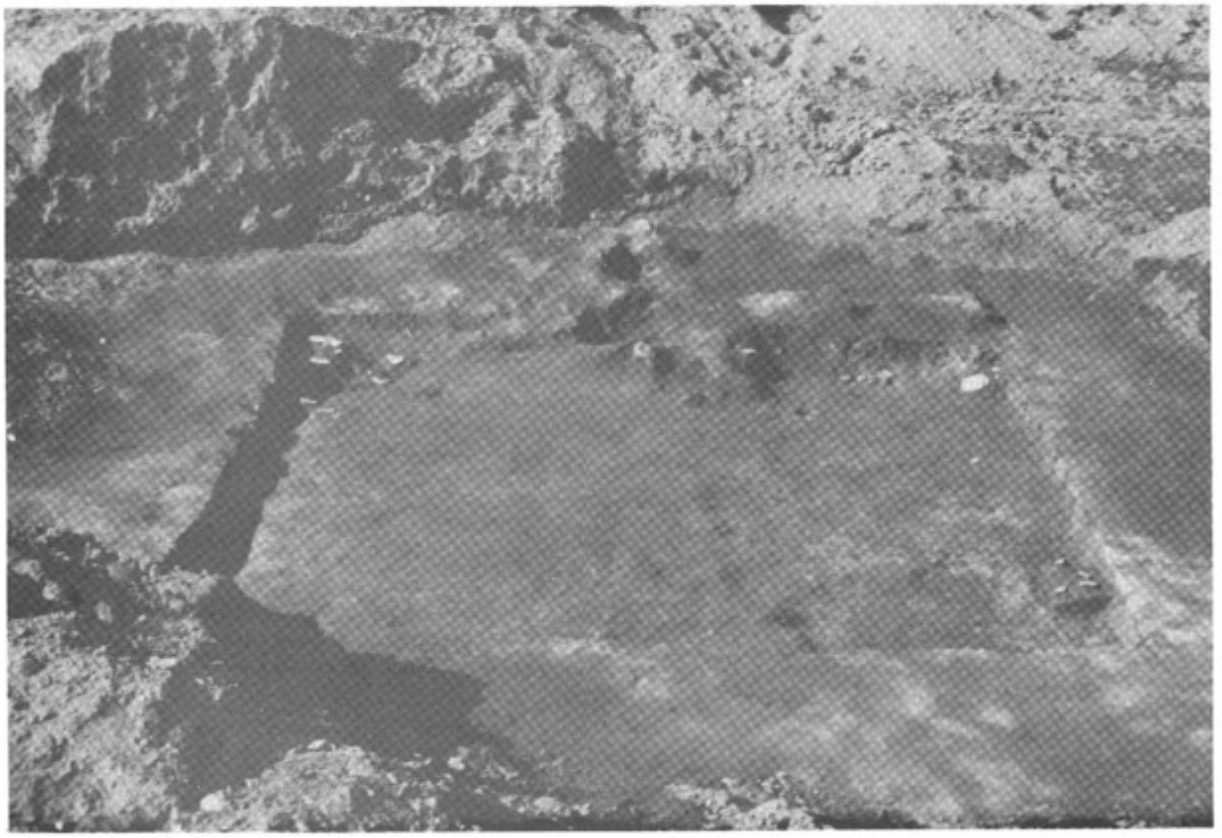
2. 同上（後円部東側周溝内）



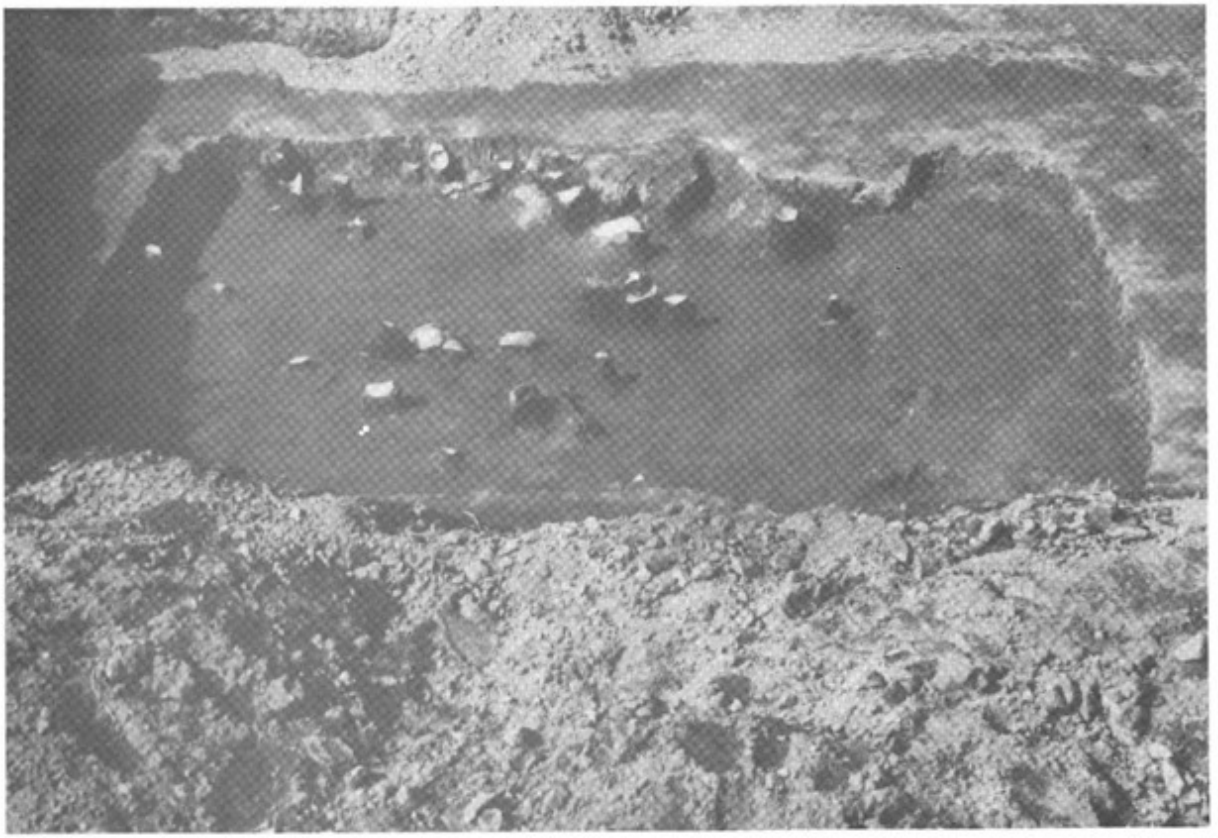
1. 1号住居跡（東から）



2. 2号住居跡（南から）



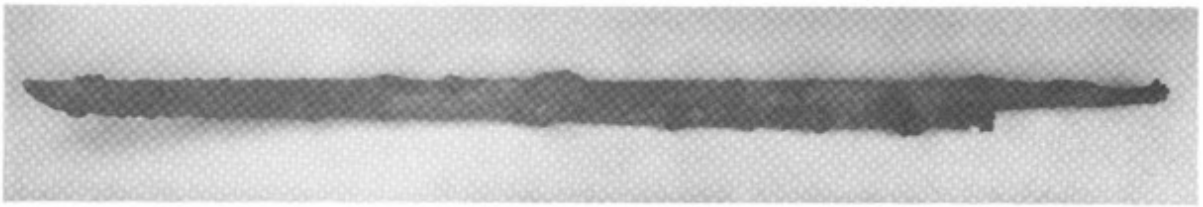
1.　3号住居跡（南から）



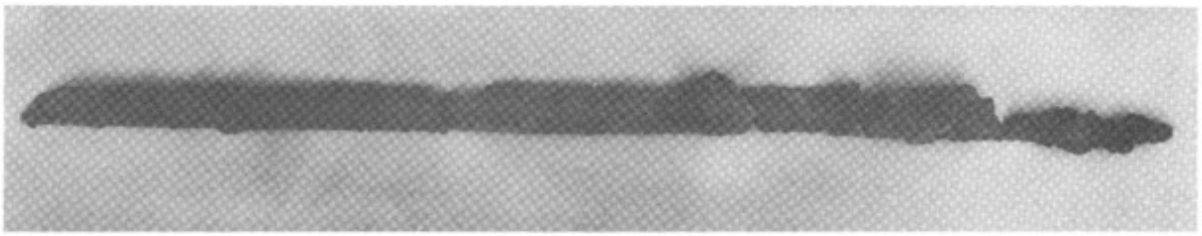
2.　4号住居跡（南から）

1.　5号住居跡（西から）

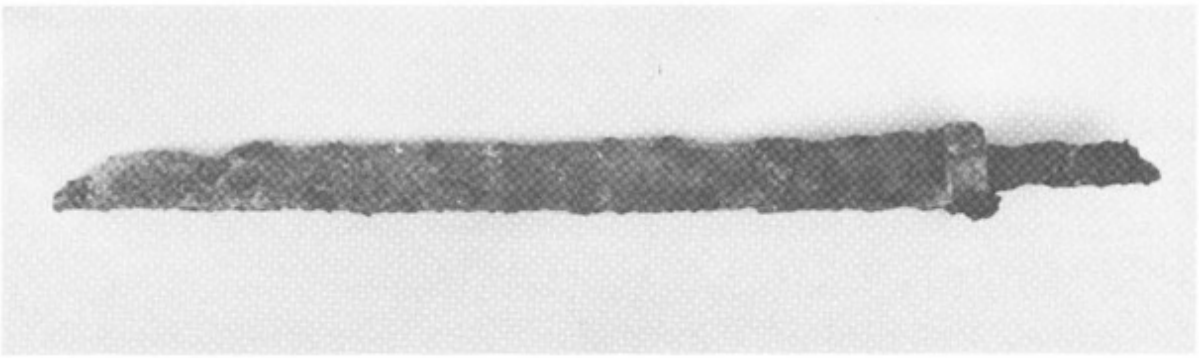
2.　6号住居跡（南から）



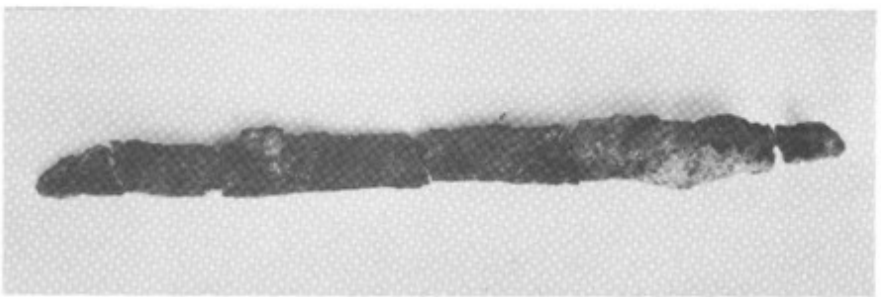
1



2

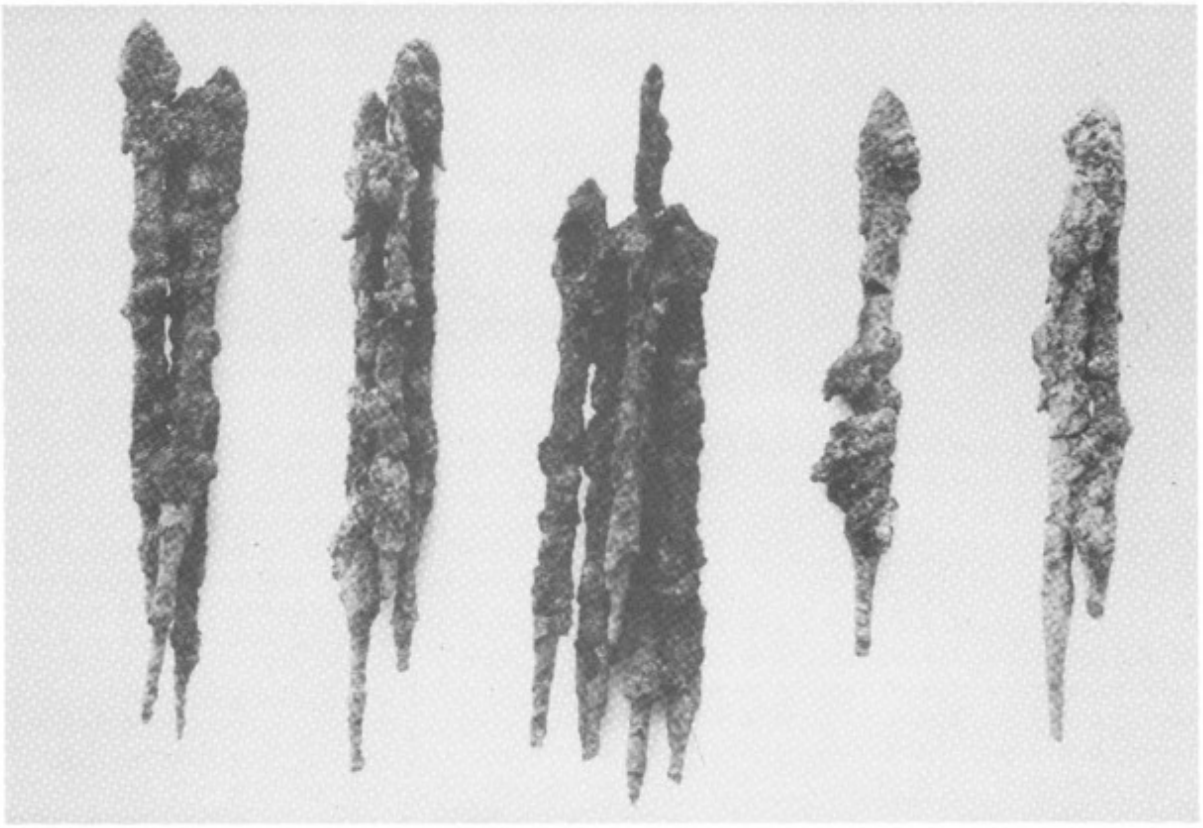


3

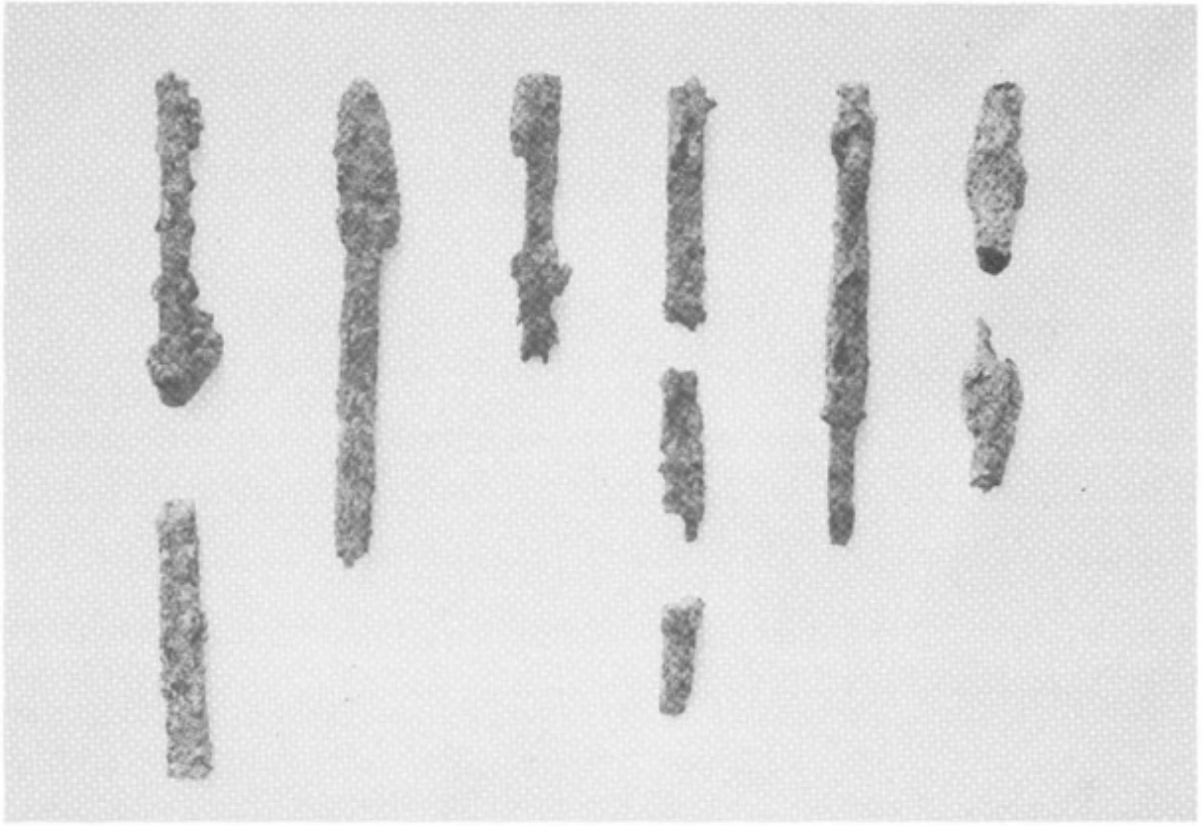


4

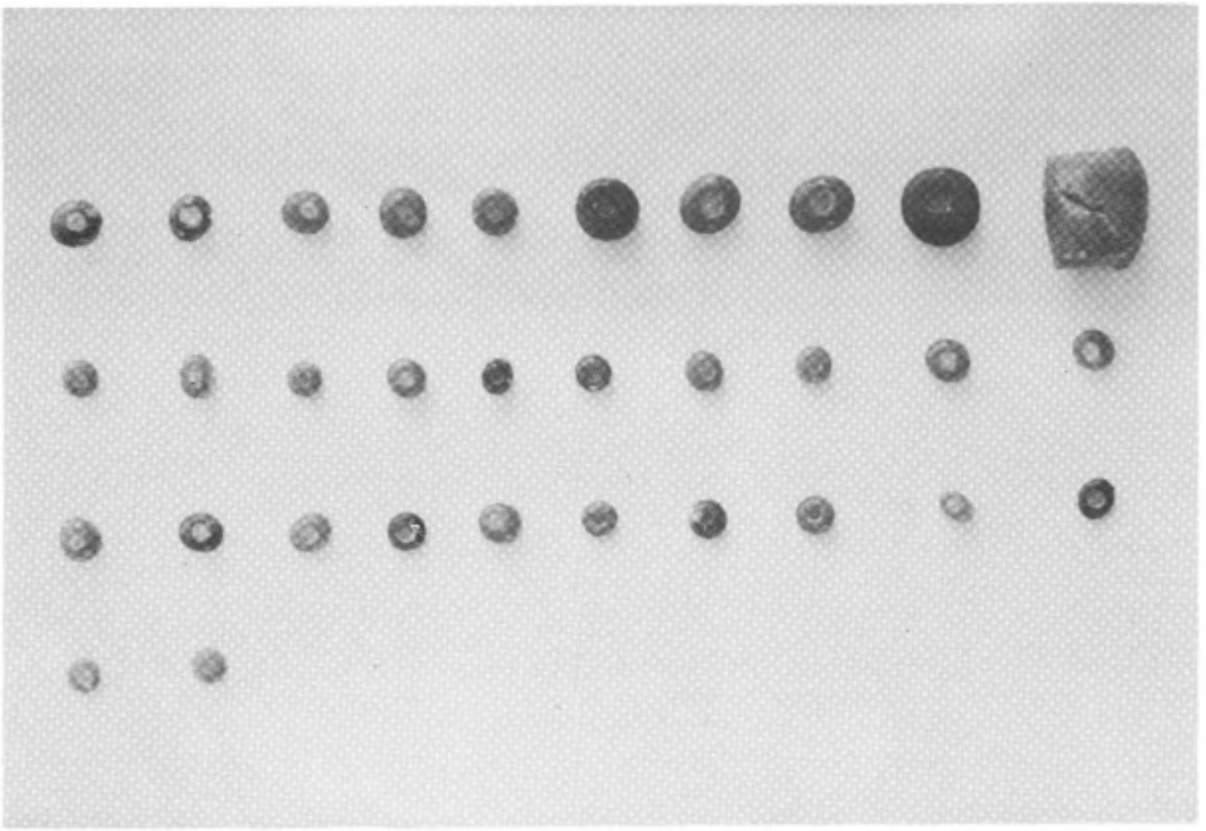
1～3　3号墳出土
4　　4号墳出土



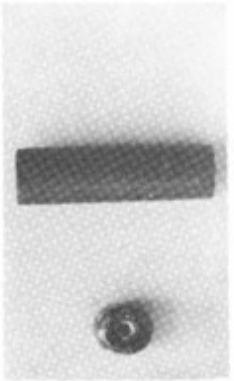
1. 4号墳出土



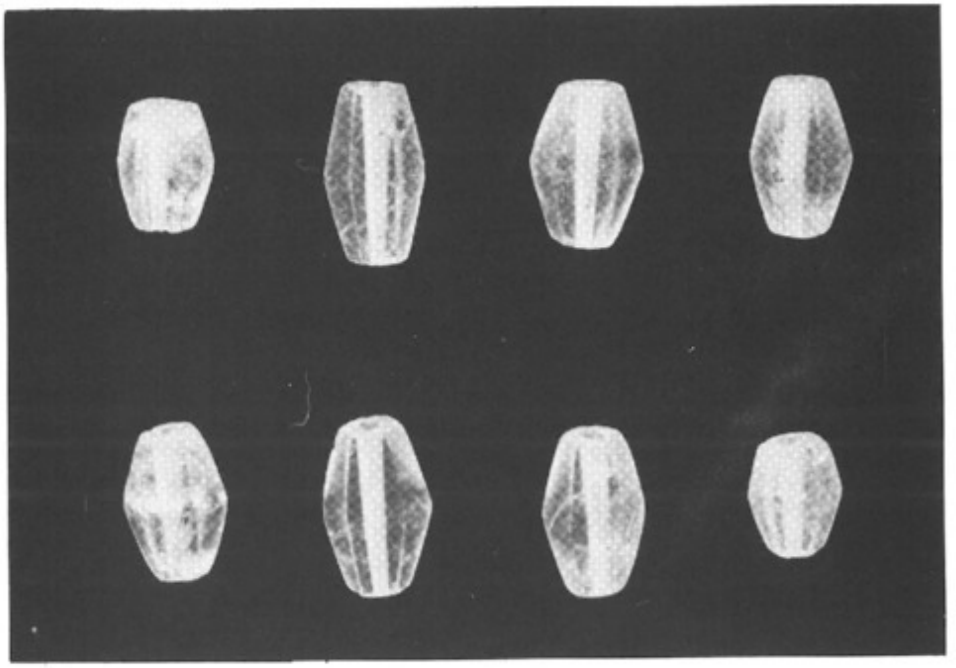
2. 3号墳出土



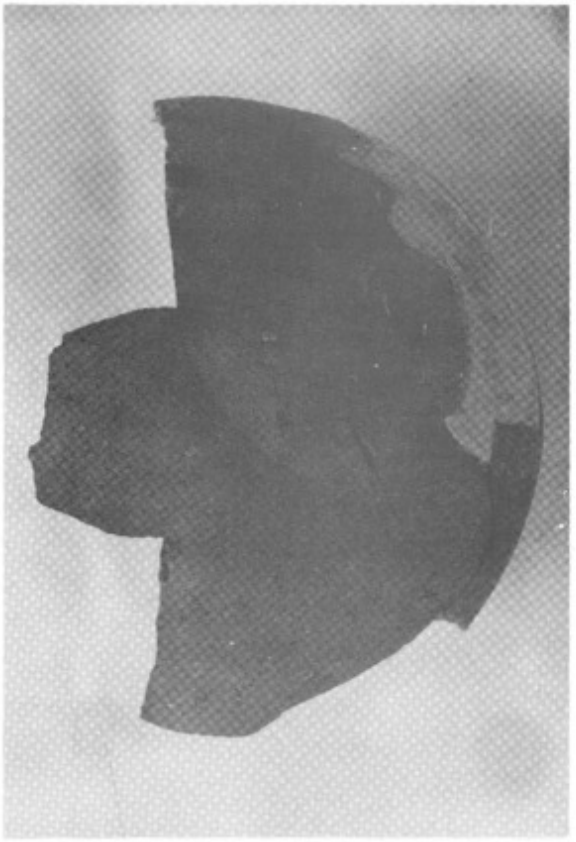
1.　3号墳出土ガラス小玉・環玉



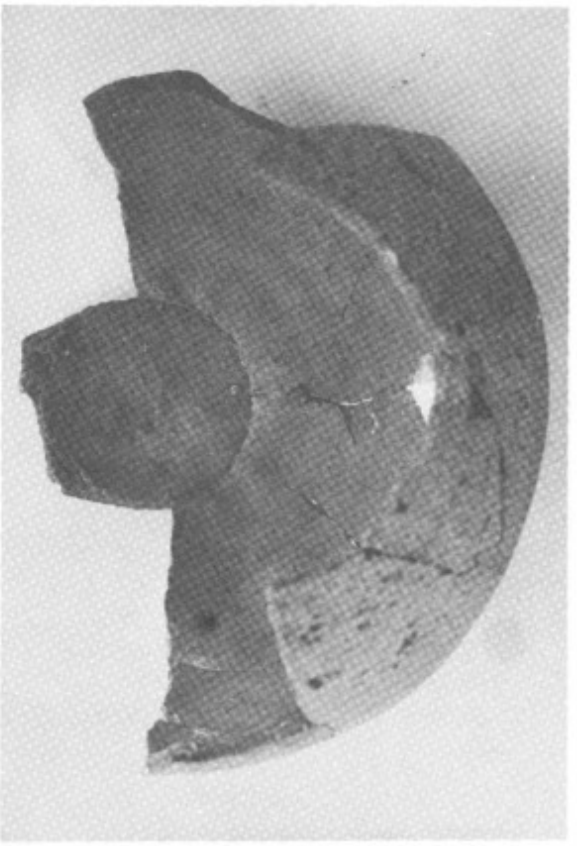
2.　4号墳出土管玉・
ガラス小玉



3.　3号墳出土切子玉



1.　2号墳出土提瓶



2.　左同（内面）

3.　3号墳出土變形土器（口縁部片表面）

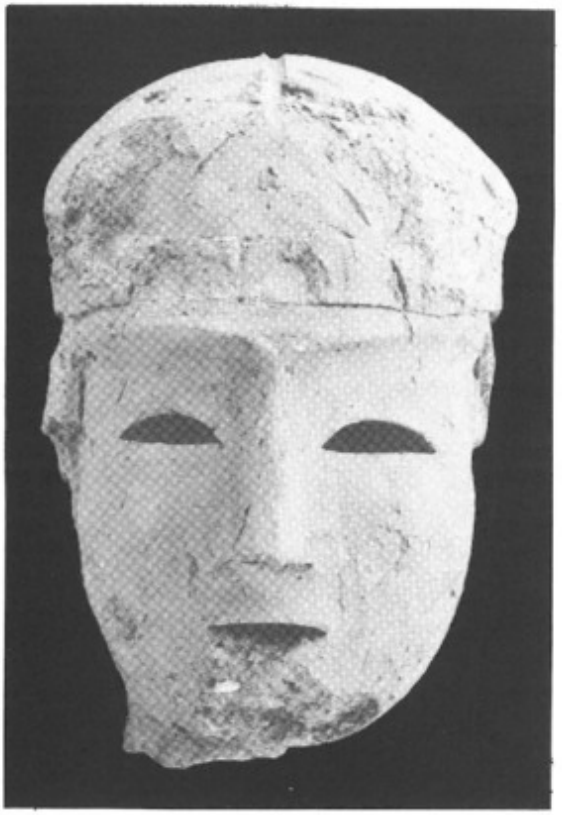
4.　左同（胴部片裏面）

1. 武人埴輪頭部（正面）

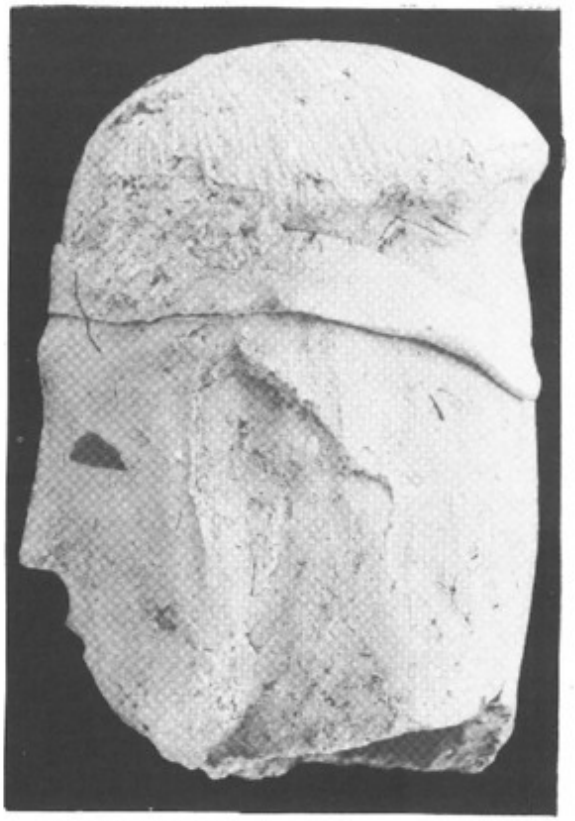
2. 左同（側面）

3. 男子埴輪頭部（正面）

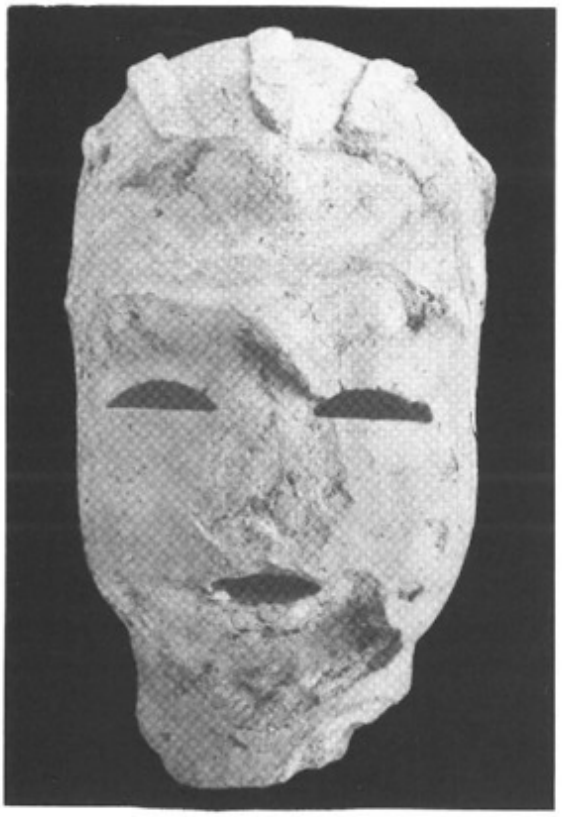
4. 左同（側面）



1. 男子埴輪頭部（正面）

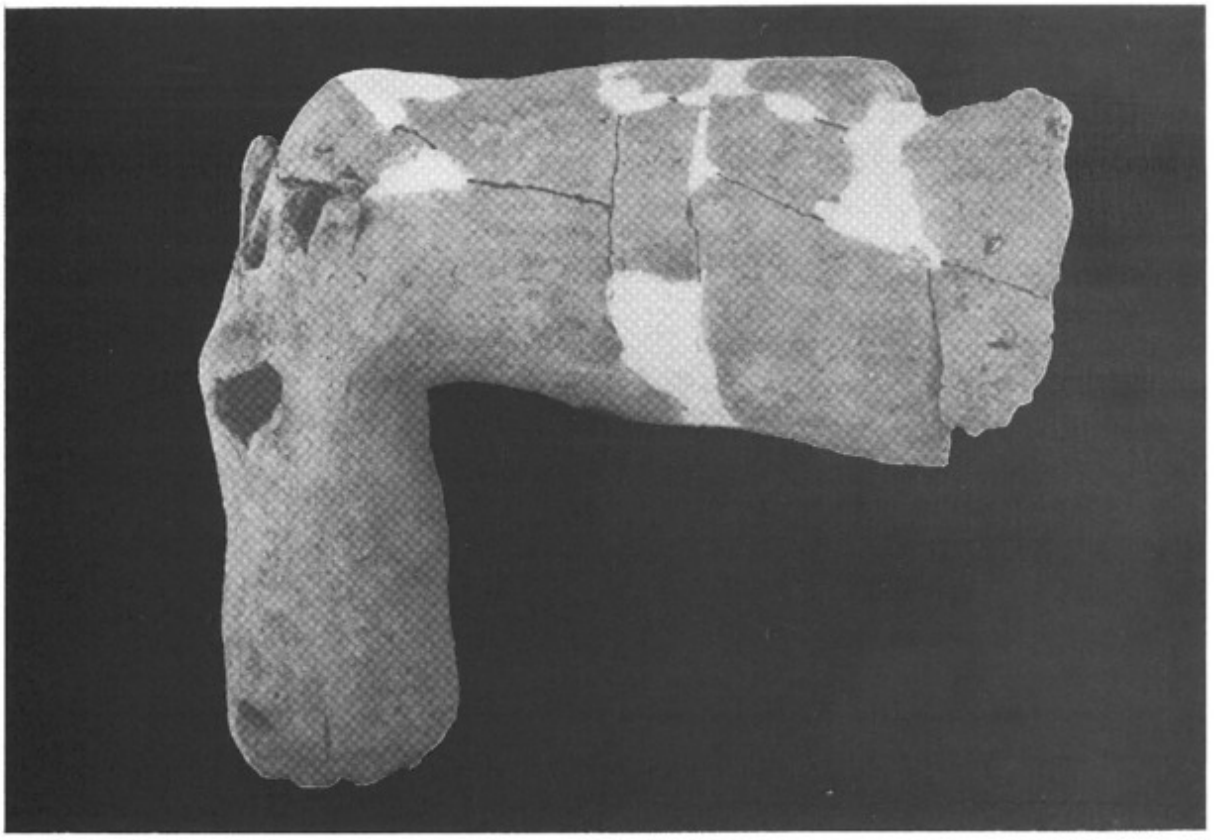


2. 左同（側面）



3. 武人埴輪頭部（正面）

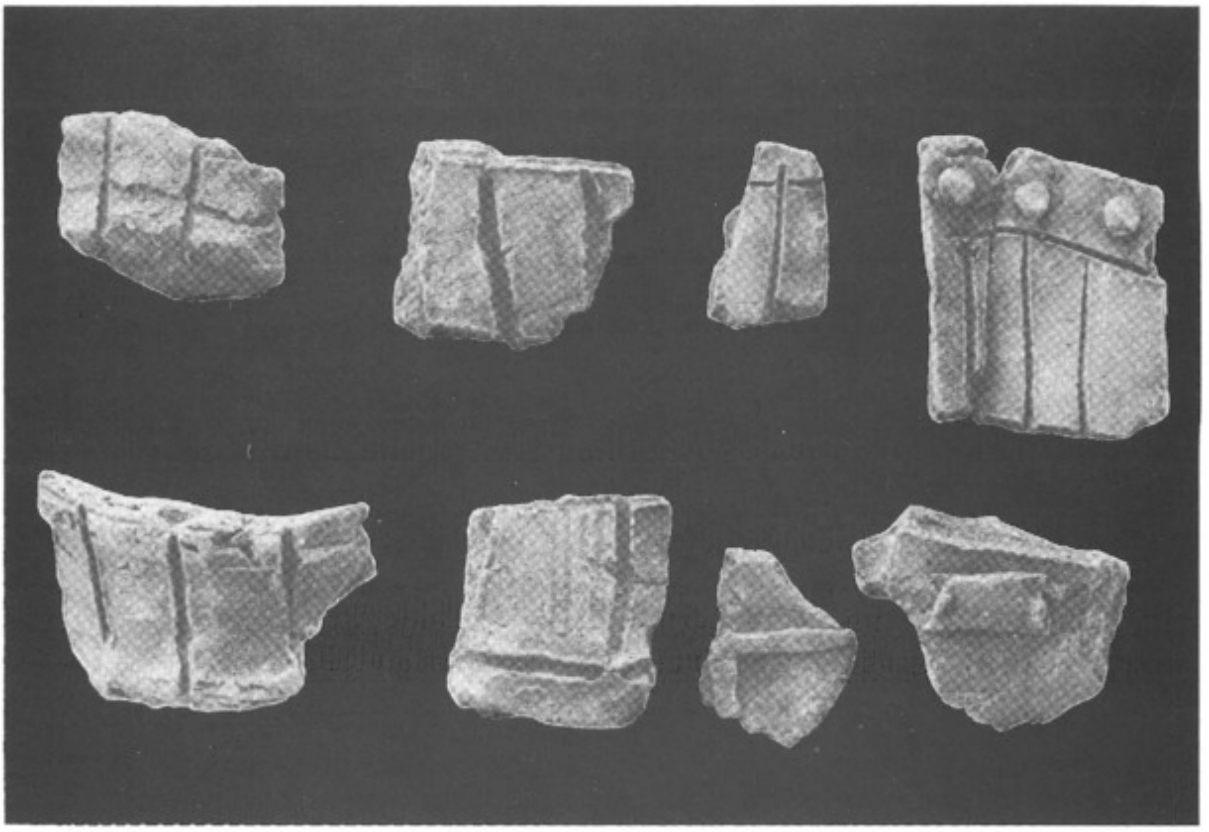
4. 女子埴輪頭部（正面）



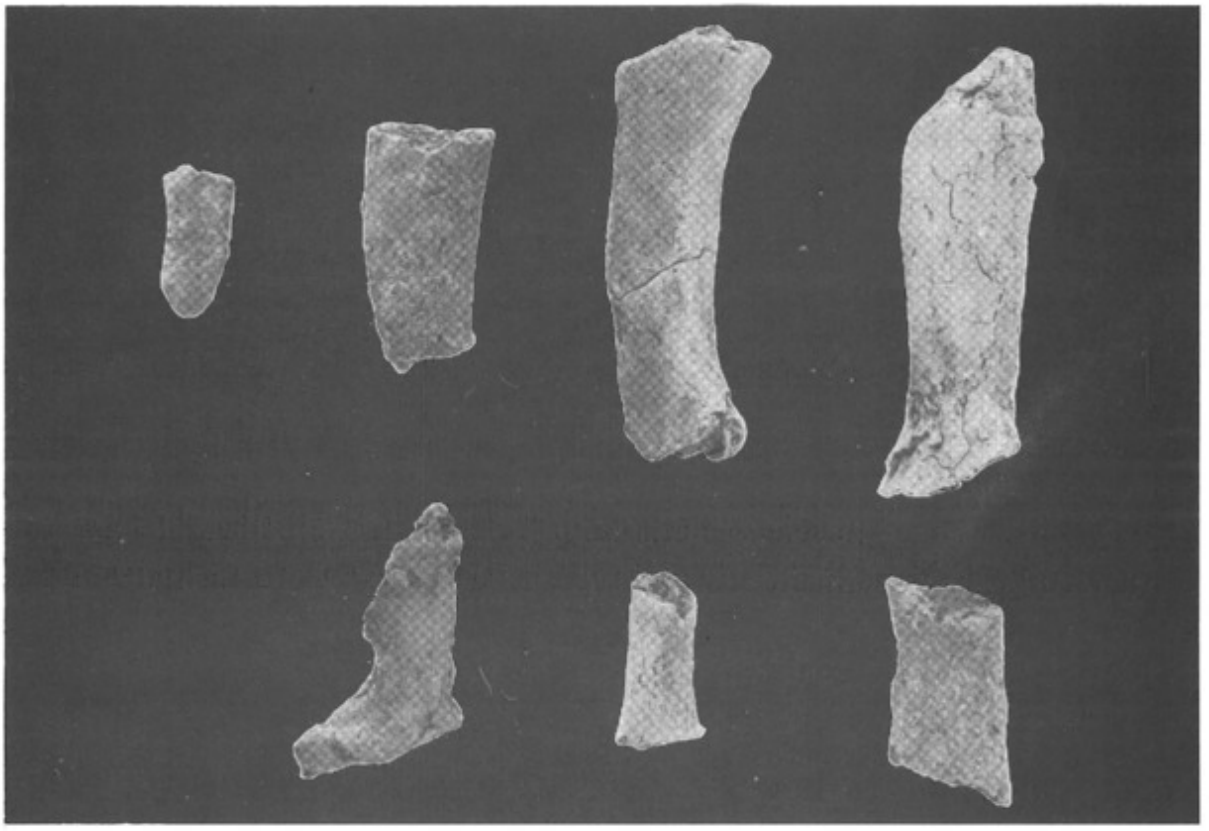
1. 動物埴輪

2. 人物埴輪片

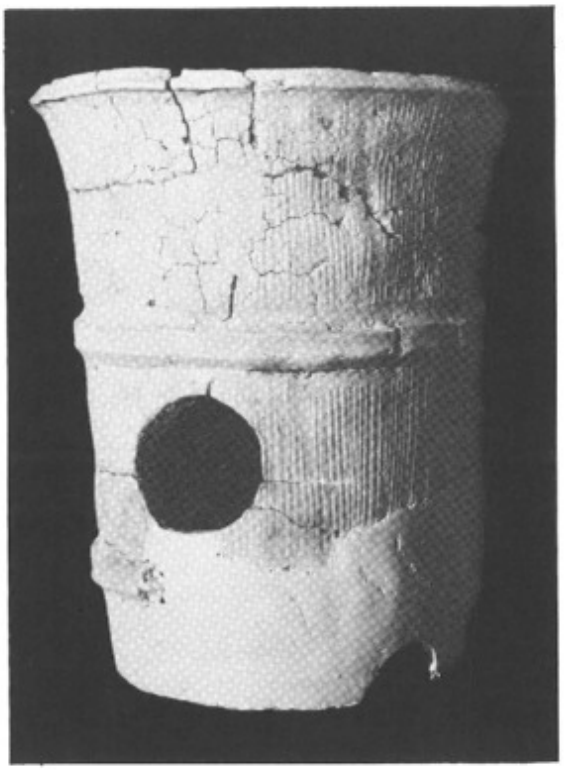
3. 人物埴輪片



1. 人物埴輪片



2. 人物埴輪片



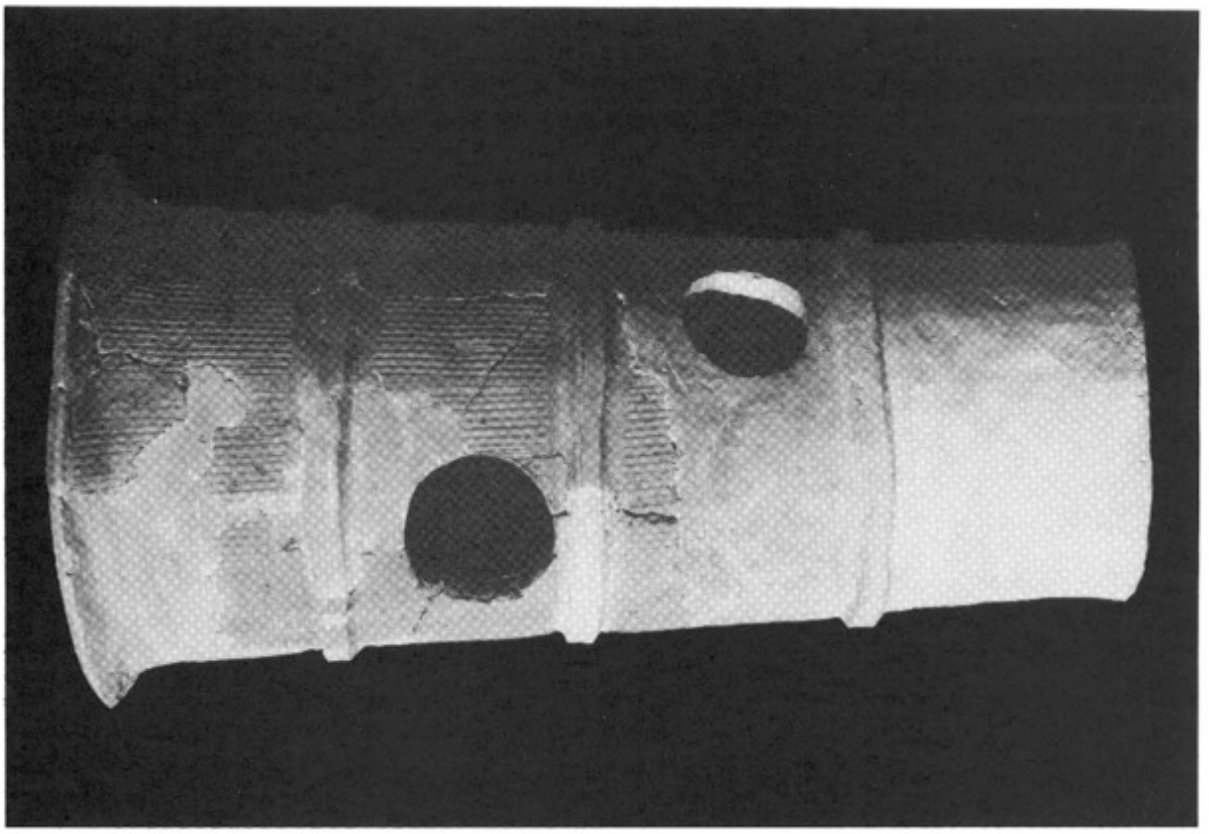
1

2

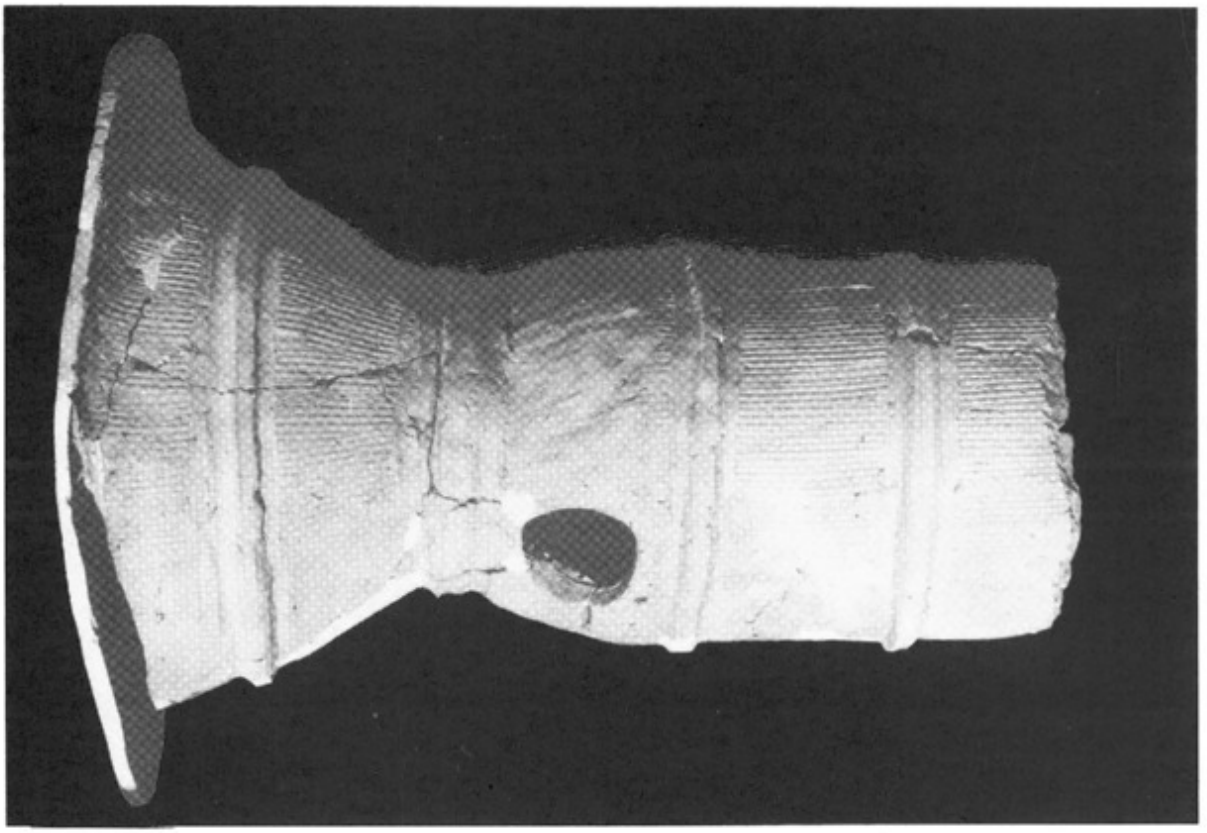
3

4

1～4. 円筒埴輪

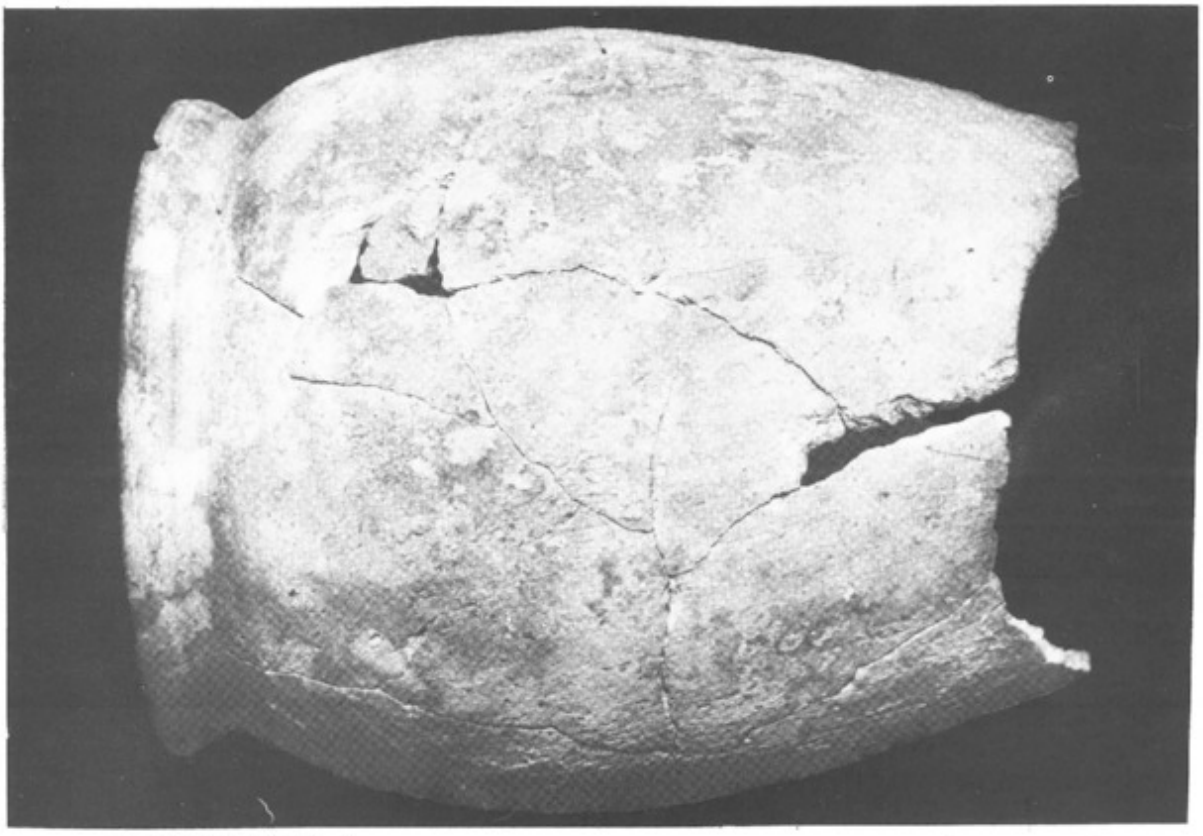


1. 円筒埴輪



2. 朝顔形埴輪

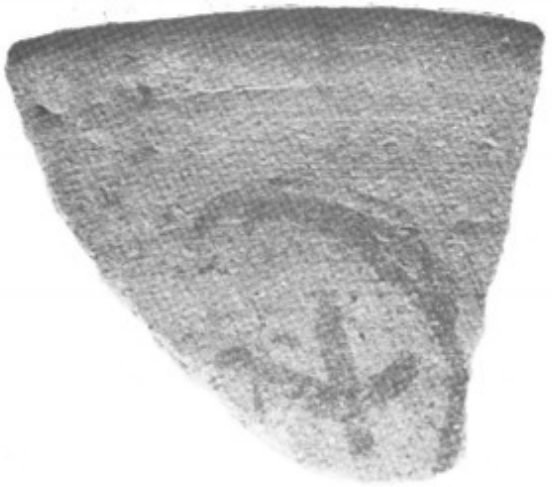
1.　5号住居跡出土変形土器



2.　5号住居跡出土変形土器

1

2



3

4

1～4.　4号住居跡出土

1.　2号住居跡出土砥石

2.　6号住居跡出土ノミ形石器

3.　6号住居跡出土土製紡錘車

4.　6号住居跡出土石製紡錘車

1. 熊塚古墳（南から）

2. 五所皇神社裏古墳と丸山古墳
（矢印右が丸山古墳，南西から）

常陸一騎山

昭和49年3月31日　発行

編　集　　高　根　信　和

発　行　　大宮町教育委員会

茨城県那珂郡大宮町下町217

印　刷　　株式会社　高野高速印刷

水戸市東原2-8-1

TEL (0) 0989